

角閃石と細かい雲母を多く含んでおり、胎土はI群B2類b種に類似する。

188は角閃石を多量に含んだ無文土器である。胎土は神宮寺式によく似ており、文様が摩滅したものと考えられる。

189は外面に縦位にやや細長い楕円文を施し、内面に斜行沈線を施したものである。口縁部が外反し、肩部で屈曲し底部に収束する深鉢の頸部片と考えられ、破片下部に僅かに段が認められる。斜行沈線は明瞭な稜が認められ、半截竹管状工具によって施文されたと考えられる。和田秀寿氏の高山寺Ⅱ式に該当すると考えられる(和田1988)。

190は粗大な楕円文を施した胴部片である。内面に斜行沈線は認められないが、施文部外の可能性も考えられる。

189・190ともに砂粒が多く角閃石を含まず、繊維を一定量含んでいる。

191は黄島式土器である。一固体分が出土しており、口縁部から胴部下半まで接合した。外面は楕円文を縦

位に施し、内面は横位に楕円文を施した後、柵状文を横位に施している。砂粒を多く含んでおり、若干量繊維も含む。楕円文は3単位で、周長は2.3cm、原体径は約0.7cmである。原体長は重複によって判断できないが、7段以上、2.6cm以上になる。柵状文の単位は断定できないが、5単位の可能性が高く、その場合原体の周長は約1.5cm、径は約0.47cmとなる。

早期後葉～末の土器 (192～200)

192は深鉢頸部片である。頸部境界の段上にへらなしい棒状工具を用いて左下がりの刻みを施している。上部の文様は残存しないものの、波状の刺突列を施すものと考えられる。内外面の摩滅により調整は不明瞭であるが、頸部の屈曲部には横位のナデ痕が観察され、また胎土中には繊維を多く含み、器面には抜け痕が観察される。八ッ崎Ⅰ式に比定される。

193～197はⅡ群F類とした繊維を多く含む無文土器である。193の外面には強いナデによる屈曲が認められ、内面には接合部が剝離したことによる擬口縁が観察される。194は胴部下半の破片で、内外面は右下

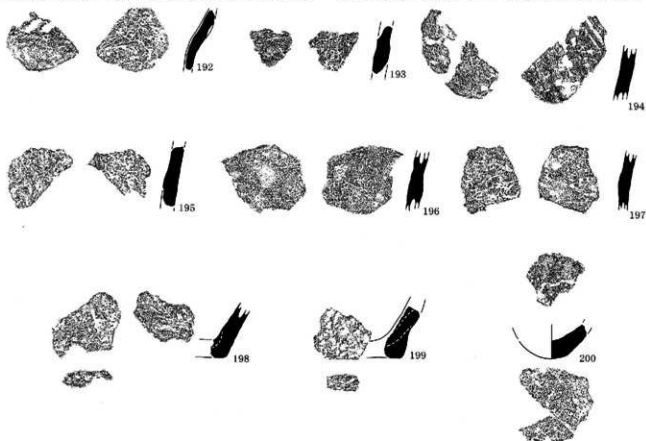


図 77 別所下ノ前遺跡出土土縄文土器⑬ (1/2)

→左上方向のナデ、また内面には一部幅0.2cm程の斜方向の条痕が観察される。195の外表面はナデによる砂粒の動いた痕跡が認められ、右下→左上方向にナデを行なったと考えられる。ただし細かい凹凸も認められることから縄文を施した可能性も残り、判然としなない。内面には横位のナデを行なったことによる屈曲が認められる。

196は内外面をナデとユビオサエで調整を行なっており、指頭圧痕が顕著に認められる。

197の内面には明確な稜が認められ、ここで一度ゆるく屈曲して口縁部に向かい外反する器形になると考えられる。これらの器面内外には繊維痕が明確に観察される。

198～200は底部片である。198・199は底部Ⅱ類としたもので、繊維を多く含む平底である。198は底面から真直ぐに立ち上がり、199は内側にくびれてから立ち上がる器形で、外面に縄文Rを横位に施す。内面は剥離のため調整不明であるが、粘土接合痕が観察され、板状に延ばした粘土を引き上げて、その上に順次粘土を積み上げた様子がうかがえる。200は丸みをおびた尖底で、底部Ⅲ類としたものである。砂粒を多く含む繊維は少ない。早期末に帰属すると考えられる。

早期末前期初頭の土器 (201～264)

201～212はⅢ群BⅠ類としたものである。

201～203は口縁部片で、口縁端部は内外からのオサエナデによって先尖り状を呈する。端部には水平に刻みを入れる。また、口縁直下に二枚貝の腹縁を用いた押引列を2段に施す。放射筋の幅と器面の条痕幅が同じであるため同一原体によるものと考えられる。内面には成形時の指頭圧痕が認められ、その上から器面調整である条痕が施される。204～207は口縁部付近の破片で、押引が1～2段確認されることから201～203の直下に位置すると考えられる。208～211は胴部破片で、208～210は波状ないし構門状のモチーフの条痕を施す。器面調整である横位ないし斜位の条痕を切っているため、明らかな装飾的意図のもとで施されたものである。212は底部付近の破片で、立ち上がりの角度から尖底に近い丸底になると考えられる。211・212の内面および口縁部には指頭圧痕が顕著に認められることから、ユビオサエによって薄く成形した後、下方から上方へ横位・斜位に条痕で調整した

と考えられる。201～212は同一個体と考えられ、復原模式化したものが図79である。やや尖る丸底で直行器形の深鉢になると考えられ、口縁部の押引や胴部のモチーフから東海地方早期末の天神山式に併行するものと考えられる。口縁部の断面形や条痕幅、胎土に少量繊維を含むなど水間遺跡7次調査の資料(奈良市教育委員会2006 図123・8・11・12)に類似するが、押引文・モチーフの有無に差異が認められる。

213は丸みを帯びた先尖り状の口縁部に扁平な隆帯を貼り付けるもので、隆帯上端と側面に刺突を施す。内面口縁部直下には成形時の指頭圧痕が認められ、また外面には右下→左上方向の擦痕が認められる。砂粒を多く含む、極小の雲母・角閃石、繊維を少量含む。東海地方早期末前期初頭の塩屋式に比定される。

214～231はⅢ群EⅠ類としたもので、細かい条痕を内外に施す胴部片である。214は内面に指頭圧痕による段が形成され、そこから口縁部に向かって外反する器形と考えられる。外面は一部剥離しているものの、屈曲部に貝殻腹縁を用いた刺突を行なっている。215・216は同一個体で、ユビオサエで成形した後外面は下→上方、内面は左上がり・右上がりの斜位の条痕を交互に行ない調整している。極小の雲母を多く含む、堅緻な胎土である。216は口縁部の剥離痕が顕著に認められる。220は斜位の条痕の後に、上下に横位の条痕を施す。内面はナデ・ユビオサエで調整されており、粘土紐接合痕が認められる。222・225は他に比べ器壁が厚く、指頭圧痕が深く顕著である。ともに内面は縦位の条痕である。223は破片下部に横位の後斜位の条痕を施し、中央には成形時の指頭圧痕が残る。226は破片中央内外面にナデによる浅い凹線が認められる。内面の条痕は不規則に施され、また内面のユビオサエによる凹部に若干量煤が溜まっている。228は斜位→横位の順に条痕を施している。231の外面は下方から上方への横位→斜位→横位の条痕の切替が顕著に認められ、条痕後に右→左方向へのナデが施されている。

232～257はⅢ群EⅡ類としたもので、EⅠ類に比べ条痕幅は広く、粗い。232は口縁部片で、先尖り状の端部に左下がりの細長い刻みを施す。成形時、口縁内外に強くナデを行なったことにより外反する器形となっている。また、内面にはナデにより形成された面

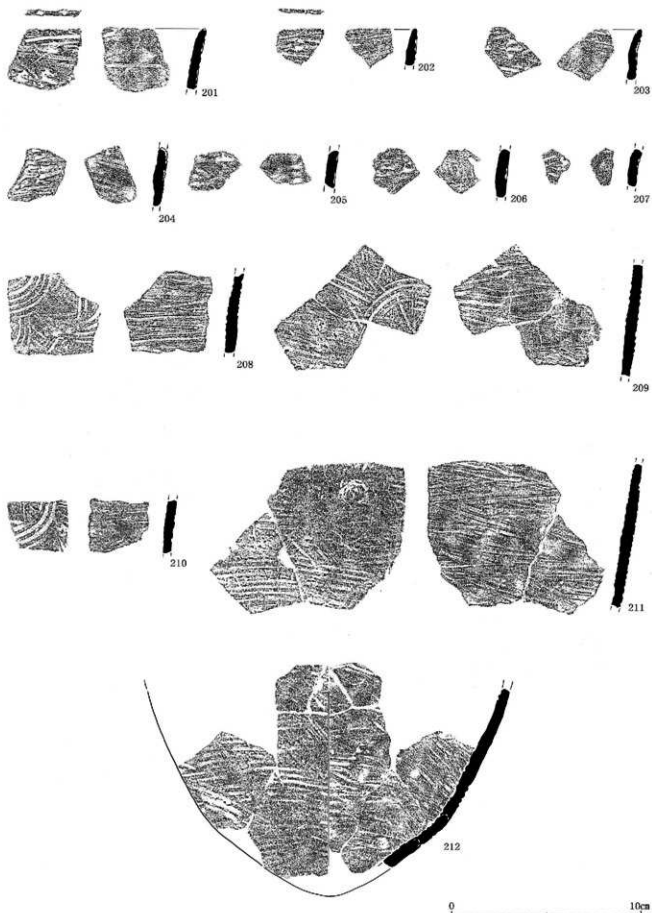


圖 78 別所下ノ前遺跡出土縄文土器④ (1/2)

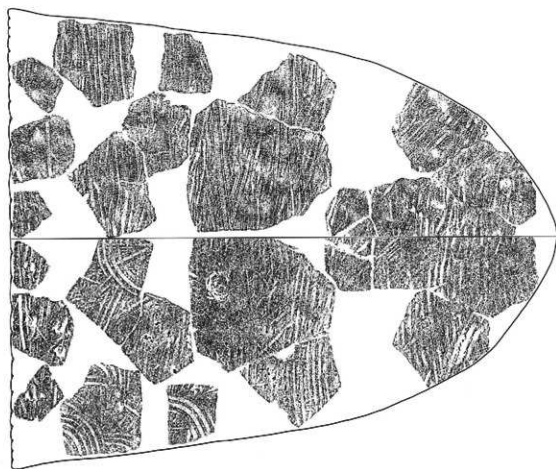


図79 別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑤ (1/2)

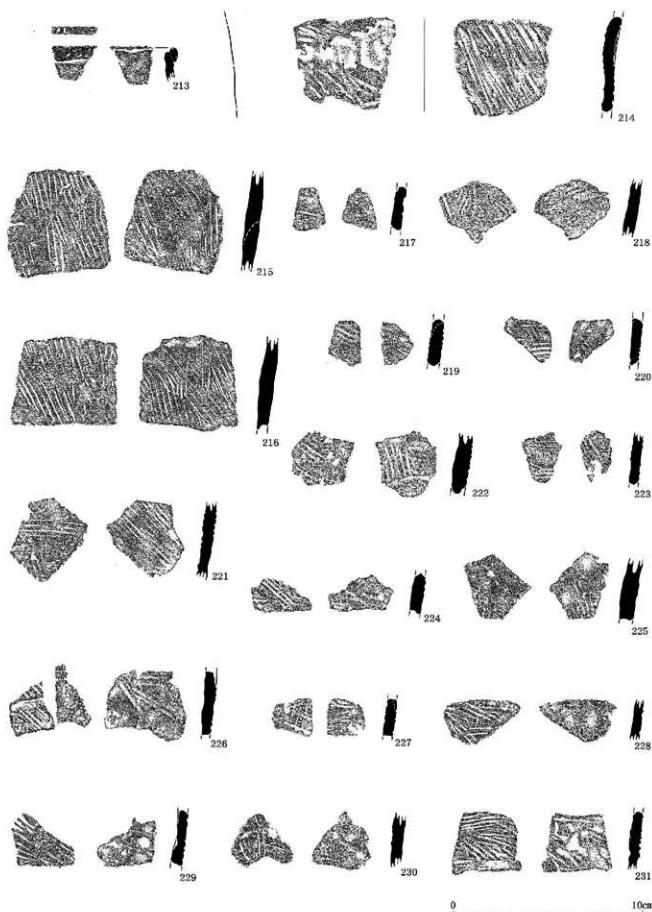


图 80 别所下ノ前遺跡出土縄文土器⑥ (1/2)

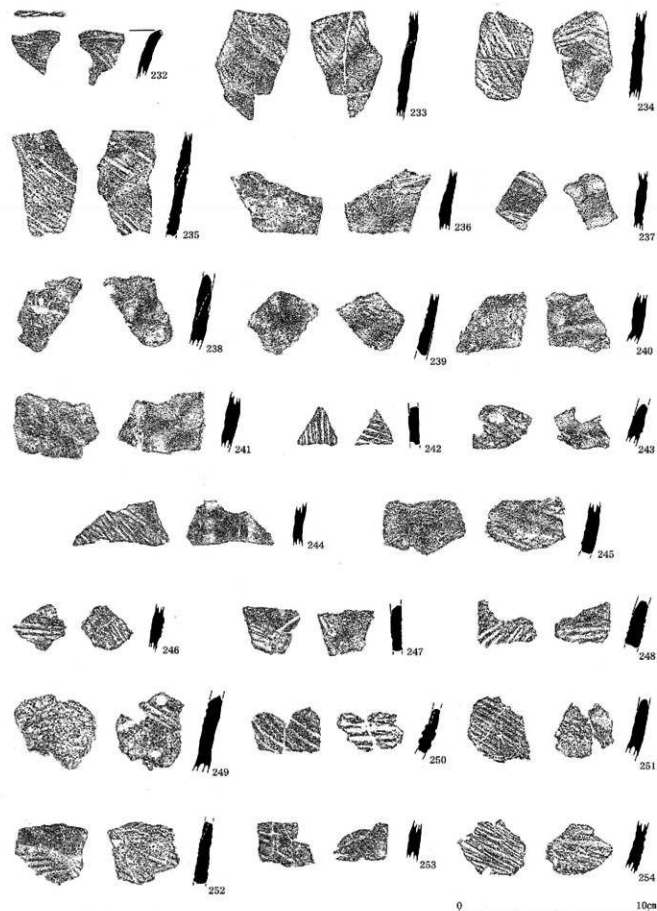


図81 別所下ノ前遺跡出土縄文土器④ (1/2)

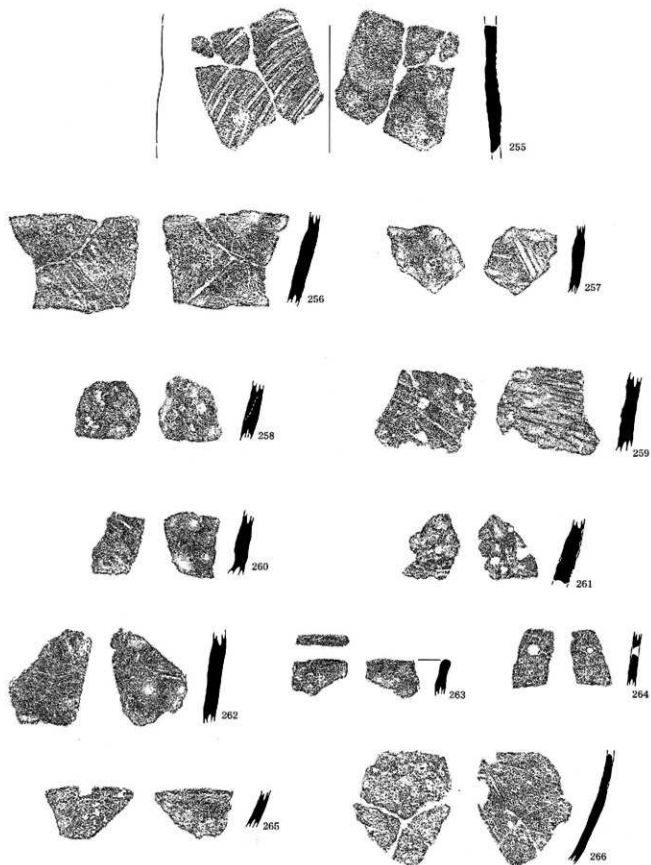


图 82 別所下ノ前遺跡出土縄文土器⑧ (1/2)

表3 別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表①

器物番号	X (m)	Y (m)	H (m)	単位	分類	再興形式	器種	特徴	調査	器種(器)		器主		色別		備考	
										最大	最小	氏名	性別	年齢	職業		色別
1	-148.199.83	-5.354.683	438.714	縄文色 黄粘土	Ⅱ群B	早期集居	深鉢	横線刺文	外ノリ 内ノリ	0.63	0.4	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	
2	-148.076.620	-5.354.683	438.714	縄文色 黄粘土	Ⅱ群B	早期集居	深鉢	横線刺文	外ノリ+内ノリ 内ノリ	0.7	0.5	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	跡面0.25m
3	-148.097.858	-5.355.440	501.538	縄文色	V群B	中環末 後期集居	深鉢	外ノリ 刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.8	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	跡面0.25m
4	-148.083.080	-5.404.132	506.147		Ⅱ群B	早期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.68	0.40	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	
5	-148.053.540	-5.425.921	507.553	黄緑 褐色 シルト	V群A2群	中環末	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.9	0.7	○	○	10YR5/2 灰黄緑	7YR5/4 灰黄	7YR5/4 灰黄	跡面0.15m 跡面0.20m
6	-148.057.858	-5.427.030	507.623	黄緑 褐色 シルト	V群A2群	中環末	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.78	0.7	○	○	7YR5/2 灰黄	7YR5/2 灰黄	7YR5/2 灰黄	跡面0.15m 跡面0.16m
7	-148.092.831	-5.423.034	507.347	黄緑 褐色 シルト	V群A3群	中環末	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	1.0	0.88	○	○	10YR5/2 灰黄緑	7Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	跡面0.25m 跡面0.25m
8	-148.058.308	-5.427.917	507.652	黄緑 褐色 シルト	V群B	中環末 後期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.9	0.7	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	
9	-148.054.480	-5.422.410	507.308	黄緑 褐色 シルト	V群B	中環末 後期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.9	0.7	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	5Y7/1 灰	
10	-148.084.298	-5.422.142	507.673	黄緑 褐色 シルト	V群B	中環末 後期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.88	0.71	○	○	2Y7/2 灰黄	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	
11	-148.070.844	-5.375.989	531.287	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	移居式	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.6	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	
12	○跡面 K04-Y1R5 5002			灰色 粘粉 シルト	Ⅱ群B	移居式	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	1.0	0.8	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	7YR5/4 灰黄	
13	-148.018.114	-5.234.344	481.795	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.65	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	外周付付
14	-148.016.307	-5.201.269	480.673	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.4	○	△	2Y7/2 灰黄	2Y7/1 灰黄	10YR5/4 灰黄緑	
15	-148.022.941	-5.215.288	481.895	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.66	0.35	○	△	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/4 灰黄緑	10YR5/4 灰黄緑	
16	-148.025.898	-5.220.829	481.892	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.78	0.5	○	△	2Y7/4 灰黄	2Y7/4 灰黄	10YR5/4 灰黄緑	
17	-148.014.486	-5.218.267	481.545	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.85	0.5	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	
18	-148.015.021	-5.215.564	481.863	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.35	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/1 灰黄	
19	-148.015.056	-5.214.728	481.796	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.35	○	○	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	2Y7/1 灰黄	
20	-148.015.042	-5.218.318	481.941	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.4	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	
21	-148.014.855	-5.214.944	481.891	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.3	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/1 灰黄	
22	-148.018.024	-5.212.180	481.824	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.4	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/4 灰黄緑	
23	-148.021.631	-5.219.819	482.144	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.6	0.5	○	○	2Y7/2 灰黄	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	
24	-148.014.427	-5.215.587	481.893	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.4	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	28-28 29-31 土器一
25	-148.096.074	-5.200.111	480.637	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.82	0.45	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	外周付付
26	-148.014.423	-5.215.771	481.882	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.4	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	24-28 29-31 土器一
27	-148.009.178	-5.195.183	480.514	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.4	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	10YR5/2 灰黄緑	
28	-148.014.385	-5.219.254	481.864	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.9	0.65	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	24-28 29-31 土器一
29	-148.014.315	-5.214.805	481.899	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.65	○	○	10YR5/2 灰黄緑	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	24-28 29-31 土器一
30	-148.017.053	-5.214.928	481.876	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.6	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/1 灰黄	
31	-148.014.457	-5.215.449	481.882	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.85	0.7	○	○	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	24-28 29-31 土器一
32	-148.009.580	-5.202.713	480.711	黄緑 褐色 シルト	Ⅱ群B	早期末 前期集居	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	1.0	0.8	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	外周付付
33	-148.013.030	-5.193.888	480.218	黄緑 褐色 シルト	V群A1群	北台ⅡC式	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.65	○	○	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	2Y7/1 灰	跡面0.20m 跡面0.25m
34	-148.013.483	-5.193.895	480.189	黄緑 褐色 シルト	V群A1群	北台ⅡC式	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.3	○	○	5Y7/1 灰	2Y7/2 灰黄	5Y7/1 灰	跡面0.15m 跡面0.20m
35	-148.013.030	-5.193.893	480.282	黄緑 褐色 シルト	V群A1群	北台ⅡC式	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.8	0.3	○	○	5Y7/1 灰	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	跡面0.20m 跡面0.20m
36	-148.010.588	-5.195.006	480.518	黄緑 褐色 シルト	V群A1群	北台ⅡC式	深鉢	刺文	外ノリ 内ノリ	0.7	0.5	○	○	10YR5/2 灰黄緑	2Y7/2 灰黄	2Y7/2 灰黄	跡面0.10m 跡面0.20m

と擦痕が顕著に認められる。

233・234は同一個体の胴部片と考えられるものである。いずれも左下がりの細長い指頭圧痕が認められ、233はそれにより外面に緩い段が形成されている。234は右上がりの条痕後に左上がりの条痕を施すため、条痕が山形状を呈している。

235は指頭圧痕と条痕の凹部に煤が溜まっている。

242・244・247・255は頸部が屈曲し、胴部がやや内傾する器形となるものである。242は胴部片で、外面縦位、内面斜位に条痕を施す。擬口縁が顕著に認められる。244は頸部片で、外面に右下→左上方向へ条痕を施す。内面には指頭圧痕が顕著に認められる。247の外面には煤が少量付着している。255は頸部片で、外面は左下→右上に向かって条痕を施す。内面はナ

デ・ユビオサエで調整され、指頭圧痕による凹部に煤が溜まっている。細かい雲母を非常に多く含む。

250・251・254は胴部下半片で、250の内面は横位に深い条痕を施す。251・254は外面に粗い条痕を密に施し、内面は幅広のナデで調整する。両者は同一個体である。

258～262はⅢ群 E 3 類 A 種としたものである。258・260～262は外面に擦痕状の条痕を施し、内面はナデ・ユビオサエで調整を行なう。260・261は胴部下半の破片で、内面には指頭圧痕が顕著に認められる。259は内面に細かいナデで調整を行ない、鋭い稜が形成されている。指頭圧痕も認められる。

263・264は繊維を若干含む無文土器である。263は口縁部片で、ユビオサエで口縁をつまみあげてやや外

表4 別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表②

器物番号	X (m)	Y (m)	H (m)	形状	分類	再製型式	装飾部	特徴	用途	断面(mm)		胎土		色澤		備考	
										最大最小径	厚	厚	内面	外面	内面		外面
37	-149.01447	-5.195426	490.602	黄灰色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外縁上R 内下ナ	0.8	0.7	○		257/2 黄灰	257/2 黄灰	257/2 黄灰	断面0.15cm 厚縁0.15cm
38	-149.01649	-5.194402	490.369	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外縁上R 内下ナ	0.9	0.4	○		257/2 灰白	257/2 黄灰	257/2 黄灰	断面0.2cm 厚縁0.25cm
39	-149.01488	-6.194401	490.637	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外縁上R+ナ 内下ナ	0.7	0.5	○		257/3 灰白	257/3 灰	257/2 黄灰	断面0.15cm 厚縁0.15cm
40	-149.01626	-5.194393	490.475	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外ナ 内下ナ	0.9	0.66	○		257/3 黄灰	257/3 黄灰	257/3 黄灰	
41	-149.01496	-5.194381	490.524	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外ナ 内ナ+ナ+ナ+ナ	0.8	0.5	○		257/3 黄灰	257/3 黄灰	257/3 黄灰	
42	-149.00970	-5.194404	490.561	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外ナ 内下ナ	0.8	0.6	○		257/3 灰	257/3 黄灰	1970/1 黄灰	
43	-149.00970	-5.194416	490.558	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外ナ 内下ナ	0.8	0.6	○		257/3 黄灰	1970/3 にがい黄灰	257/3 黄灰	
44	-149.00935	-5.195516	490.526	黄色 シルト	V群A類	北白川C式	深縁 胴部		外ナ 内下ナ	0.7	0.5	○		257/3 黄灰	1970/3 にがい黄灰	257/3 黄灰	
45	-149.00944	-8.213172	492.120	黄灰色 シルト	V群B類	中野系 後前期前	深縁 胴部下		外ノ縁上 内下ナ	0.78	0.68	○		257/3 黄灰	257/3 黄灰	257/4 黄灰	
46	-149.00920	-5.195476	490.538	黄色 シルト	V群B類	中野系 後前期前	深縁 胴部下		外ナ 内下ナ	0.7	0.5	○		257/3 黄灰	1970/3 にがい黄灰	257/3 黄灰	
47	-149.01022	-5.213254	491.952	黄色 シルト	V群B類	中野系 後前期前	深縁 胴部下		外ノ縁上 内下ナ	0.79	0.7	○		1970/4 にがい黄灰	257/4 黄灰	257/3 黄灰	
48	-149.01630	-5.214487	492.061	黄色 シルト	V群B類	中野系 後前期前	深縁 胴部下		外ナ 内下ナ	0.7	0.64	○		257/3 黄灰	257/4 にがい黄灰	1970/4 にがい黄灰	
49	-149.01514	-5.211358	491.654	黄色 シルト	V群B類	中野系 後前期前	深縁 胴部下		外ナ 内下ナ	0.78	0.8	○		257/3 黄灰	1970/3 にがい黄灰	257/2 黄灰	
50	-149.01804	-8.212800	491.857	黄灰色 シルト	V群B類	中野系 後前期前	深縁 胴部下		外ナ 内ノ縁上	0.9	0.56	○		257/4 にがい黄灰	257/4 黄灰	257/4 黄灰	
51	-149.01649	-6.194389	490.558	黄色 シルト	底蓋直縁	北白川C式	深縁 胴部		外ノ縁上R+ナ 内下ナ	1.18	0.46	○		257/2 黄灰	257/3 黄灰	257/2 黄灰	断面0.25cm 厚縁0.25cm
52	-149.01387	-5.218476	491.861	黄灰色 砂質土	V群	藤原式	深縁 口縁部		外ノ縁上+ナ 内下ナ	0.69	0.3	○		細/ 暗灰	257/2 黄灰	257/3 黄灰	
53	-149.00520	-6.127322	478.729	黄灰色 シルト	I群B1類-A類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.4	0.34	○	○	1970/3 にがい黄灰	257/2 黄灰	257/2 黄灰	257/2 黄灰
54	-149.00877	-5.128455	478.123	黄灰色 砂質土	I群B1類-B類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.5	0.33	○	○	257/2 黄灰	257/2 黄灰	1970/4 にがい黄灰	
55	-149.00710	-5.130332	478.969	黄灰色 砂質土	I群B1類-C類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.46	0.3	○	○	257/2 黄灰	1970/2 にがい黄灰	1970/4 にがい黄灰	
56	-149.00688	-5.130201	478.004	黄灰色 シルト	I群B1類-D類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.4	0.3	○	○	1970/4 にがい黄灰	1970/4 にがい黄灰	257/4 にがい黄灰	
57	-149.00673	-5.130741	478.893	黄灰色 砂質土	I群B1類-E類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.4	0.3	○	○	257/2 黄灰	257/2 黄灰	1970/4 にがい黄灰	
58	-149.00712	-6.129220	478.001	黄灰色 砂質土	I群B1類-F類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.46	0.4	○	○	257/2 黄灰	257/2 黄灰	1970/4 にがい黄灰	
59	-149.00684	-5.129744	478.011	黄灰色 シルト	I群B1類-G類	神宮寺式	深縁 胴部	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.4	0.3	○	○	257/1 黄灰	1970/3 にがい黄灰	1970/2 にがい黄灰	
60	-149.00718	-5.128466	478.006	黄灰色 シルト	I群B1類-H類	神宮寺式	深縁 縁部付直	神足文	外ノ縁上直文 内下ナ	0.45	0.31	○	○	1970/4 にがい黄灰	1970/2 にがい黄灰	1970/2 にがい黄灰	
61	-149.00673	-6.130474	478.251	黄色 シルト	I群B3類	山形遺跡 一黄灰色	深縁 胴部	神足文	外ノ山形文 内下ナ	0.65	0.8	○	△	257/3 黄灰	257/4 黄灰	257/1 黄灰	

表5 別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表③

番号	X (m)	Y (m)	H (cm)	形状	分類	時期型式	器種	特徴	観察	器高(cm)		器径(cm)		器厚		備考															
										最大	最小	最大	最小	口内	口外		口内	口外													
59	-148,000.841	-5,140.369	478.813	黄色シスト	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	押型文	外ノ器底文(内)???	0.8	0.80	△	△	○	2.575/1 黄灰	2.575/1 黄灰	2.575/1 黄灰														
60	-148,001.336	-5,137.357	478.381	黄色シスト	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	押型文	外ノ器底文(内)???	0.8	0.80	△	△	○	2.575/2 黄灰	2.575/1 黄灰	2.575/1 黄灰	器底3mm 深鉢1.87													
61	-148,001.873	-5,138.852	478.434	黄灰色 砂質土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	押型文	外ノ器底文(内)???	0.8	0.8	△	△	○	2.577/2 黄灰	2.574/1 黄灰	2.574/2 黄灰														
62	-148,003.061	-5,142.296	478.640	黄灰色 砂質土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.86	0.40	△	△	○	375/1 オリーブ黒	2.577/2 黄灰	2.575/2 黄灰														
63	-148,999.242	-5,140.491	478.503	黄灰色 砂土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.86	0.44	△	△	○	2.577/3 黄灰	2.577/3 黄灰	874/1 灰														
64	D遺跡區 X34-Y46区 中世古墳区	灰色土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	3C 474	0.90	0.40	△	△	○	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰	2.575/3 黄灰	器底3mm 深鉢1.70														
65	-148,995.693	-5,141.841	478.003	黄灰色 砂土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.7	0.8	△	△	○	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰														
66	-148,998.827	-5,138.028	478.300	黄灰色 砂質土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.78	0.8	△	△	○	10796/4 黄灰	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰														
67	-148,998.047	-5,141.924	478.883	黄灰色 砂質土	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.88	0.66	△	△	○	2.575/3 黄灰	2.575/2 黄灰	2.575/3 黄灰	器底3mm 深鉢0.20													
68	-148,998.284	-5,140.652	478.879	黄色シスト	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	押型文	外ノ器底文(内)???	0.85	0.4	○	○	◎	10796/4 黄灰	2.577/2 黄灰	575/1 オリーブ黒	器底3mm 深鉢1.70													
	-148,000.280	-5,141.063	478.888	黄色シスト																											
	-148,999.183	-5,139.839	478.583	黄色シスト																											
	-148,999.807	-5,139.269	478.172	黄色シスト																											
	-148,000.514	-5,140.828	478.588	黄色シスト																											
	-148,999.972	-5,142.978	478.554	黄色シスト																											
	-148,000.323	-5,138.781	478.580	黄色シスト																											
	-148,999.838	-5,140.886	478.613	黄色シスト																											
	-148,000.128	-5,140.580	478.638	黄色シスト																											
	-148,000.184	-5,140.343	478.641	黄色シスト																											
	-148,000.248	-5,140.426	478.646	黄色シスト																											
	-148,000.247	-5,140.572	478.638	黄色シスト																											
	-148,000.419	-5,140.828	478.644	黄色シスト																											
	-148,000.517	-5,140.482	478.825	黄色シスト																											
	-148,000.308	-5,140.457	478.825	黄色シスト																											
69	-148,000.241	-5,140.478	478.588	黄色シスト	I期D層	「山芦遺跡」	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.78	0.8	○	○	◎	2.575/1 黄灰	574/1 黄灰															
-148,000.182	-5,140.364	478.581	黄色シスト																												
-148,000.138	-5,140.634	478.591	黄色シスト																												
-148,000.188	-5,140.115	478.601	黄色シスト																												
-148,000.138	-5,140.290	478.480	黄灰色 砂土																												
70	-148,982.878	-5,148.054	478.524	黄色シスト														Ⅲ期A層	葦山下層式	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	0.78	0.8	○	○	◎	2.575/1 黄灰	574/1 黄灰		
71	-148,982.688	-5,147.313	478.524	黄色シスト														Ⅲ期A層	葦山下層式	深鉢 深鉢	捺火文	外ノ器底文(内)???	1.0	0.8	○	○	◎	2.575/1 黄灰	574/1 黄灰	573/1 オリーブ黒	
72	-148,986.211	-5,126.974	478.223	黄色シスト														Ⅲ期C2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???			○	○	◎	2.575/1 黄灰	2.575/1 黄灰	器底0.25mm 深鉢0.35mm	
73	-148,998.242	-5,127.029	478.217	黄色シスト														Ⅲ期C2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???			○	○	◎	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰	器底0.40mm 深鉢0.35mm	
74	-148,999.501	-5,128.983	478.564	黄色シスト														Ⅲ期C2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	1.3	0.8	○	○	◎	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰	器底0.30mm 深鉢0.40mm	
75	-148,982.428	-5,147.441	478.751	黄色シスト														Ⅲ期C2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.4	0.6	○	○	◎	2.575/1 黄灰	2.575/1 黄灰	器底0.30mm 深鉢0.40mm	
76	-148,984.324	-5,128.984	478.400	黄色シスト														Ⅲ期C2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.86	0.85	○	○	◎	2.573/2 黄灰	875/1 黄灰	873/1 オリーブ黒	器底0.20mm 深鉢0.40mm
77	D遺跡區 X30-Y42区 中世古墳区	灰色土	Ⅲ期C2層	早期後葉														深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.78	0.85	○	○	◎	◎	◎	2.575/2 黄灰	2.575/1 黄灰	2.574/1 黄灰	器底0.40mm 深鉢0.40mm
78	-148,984.953	-5,140.380	478.480	黄色シスト														Ⅲ期C2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.8	0.7	○	○	◎	2.575/2 黄灰	2.575/1 黄灰	874/1 黄灰	器底0.30mm 深鉢0.20mm
79	D遺跡區 X34-Y46区 中世古墳区	灰色土	Ⅲ期C2層	早期後葉														深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.8	0.66	○	○	◎	◎	◎	2.575/2 黄灰	2.575/1 黄灰	2.575/1 黄灰	器底0.25mm 深鉢0.40mm
80	-148,984.382	-5,127.783	478.238	黄色シスト	Ⅲ期F1層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	1.06	0.85	○	○	◎	2.573/3 黄灰	574/1 黄灰	2.573/1 黄灰														
81	-148,984.918	-5,128.207	478.401	黄色シスト	Ⅲ期F1層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.75	0.55	○	○	◎	2.575/2 黄灰	575/1 黄灰	2.574/1 黄灰														
82	D遺跡區 X30-Y44区 中世古墳区	灰色土	Ⅲ期F1層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	1.1	0.6	○	○	◎	◎	◎	2.577/2 黄灰	2.575/1 黄灰	874/1 黄灰														
83	-148,986.448	-5,149.255	478.637	黄色シスト	Ⅲ期F1層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	1.4	1.15	○	○	◎	2.575/2 黄灰	2.575/1 黄灰	2.574/1 黄灰														
84	D遺跡區 X30-Y38区 中世古墳区	灰色土	Ⅲ期F2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	1.8	1.45	○	○	◎	◎	◎	2.577/2 黄灰	2.574/1 黄灰	10794/1 黄灰														
85	-148,000.681	-5,127.588	478.521	黄色シスト	Ⅲ期G2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.5	0.3	○	○	◎	2.575/2 黄灰	2.575/4 黄灰	575/2 黄灰	器底0.7mm													
86	-148,987.702	-5,128.085	478.348	黄色シスト	Ⅲ期G2層	早期後葉	深鉢 深鉢	縞線文	外ノ器底文(内)???	0.3	0.3	○	○	◎	2.575/2 黄灰	2.575/2 黄灰	2.574/1 黄灰														

表8 別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表⑥

番号 番号	X (m)	Y (m)	H (m)	形状	分類	再興式	器種 部位	特徴	調査 位置	器量(mm)	胎土	文様		備考	
												外周	内周		
153	-140.003.730	-5.116.041	474.553	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/4 にのみ 1979/4 にのみ	1979/4 にのみ	
156	-140.003.245	-5.116.110	474.764	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	18と同一
161	-140.003.657	-5.116.043	474.677	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	1979/4 にのみ 1979/3 にのみ	1979/2 にのみ	18と同一
162	-140.000.481	-5.118.229	476.310	黄色色 シルト	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/4 にのみ 1979/4 にのみ	1979/4 にのみ	器種不明 長さ1.67
163	-140.003.440	-5.116.107	474.350	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	1979/4 にのみ 1979/4 にのみ	1979/4 にのみ	
164	-140.003.813	-5.116.137	474.450	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
165	-140.003.721	-5.117.087	474.648	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.40 0.36	○	○	1979/3 にのみ 1979/2 にのみ	1979/3 にのみ	
166	-140.003.724	-5.115.950	474.308	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
167	-140.003.687	-5.116.313	474.654	黄色色 シルト	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
168	-140.008.537	-5.117.239	474.697	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/4 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
169	-140.002.819	-5.116.002	474.584	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	1979/3 にのみ 1979/2 にのみ	1979/2 にのみ	
170	-140.004.752	-5.116.852	474.374	灰色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/4 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
171	-140.003.876	-5.116.005	474.613	黄色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	1979/4 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
172	-140.003.245	-5.116.229	474.820	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.40 0.4	○	○	257/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
173	-140.005.621	-5.116.518	474.362	灰色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.6 0.4	○	○	258/3 にのみ 257/4 にのみ	258/3 にのみ	
174	遺1 御膳庭 西側 SK01			黄色色 シルト	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.5 0.45	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/4 にのみ	
175	-140.000.769	-5.117.110	474.826	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.5 0.4	○	○	1979/3 にのみ 1979/4 にのみ	1979/4 にのみ	184-186 と同一
176	-140.000.459	-5.117.168	474.835	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.45 0.35	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/4 にのみ	172と同一
177	-140.000.157	-5.116.965	474.765	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	1979/4 にのみ 1979/3 にのみ	1979/4 にのみ	178と同一
178	-140.000.805	-5.117.825	474.841	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.40 0.30	○	○	1979/3 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
179	-140.000.148	-5.117.001	474.796	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.35	○	○	257/2 にのみ 1979/4 にのみ	1979/8 にのみ	
180	-140.000.441	-5.116.413	474.800	黄色色 シルト	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.5 0.4	○	○	1979/2 にのみ 1979/2 にのみ	257/4 にのみ	
181	-140.000.528	-5.116.710	474.800	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.40 0.35	○	○	257/5 にのみ 1979/4 にのみ	1979/4 にのみ	
182	-140.000.676	-5.116.881	474.754	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.35 0.45	○	○	1979/3 にのみ 257/1 にのみ	1979/4 にのみ	
183	-140.001.017	-5.117.719	474.818	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.40 0.35	○	○	1979/3 にのみ 257/2 にのみ	257/3 にのみ	
184	-140.000.783	-5.117.370	474.811	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.4	○	○	1979/3 にのみ 258/3 にのみ	1979/4 にのみ	175-186 と同一
185	遺庫裏 北30-122番	50.39		灰色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.80 0.4	○	○	1979/4 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
186	-140.000.800	-5.116.674	474.817	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.3 0.35	○	○	1979/3 にのみ 258/2 にのみ	1979/4 にのみ	175-184 と同一
187	-140.000.587	-5.120.850	475.320	灰色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 山形文 内) 下	0.6 0.45	○	○	1979/4 にのみ 1979/4 にのみ	257/3 にのみ	
188	-140.014.810	-5.117.830	474.921	褐色色 砂質土	1群62器種	神宮寺式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 下	0.4 0.3	○	○	257/2 にのみ 1979/3 にのみ	1979/3 にのみ	
189	-140.008.084	-5.121.906	474.154	褐色色 砂質土	1群62器種	高山寺式	頸部 胴部	押文	外) 横文 内) 下	1.4 0.95	○	○	258/2 にのみ 257/1 にのみ	258/1 にのみ	
190	遺庫裏裏 表裏				1群62器種	高山寺式	頸部 胴部	押文	外) 横文 内) 下	1.0 0.8	○	○	258/2 にのみ 1979/2 にのみ	1979/1 にのみ	
191	-140.001.134 -140.007.403	-5.069.195 -5.132.236	472.360 472.940	褐色 粘質土	1群62器種	黄島式	頸部 胴部	押文	外) 船形文 内) 横文	1.0 0.45	○	△	258/1 にのみ 258/2 にのみ	1979/3 にのみ	器種不明 長さ2.5m
192	-140.002.616	-5.119.126	475.006	褐色色 シルト	2群62器種	八ツ井式	頸部 胴部	押文	外) 山形文 内) 下		○	○	1979/3 にのみ	1979/1 にのみ	
193	-140.000.432	-5.100.042	473.906	褐色 粘質土	2群62器種	早稲池集	頸部 胴部	押文	外) 下 内) 下	0.8 0.6	○	○	1979/1 にのみ	1979/1 にのみ	
194	-140.000.535	-5.090.073	473.840	褐色色 シルト	2群62器種	早稲池集	頸部 胴部	押文	外) 下 内) 下	0.8 0.6	○	○	257/3 にのみ	1979/4 にのみ	
195	-140.000.872	-5.119.111	475.100	褐色 粘質土	2群62器種	早稲池集	頸部 胴部	押文	外) 下 内) 下	0.8 0.6	○	○	257/2 にのみ	1979/1 にのみ	

表9 別所下ノ前遺跡出土土器土器観察表⑦

番号	X (m)	Y (m)	H (m)	産状	分類	時期型式	器種	特徴	調査	断面(mm)		土質		位置		層位	備考		
										厚さ	口径	容積	内径	外径	高さ				
194	E地区 西30-08-Y003A	5D23		黄褐色 砂焼シ	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付 内ノリ付・2C・2F・2E	3.8	0.6	○	○	○	○	10Y8/2 灰黄焼	2.8Y/2 灰	2Y5/1 灰	オゾリ層
197	-148.994402	-5.194.003	473.990	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付 内ノリ付	3.7	0.6	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	2Y4/1 灰	
198	-148.992370	-5.096.919	473.987	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付 内ノリ付	1.1	0.6	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	10Y8/2 焼灰	
199	E地区 西30-Y002A	中世中後葉		黄褐色 砂焼土	II類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付			○	○	○	○	2Y5/1 黄焼	10Y8/2 灰焼		断面0.4cm 厚層0.4cm
200	-148.997030	-5.102.630	473.975	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付 内ノリ付	1.0	0.6	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y4/1 黄焼	10Y8/2 灰黄焼	
201	-148995.1257	-5089.9606	473.72	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.5	0.3	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	2Y5/1 黄焼	10Y8/2 に灰黄焼	
202	-148.995.710	-5.209.024	473.690	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.5	0.3	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	2Y4/1 黄焼	2Y5/2 焼灰	
203	-148996.1028	-5089.4323	473.667	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.40	0.20	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/1 黄焼	10Y8/2 に灰黄焼	
204	-148996.8009	-5089.2857	473.644	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.20	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	
205	-148.998.482	-5.100.280	473.602	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.6	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	
206	-148.997.145	-5.097.440	473.662	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.5	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	
207	E地区 西30-Y002A			黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	10Y8/2 灰黄焼	
208	-148996.0508	-5096.7234	473.716	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.3	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y4/1 黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	
209	-148996.2694	-5099.5211	473.684	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.4	0.5	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	
210	-148.995.288	-5.100.147	473.705	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.48	0.4	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	
211	-148996.1088	-5089.6372	473.722	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.2	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	
212	-148.994.825	-5.096.581	473.694	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.4	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	
	-148992.9693	-5099.5774	473.667	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付			○	○	○	○	2Y5/5/4 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	
	-148.995.967	-5.100.643	473.698	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付			○	○	○	○	2Y5/5/4 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	
213	-148.014.734	-5.103.829	473.530	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.3	0.30	○	○	○	○	2Y5/1 黄焼	2Y4/1 黄焼	2Y5/1 黄焼	
214	-148.013.598	-5.098.889	473.539	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.60	0.5	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	2Y5/5/4 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	
215	-148.994.147	-5.106.840	474.112	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.5	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰
216	-148.994.477	-5.116.883	474.970	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.6	○	○	○	○	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰	2Y5/2 焼灰
217	E地区 西34-Y002A	中世中後葉		黄褐色 土	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.60	0.40	○	○	○	○	2Y7/4 黄焼	2Y7/4 黄焼	10Y7/1 黄焼	
218	E地区 西34-Y002A	中世中後葉		黄褐色 土	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.3	○	○	○	○	2Y5/5/4 に灰黄焼	2Y5/5/4 に灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	
219	-148.010.844	-5.098.220	473.960	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.60	0.5	○	○	○	○	2Y5/1 黄焼	10Y8/2 灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	
220	E地区 西34-Y002A	中世中後葉		黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.8	0.40	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/2 灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	
221	-148.007.463	-5.113.707	476.123	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.5	○	○	○	○	2Y5/5/4 に灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	2Y5/2 焼灰	
222	E地区 西32-Y002A	中世中後葉		黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.8	0.7	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/1 焼灰	
223	-148.012.852	-5.121.008	475.343	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.8	0.40	○	○	○	○	2Y5/5/4 に灰黄焼	2Y5/5/4 に灰黄焼	2Y5/5/4 に灰黄焼	
224	E地区 西34-Y002A	中世中後葉		黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.7	0.50	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y5/2 灰黄焼	10Y8/1 焼灰	
225	E地区 西30-Y002A	中世中後葉		黄褐色 土	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.7	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/1 黄焼	
226	-148.007.261	-5.127.405	475.380	黄褐色 土	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.40	○	○	○	○	2Y5/2 黄焼	2Y5/2 黄焼	2Y5/5/4 に灰黄焼	内面層付着
227	-148.007.743	-5.127.712	475.394	黄褐色 土	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.40	○	○	○	○	2Y5/2 黄焼	2Y5/2 黄焼	2Y5/5/4 に灰黄焼	内面層付着
227	E地区 西30-Y002A	中世中後葉		黄褐色 土	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.4	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	10Y8/1 焼灰	
228	-148.996.958	-5.115.770	474.883	黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y8/4 に灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	10Y8/4 に灰黄焼	
229	E地区 西32-Y002A	中世中後葉		黄褐色 シト	I類I群	早期後葉	深鉢	縁縁欠	外ノリ付・内ノリ付	0.6	0.4	○	○	○	○	10Y8/2 に灰黄焼	10Y8/2 に灰黄焼	2Y5/1 黄焼	

表 10 別所下ノ前遺跡出土縄文土器観察表⑧

編年番号	X (m)	Y (m)	H (m)	方位	分類	形状・時期	器種	特徴	図説	器高(cm)		器径		器口		色調		備考		
										最大	最小	口径	底径	外唇	内唇	表面	断面			
230	5号溝区	X06-Y10区	中世包倉層	灰色土	紅群1群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.6	0.5	0	0	0	△	10YR5/2 灰褐色	10YR5/4 に近い黄褐色			
231	5号溝区	X06-Y10区	中世包倉層	灰色土	紅群1群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色+下ノ内ノ赤褐色	0.6	0.4	0	0	0	△	10YR4/1 黒褐色	10YR6/3 に近い黄褐色	10YR6/4 に近い黄褐色		
232	-148.006.324	-5.127.683	473.438	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色+内ノ赤褐色	0.55	0.30	0	0	0	△	10YR4/3 に近い黄褐色	10YR6/3 に近い黄褐色	9Y5/2 に近い黄褐色		
233	-148.006.682	-5.127.620	473.426	黄灰色粘砂(30X0下)	紅群3群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色+下ノ内ノ赤褐色+下ノ赤褐色	0.5	0.20	0	0	0	△	2Y5/3 黄褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/1 黄褐色	234-236 と同一	
234	-148.007.021	-5.126.729	475.470	黄灰色粘砂(25X0下)	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.6	0.4	0	0	0	△	2Y5/2 灰褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/1 黄褐色	233-235 と同一	
235	6号溝区	X07-Y27区	30.44	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.6	0.30	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/2 灰褐色	233-234 と同一内層付層	
236	-148.094.141	-5.098.223	473.767	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.55	0.30	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	2Y5/1 黄褐色		
237	-148.006.940	-5.127.391	475.406	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.5	0.4	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/1 黄褐色		
238	-148.014.487	-5.101.437	473.569	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.7	0.5	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	10Y5/1 黒		
239	-148.008.398	-5.127.353	475.556	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.7	0.4	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	10Y5/3 に近い黄褐色		
240	6号溝区	X10-Y02区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.7	0.50	0	0	0	0	△	2Y5/2 灰褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	10Y5/1 黄褐色	
241	-148.014.179	-5.102.716	473.810	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.7	0.5	0	0	0	0	△	2Y5/3 黄褐色	2Y5/2 灰褐色	10Y5/1 黄褐色	
242	-148.005.029	-5.127.373	475.468	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.55	0.5	0	0	0	0	△	10YR1/1 黒	2Y5/2 灰褐色	2Y5/2 に近い黄褐色	
243	-148.014.388	-5.126.204	481.084	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.85	0.45	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/1 黄褐色		
244	-148.006.444	-5.120.040	475.540	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.55	0.45	0	0	0	△	2Y5/3 に近い黄褐色	9Y5/1 灰	9Y4/1 灰		
245	-148.014.558	-5.102.247	473.856	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.65	0.5	0	0	0	0	△	10YR1/1 黒	10YR2/1 黒		
246	6号溝区	X10-Y02区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.6	0.45	0	0	0	△	10YR1/1 黒	10YR5/2 灰褐色	10YR5/3 に近い黄褐色		
247	-148.006.544	-5.127.389	475.507	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.6	0.45	0	0	0	△	10YR1/1 黒	2Y5/2 灰褐色	10YR2/2 灰褐色	外層付層	
248	6号溝区	X10-Y04区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.75	0.55	0	0	0	0	△	2Y5/1 黄褐色	2Y5/1 黄褐色		
249	-148.017.579	-5.122.655	475.800	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.8	0.5	0	0	0	0	△	2Y5/4 に近い黄褐色	9Y4/1 灰	10YR5/2 灰褐色	
250	-148.018.053	-5.106.209	474.095	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.85	0.45	0	0	0	0	△	2Y5/2 灰褐色	10YR5/4 に近い黄褐色		
251	6号溝区	X06-Y14区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.85	0.6	0	0	0	△	2Y5/1 黄褐色	2Y5/2 灰褐色	10YR6/1 黒	254と同一	
252	6号溝区	X08-Y26区	5K39	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.85	0.4	0	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/4 に近い黄褐色	
253	6号溝区	X15-Y01区		黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.85	0.6	0	0	0	△	9Y3/1 オリーブ黒	10YR4/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色		
254	6号溝区	X10-Y14区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.6	0.6	0	0	0	△	2Y5/1 黄褐色	2Y5/2 灰褐色	2Y5/2 灰褐色	251と同一	
255	-148.003.888	-5.117.353	478.125	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.75	0.5	0	0	0	△	10YR1/1 黒	2Y5/3 灰褐色	2Y5/1 黄褐色	内層付層	
256	-148.005.024	-5.117.391	478.160	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.7	0.35	0	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	2Y5/1 黄褐色	
257	-148.006.281	-5.108.027	473.165	黄灰色粘砂	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.8	0.35	0	0	0	0	△	9Y5/2 灰褐色	2Y5/2 灰褐色	10YR5/3 に近い黄褐色	
258	-148.008.854	-5.110.035	474.929	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.7	0.45	0	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	9Y4/1 灰	10YR5/4 に近い黄褐色	
259	-148.009.725	-5.113.181	476.203	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.8	0.6	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	10YR6/4 に近い黄褐色	2Y5/2 灰褐色		
260	-148.009.274	-5.116.341	474.935	黄灰色シルト	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.7	0.4	0	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	9Y4/1 灰	10YR5/3 に近い黄褐色	
261	6号溝区	X08-Y12区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.8	0.6	0	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/2 灰褐色	9Y4/1 灰	
262	6号溝区	X10-Y12区	中世包倉層	灰色土	紅群2群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.75	0.6	0	0	0	0	△	2Y5/3 に近い黄褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	10YR6/1 黒	
263	6号溝区	X06-Y16区	中世包倉層	灰色土	紅群1群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色+下	0.8	0.4	0	0	0	△	2Y5/3 灰褐色	2Y5/3 に近い黄褐色	2Y5/3 に近い黄褐色		
264	-148.003.904	-5.098.038	473.650	黄灰色シルト	紅群1群	早期末前期初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.5	0.45	0	0	0	△	10YR5/3 に近い黄褐色	10YR5/3 に近い黄褐色	2Y5/2 灰褐色		
265	-148.018.094	-5.119.893	475.731	黄褐色母土	V群1群	中世末後群初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.5	0.45	0	0	0	△	2Y5/3 に近い黄褐色	2Y5/2 灰褐色	9Y4/1 灰		
266	-148.005.548	-5.096.721	473.315	黄灰色シルト	V群1群	中世末後群初期	深鉢	赤褐色	外ノ赤褐色内ノ赤褐色	0.6	0.4	0	0	0	△	9Y3/1 オリーブ黒	9Y4/1 灰	9Y3/1 オリーブ黒		

反させ、端部を少し肥厚させる。端部内面上端と端部はナデによって緩やかな面が形成されている。264は胴部片で、内外面ともにナデで調整を行ない、外面から孔を穿っている。

中期末～後期前葉の土器 (265・266)

265・266は砂粒を多く含んだ無文土器で、ともに胴部下半の破片である。外面は摩滅のため調整不明。内面には横位のナデが認められる。なお、266は僅かに指頭圧痕が認められることから、成形時に弱いユビオサエを行なったと考えられる。(熊谷)

註1) 文様・器形以外の属性で分類を行ったものに関しては模式図から除外した。

註2) 「ネガティブ楕円文」の同義語として「舟形沈文」(矢野1993)の用語があるが、本稿では前報告(奈良市教育委員会2006)と同様に楕円形と非楕円形の形状差から、楕円状を早するものを「ネガティブ楕円文」、それが長大化・細長くなったものを「舟形沈文」と表記する。

註3) 守屋豊人氏は桐山和田遺跡出土資料の検討により神宮寺式から神並上層式への移行を口縁部外面の刻み・刺突の位置の下降と押型文への置換から2群C1類～C3類への変遷を提示しており、2群C3類が狭義の「神並上層式」に該当し、2群C1～3類を広義の神並上層式としている(守屋2002)。本報告での1群C類は桐山和田2群C3類にあたるものであり、狭義の「神並上層式」に該当する。

註4) 「神並上層式」に後続する資料は兵庫県山芦屋遺跡S4地点下層の資料が位置づけられている(矢野1993)。また「神並上層式」に後続し、黄褐色に先行する口縁部内面に刻みを施す山形押型文主体の時期として「山芦屋層」がある(熊谷2006)。

ii. 石器 (図83～87、表11～15)

試掘調査を含め、縄文時代の石器2,328点が出土した。その内訳は表11に示した。石材は、約99%がサヌカイトで、他に若下のチャートと敲石・磨石等に使用された砂岩・珪岩・ホルンフェルス等がある。

出土量については、微高地Aに位置する発掘区から全体の約86%の石器が出土しており、以下、微高地Fが約10%、微高地Eが約3%と続く。

表11 発掘区別出土石器内訳表

	A	B	C	D	E	その他	計
石鏃	1		12	35	41	8	98
石匙		1		1	1		3
磨石			1				1
削棒		1	2	10	7 (1)		21 (1)
楕形石鏃		1	2	8	7	3	21
石斧				1			1
石核	2		2	1	8 (2)	2 (1)	13 (2)
加工痕有割片	3		4	12	14		33
使用痕有割片	1			3	11	3	18
割片	88	11	185	288	381 (4)	35 (2)	927 (6)
砕片	154	17	301	428	281	11	1,173
石鏃	2						2
敲石					4		4
磨石					1		1
不明	2 (1)		0	0		0	2 (1)
計	231 (1)	31	520	789	714 (7)	63 (2)	2,328 (11)

※本調査区と位置が重複する試掘調査の区画は、それぞれ不同区域内に含めている。

これ以外の試掘調査の区画については、その後にまとめた。

また各器種の点数には未報告も含まれる。チャート製石鏃は括弧書きで示した。

表12 C・D・E発掘区層別出土石器内訳表

	C		D-上層		D-中層		D-下層		E-上層		E-中層		E-下層		計
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数
石鏃	12	2.3	22	4.3	3	3.3			18	5.1	10	6.2			65
石匙			1	0.2											1
削棒	1	0.2													1
削棒	3	0.6	6	1.2					4	1.1					13
楕形石鏃	2	0.4			1	1.1			2	0.6	1	0.6			6
石斧															0
石核	2	0.4	1	0.2					1	0.3					4
加工痕有割片	4	0.8	3	0.6	1	1.1			3	0.9	5	3.1			16
使用痕有割片			3	0.6					3	0.9	2	1.2			8
割片	155	37.4	157	30.7	36	39.6	9	52.9	159	45.2	91	56.5			647
砕片	301	57.7	318	62.2	50	54.9	8	47.1	160	45.5	52	32.3	1	100.0	890
石鏃															0
敲石									1	0.3					1
磨石									1	0.3					1
不明	2	0.4													2
計	522	100.0	511	100.0	91	100.0	17	100.0	352	100.0	161	100.0	1	100.0	1,655

※上層 = 縄文時代後期包含層上層 中層 = 縄文時代後期包含層中層 下層 = 縄文時代後期包含層下層 なお、C発掘区の縄文時代後期包含層は1層のみである。

組成的には、最も多くの遺物が出土した微高地Aではほぼ全器種が増う。ただし敷石・磨石はE発掘区のみであり、活動内容に何らかの差があるのかもしれない。

D・E発掘区の遺物包含層は3層にわたるため、各層ごとの組成を表12に記した。各層は発掘区を隔てて対応関係にあるが、これを見ると両発掘区の組成は概ね似通っていることがわかる。遺物分布の分析から、大半の石器は原位置を遊離していると考えられるが、組成を保持したまま両発掘区に流入したとは考えにくい。土器の分布でも同一個体が集中する傾向があることから、石器もあまり原位置を遠く離れず2次堆積したと見るべきだろう。また、分析には点数が少なすぎると、遺物包含層の時期から下層は早期前葉以前、中層は早期前葉～中葉、上層は早期前葉～前期初頭、中期末～後期初頭の混在した組成を示すと考えられる。

C発掘区の遺物包含層については時期的にD・E発掘区の上層に対応するが、早期前葉～後葉の遺物が全くないことから、単純に組成の比較はできない。遺物包含層の時期から中期末～前期初頭、中期末～後期前葉の石器が混在していると考えられる。

微高地E・Fは遺物分布のまとまりもなく、出土量も少ないことから、純粋な組成を保っているとは考えにくい。ただし、微高地Fで石錘2点が出土していることから、微高地Fの近くでは微高地Aとは異なった活動が行なわれていた可能性もある。

以下、各器種について概要を述べる。

石鏃 (2～80) 定型石器の半数以上を占める石器である。形態的に様々なものがあるが、すべて無茎鏃である。ともに出土した土器から縄文時代早期前葉～中葉、早期末～前期初頭、中期末～後期前葉のものがあると考えられる。4・15・21・23・33・54～56・64・78・79は、D・E発掘区の早期前葉～中葉の遺物包含層から出土しており、この時期のものといえる。

2～5は円基鏃で、側縁が外彎する2・3と、側縁が直線的な4・5がある。4は調整が粗く未製品の可能性も残る。8は平基無茎鏃。先端部を欠損するが、側縁がやや外彎する二等辺三角形を呈すると考えられる。大型で薄く、均整に調整されているなど他に比して異質である。

6・7・9～16は基部に浅い抉りの入る凹基無茎鏃である。6・7・11・12は脚端部が尖り、13～16

は、脚端部を丸くおさめる。ともに二等辺三角形を呈するが、幅広のものが多い。9は左右非対称のもの。早期条痕文土器の時期に伴う石器の可能性もあるが、左脚部を欠損したために、左側縁を再調整したのかもしれない。10は未製品の可能性も残る。17～23は、基部にやや深い抉りを持ち、二等辺三角形を呈するもの。17・18は平面形が幅広のもので、脚部はやや膨らみ、端部が尖る。ともに調整は粗雑である。19～23は平面形が細身のもので、側縁がやや外彎する19・20・23、側縁が直線的な21～22がある。いずれも脚部は内側がやや膨らみ、端部が尖る。

24～28は、基部に全長の1/4未満の抉りが入るもので、側縁がやや外彎し、脚端部は尖る。抉りが円形に近い24～26と、三角形を呈する27・28がある。また25・26は先端部が先細る。

29～32は脚の内側が膨らみ、脚端部がやや外に広がる印象を受けるものである。基部の抉りはやや浅く、幅広の二等辺三角形を呈する。30は脚端部が反り返ったような形態を呈し、早期の押型文土器とともに出土すると考えられる石器である。

33・37・38は側縁が下半部でやや内彎するもの。脚端部が尖り、内側にすばまる33と、脚端部が尖らず、外側に開く37・38がある。34は幅広の二等辺三角形を呈し、脚部がやや膨らみ端部が尖らないもの。基部の抉りは全長の1/4程度と思われる。

35・36・39～45は側縁が直線的で、脚端部が角張る、もしくは太くなるもの。抉りの奥は丸く整えられている。こういった形態は早期中葉や前期に比較的多く見られる形態と考えられる。44・45は、直線的な基部の一部抉りを入れる。

46～49・52・53は、脚が比較的長いもの。側縁が中半でやや内彎し、脚が外に開く印象を受ける。脚が細身で端部が丸くなる46・47と、太く角張った48・49がある。52・53は側縁の内彎が強く、逆Y字状を呈する。抉りは浅く、脚端部は先鋭でない。

50・51・54～59・80は側縁が上半で屈曲するもの。50・51・54～56は側縁が下半でくびれ、いわゆる魚形の「五角形鏃」である。基部は平基に近いものが多いが、56・57は浅い抉りが入り、脚部も丸くおさめる。59は寸同な形態を呈し、いわゆる将棋駒形の「五角形鏃」である。

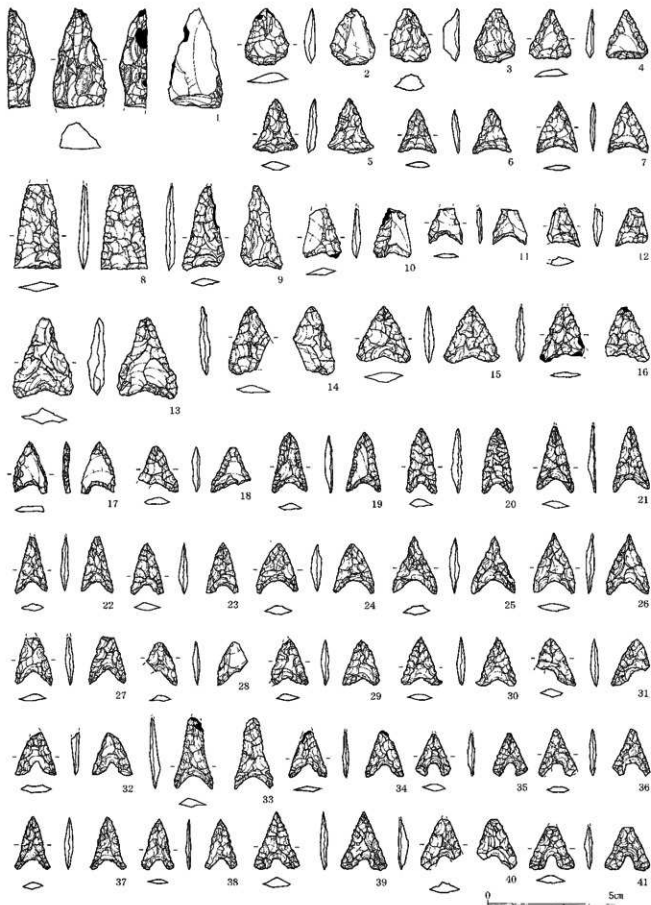


図83 別所下ノ前遺跡出土石器① (2/3)

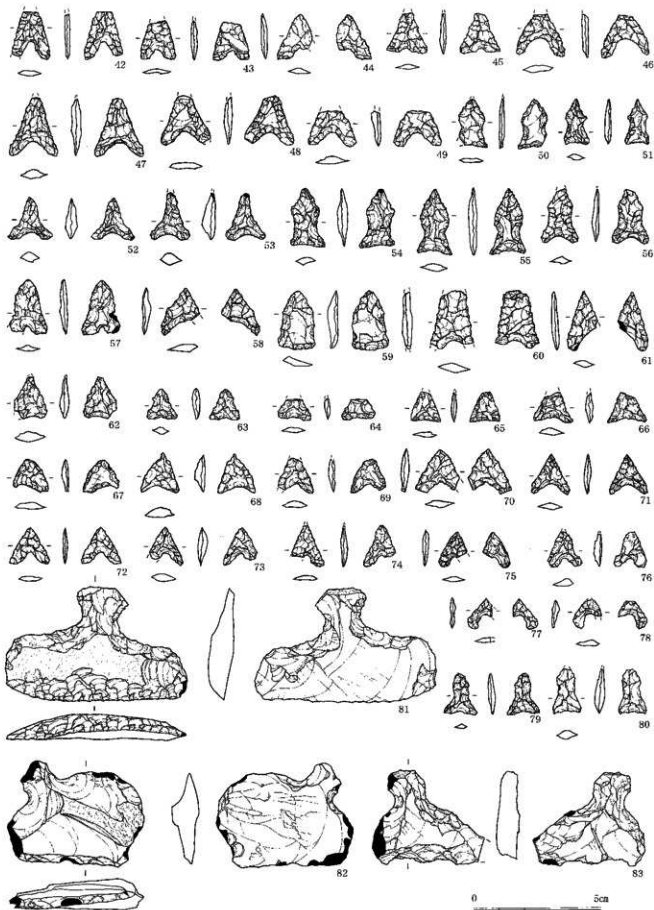


図 84 別所下ノ前遺跡出土石器② (2/3)

60・61・70は脚部が欠損し全体の形状は不明だが、60・61は概ね二等辺三角形を呈する細身の凹基無茎鎌、70は幅広で挟りが深くはいる凹基無茎鎌になると考えられる。

62～69・71～79は全長が概ね1.5cm以内に収まる小形の石鎌である。長さが1.2cm未満のものには、平基ないし平基に近い二等辺三角形形状のもの(63～65)、やや浅い挟りが入り、左右非対称のもの(66・67)、挟りが全長の半分程度まで及び脚端部を丸く収めるもの(77・78)がある。長さが1.2cm以上のものには、基部の挟りが浅く、脚端部を尖らすもの(68・69)、全長の1/3程度の挟りが入り、正三角形形状を呈するもの(71～73)、同じく1/3程度の挟りが入り二等辺三角形形状を呈するもの(74～76)がある。また51・79・80は、小形の五角形鎌と思われるものである。こういった小形石鎌は縄文時代早～中期に多く認められ、この時期のもの可能性がある。

石匙(81～83) いずれも横型石匙で、腹面側から刃部加工を行なっている。81は横長剥片を素材とするもので、背面の一部に礫面を残す。刃角は比較的浅く、礫面の形状を利用していると考えられる。

82・83はつまみ部が左側に偏る不定型のものである。調整も粗雑で、未製品の可能性を残す。82は幅広の寸詰まり剥片、83は横長剥片を素材とする。なお83は主要剥離面が背面にあり、インパースリタッチによる刃部加工を行なっている。

削器(84～99) 縁辺に連続した2次加工を行ない、比較的浅い角度の刃部を作出するものを削器とした。腹面側から2次加工を施す直線刃のものが多いが、両刃のもの(84・85・91)、外彎刃(85～87・90・92・97)のものも比較的多い。主要剥離面側に2次加工を施すインパースリタッチは、84・85・87・91・92・94・95に見られた。なお、90は刃部の角度からすると揺器とすべきかもしれない。

84～89は、横長ないし幅広剥片を素材とした幅5cm以上のものである。いずれも礫面が残る、亜円礫素材の石核を使用していることがわかる。86は背面構成から横長剥片を連続して剥離していると考えられる。90～98には折れ面や折痕が見られるが、90・95・96は折れ面が形成された後に刃部加工がなされている。99は両極打法によって得られた縦長剥片素材の一側縁

に細かな2次加工を施すものである。

楔形石器(100～114) 削器とならび本遺跡で比較的多く見られる器種である。基本的に細かく潰れた階段状剥離が相対する縁辺に残っているものを楔形石器として分類した。ここでは比較的形状の整ったものを図示している。

概して全長3.5cm未満の四辺形を呈するものが大半で、100～106は長幅比がほぼ等しいもの、107～112は短冊状の形態を呈するものである。また、113・114のように全長2cm程度の小型のものもある。いずれも上下端にツブレがある。103・111は右側縁にもツブレがあり、打撃方向を90°回転していることがわかる。剪断面については、101・109が左側縁、104・106・108・110・114が右側縁に見られる。

なお、106・112は縄文時代遺物包含層中層から出土しており、早期前葉～中葉のものと考えられる。

石斧(115) 幅広の寸詰まり剥片を素材とした刃部磨製石斧である。D発掘区の中世包含層から出土した。なお、刃部磨製石斧は縄文時代前半には消滅するとされることから、D発掘区山土土器の時期からみて、早期～前期初葉のものである可能性が高い。背面上部には礫面が残る、円礫を石核に使用していることがわかる。側縁に背腹両面から2次加工を加えており、右側縁に着柄もしくは手擦れによる磨痕が見られる。研磨は刃部の両面になされるが、横方向の擦痕が両面に、縦方向の擦痕が背面左側に見られる。また腹面側の刃部には、研磨以前の調整剥離面が一部残る。

石核(116～119) 116は石核の上下から、118は上面と裏面側から剥片剥離を行なうもので、石核が直方体や角錐状になるものである。117・119は概ね石核周囲から剥片剥離を行なうもので、打面・作業面を入れ替える117と、打面を裏面側に固定する119がある。幅広の寸詰まり剥片を剥離するものがほとんどだが、119は横長剥片を剥離している。いずれも打点付近に微細なツブレを有し、両極打法が行なわれた可能性がある。また他に黒色ないし緑色チャート製の小型石核があるが、これも一部打点付近に微細なツブレがある。袖ノ川イモタ遺跡同様、不定形石核から小型の不定形剥片を剥離していると考えられる。

石錐(120～121) 120は切目石錐で、泥質ないし砂質ホルンフェルスの自然剥の上下端に幅2～3mmの

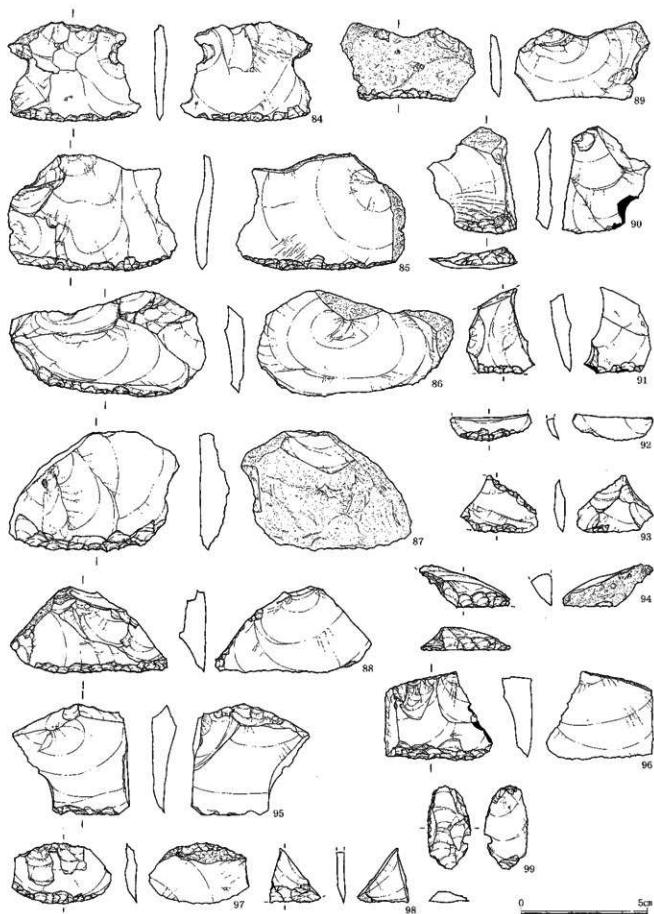


图 85 别所下/前遺跡出土石器③ (2/3)

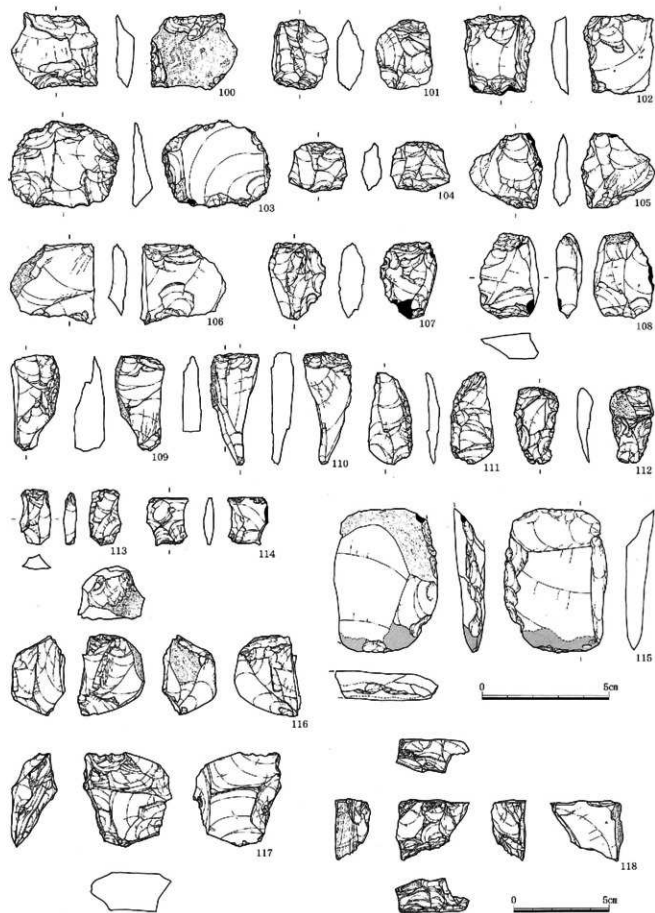


図86 別所下ノ前遺跡出土石器④ (100～116: 2/3, 117・118: 1/2)

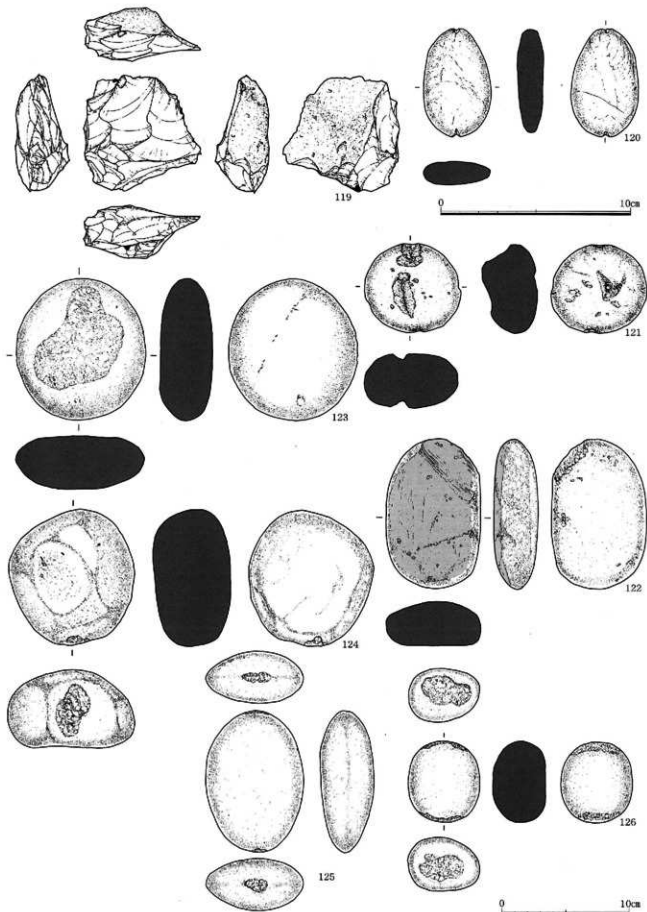


図87 別所下ノ前遺跡出土石器⑥ (119・120:1/2、123~126:1/3)

表 13 別所下ノ前遺跡出土石器観察表①

	X(m)	Y(m)	H(m)	遺構・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	
1	-148.990.485	-5.116.138	474.842	SB01 柱穴埋土・黄灰色土	角縁状石器	(3.91)	2.08	1.03	(8.08)	黒曜石(理研産)	先端部・基部欠損。	
2	-148.995.750	-5.121.338	475.168	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	2.20	1.75	0.36	1.47	サスカイト	未製品?	
3	-148.006.031	-5.141.982	476.680	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	2.04	1.61	0.60	1.82	サスカイト		
4	-148.994.265	-5.121.202	475.314	縄文包含層中層・黄灰色シルト	石器	1.90	1.63	0.31	0.86	サスカイト	未製品?	
5	-149.010.687	-5.118.685	475.208	DK45 黄灰色土	石器	2.14	1.77	0.31	0.89	サスカイト		
6	-149.015.188	-5.123.614	475.022	縄文包含層上層・黄灰色砂土	石器	1.77	1.53	0.23	0.47	サスカイト		
7				中世包含層・灰色土	石器	1.84	1.80	0.20	0.49	サスカイト		
8	-148.008.764	-5.217.287	482.222	縄文包含層・茶褐色シルト	石器	(3.21)	1.84	0.37	(2.41)	サスカイト	先端部欠損	
9	-149.005.548	-5.140.106	478.594	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(2.30)	1.60	0.34	(1.43)	サスカイト	先端部欠損	
10	-149.060.287	-5.427.873	507.851	縄文包含層・黄灰色砂質シルト	石器	(1.96)	1.48	0.33	(8.00)	サスカイト	未製品?, 先端部欠損	
11	-149.020.853	-5.218.388	481.999	縄文包含層・黄灰色シルト	石器	(1.42)	1.38	0.18	(0.30)	サスカイト	先端部欠損	
12	-149.009.834	-5.210.463	481.575	縄文包含層・茶褐色シルト	石器	(1.45)	(1.28)	0.34	(0.54)	サスカイト	先端部・基部欠損	
13				中世包含層・灰色土	石器	3.03	2.36	0.63	4.01	サスカイト	未製品?	
14	-148.001.070	-5.130.381	478.592	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(2.67)	(2.70)	0.40	(1.25)	サスカイト	基部片側欠損	
15	-149.012.847	-5.121.272	475.352	縄文包含層中層・灰色シルト	石器	2.28	2.14	0.38	1.37	サスカイト		
16				中世包含層・灰色土	石器	(2.10)	(1.71)	0.18	(8.89)	サスカイト	先端部・基部欠損	
17				D発掘区 X35-Y34	中世包含層・灰色土	2.05	1.33	0.23	0.64	サスカイト		
18				E発掘区 X10-Y20	中世包含層・灰色土	3.13	(1.51)	0.27	(5.58)	サスカイト	先端部・基部欠損	
19				E発掘区 X30-Y04	中世包含層・灰色土	2.27	1.38	0.24	0.70	サスカイト	全体的に磨滅している	
20				第4発掘区 中線田	堆土直上・灰白色砂質シルト	2.54	1.15	0.31	0.87	サスカイト		
21	-149.013.124	-5.121.625	475.113	縄文包含層中層・黄灰色シルト	石器	(2.14)	(1.63)	0.27	(6.66)	サスカイト	先端部欠損	
22	-149.017.328	-5.139.635	476.064	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(2.11)	1.28	0.28	(6.57)	サスカイト	先端部欠損	
23	-149.009.487	-5.114.187	474.629	縄文包含層中層・黄灰色シルト	石器	2.03	1.27	0.30	0.53	サスカイト		
24	-149.008.010	-5.130.843	475.440	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	1.82	1.81	0.39	0.26	サスカイト		
25	-149.009.872	-5.203.099	480.873	縄文包含層・黄灰色シルト	石器	2.16	1.70	0.42	0.90	サスカイト		
26	-149.007.642	-5.139.472	476.585	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	2.38	1.83	0.31	0.82	サスカイト		
27	-149.003.294	-5.118.245	476.061	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.80)	1.45	0.26	(6.62)	サスカイト	先端部欠損	
28				中世包含層・灰色土	石器	(1.70)	(1.18)	0.20	(0.34)	サスカイト	基部欠損	
29	-149.006.808	-5.136.724	476.654	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.78)	(1.41)	0.27	(0.54)	サスカイト	先端部・基部欠損	
30	-149.021.922	-5.104.466	473.914	縄文包含層上層・黄灰色砂質シルト	石器	1.91	1.59	0.23	0.56	サスカイト		
31	-148.994.895	-5.137.718	476.493	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.85)	(1.55)	0.32	(0.55)	サスカイト	基部欠損	
32				E発掘区 X38-Y28	中世包含層・灰色土	(1.89)	1.57	0.30	(0.51)	サスカイト	先端部欠損	
33	-149.005.138	-5.119.870	475.220	縄文包含層中層・黄灰色砂質シルト	石器	(2.81)	1.50	0.35	(0.90)	サスカイト	先端部欠損	
34	-149.014.834	-5.220.137	482.400	縄文包含層・黄灰色シルト	石器	(1.78)	1.45	0.25	(0.44)	サスカイト	先端部欠損	
35	-149.006.957	-5.116.457	475.131	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.65)	1.35	0.28	(0.40)	サスカイト	先端部欠損	
36	-149.005.090	-5.142.100	479.692	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.84)	(1.46)	0.22	(0.44)	サスカイト	基部欠損	
37	-149.016.401	-5.220.684	482.234	黄灰色シルト	石器	2.05	1.43	0.32	0.55	サスカイト		
38	-149.018.557	-5.139.604	476.057	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	2.00	1.21	0.17	0.33	サスカイト		
39	-149.014.177	-5.122.808	475.534	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	2.28	1.80	0.36	0.75	サスカイト		
40	-149.004.380	-5.140.350	476.493	縄文包含層上層・黄灰色砂質シルト	石器	(1.90)	(1.55)	0.40	(0.70)	サスカイト	先端部・基部欠損	
41	-149.005.872	-5.126.981	475.382	SO44 黄灰色礫砂	石器	(1.65)	1.75	0.27	(8.82)	サスカイト	先端部欠損	
42	-149.006.883	-5.145.831	478.745	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.80)	(1.50)	0.20	(8.91)	サスカイト	先端部・基部欠損	
43	-149.006.518	-5.128.286	475.094	SO44 黄灰色礫砂	石器	(1.49)	1.36	0.23	(8.42)	サスカイト	先端部欠損	
44				中世包含層・灰色土	石器	(1.81)	(1.38)	0.21	(8.41)	サスカイト	基部欠損	
45				D発掘区 X20-Y42	遺跡2層土直上層・灰色土	(1.80)	1.80	0.28	(0.50)	サスカイト	先端部欠損	
46	-149.014.945	-5.214.145	481.834	縄文包含層・黄灰色シルト	石器	(1.70)	1.87	0.23	(0.58)	サスカイト	先端部欠損	
47	-149.004.074	-5.141.720	476.710	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(2.18)	1.80	0.35	(9.92)	サスカイト	先端部欠損	
48	-149.012.154	-5.151.410	479.684	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	(1.86)	(1.97)	0.29	(8.87)	サスカイト	先端部・基部欠損	
49				D発掘区 X32-Y38	遺跡2層土・暗褐色灰色土	石器	(1.41)	1.90	0.35	(8.72)	サスカイト	先端部欠損
50				E発掘区 X30-Y18	中世包含層・黄灰色礫質土	石器	(1.87)	(1.12)	0.15	(8.47)	サスカイト	先端部・基部欠損
51	-149.002.195	-5.128.405	475.443	SO44 暗褐色土	石器	1.74	0.96	0.22	0.36	サスカイト		
52	-149.009.772	-5.138.148	478.109	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石器	1.58	1.73	0.47	0.63	サスカイト		
53				E発掘区 X34-Y30	中世包含層・黄灰色礫質土	石器	(1.88)	1.55	0.46	(8.78)	サスカイト	先端部欠損

表 14 別所下ノ前遺跡出土石器観察表②

	X(m)	Y(m)	H(m)	遺構・層位	遺物	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
54	-149.001.915	-5.115.044	474.410	縄文包含層中層・褐色色砂質シルト	石鏃	2.27	1.36	0.39	0.65	ヤヌカイト	
55	-149.003.062	-5.111.829	474.730	縄文包含層中層・褐色色砂質シルト	石鏃	2.65	1.87	0.30	0.97	ヤヌカイト	
56	-149.001.948	-5.136.301	476.040	縄文包含層中層・淡灰色砂質シルト	石鏃	2.06	1.45	0.27	0.87	ヤヌカイト	先端部欠損
57	-149.020.837	-5.218.154	482.088	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	2.11	1.40	0.24	0.66	ヤヌカイト	脚部欠損
58	E奥層区 X22-Y04			中世包含層・灰色土	石鏃	1.83	1.49	0.33	0.53	ヤヌカイト	
59	-149.992.831	-5.105.132	474.067	縄文包含層上層・淡灰色粘質土	石鏃	2.30	1.50	0.39	1.45	ヤヌカイト	
60	-149.017.727	-5.212.775	481.825	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	(2.27)	(1.88)	0.36	(1.30)	ヤヌカイト	先端部・脚部欠損
61	E奥層区 X04-Y04			SK24・黄褐色砂	石鏃	(2.32)	1.21	0.25	(0.95)	ヤヌカイト	脚部欠損
62	D奥層区 X12-Y38			中世包含層・灰色土	石鏃	(1.50)	(1.22)	0.42	(0.85)	ヤヌカイト	先端部・脚部欠損
63	-149.993.011	-5.125.861	475.593	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	1.20	1.17	0.29	0.30	ヤヌカイト	
64	-149.001.156	-5.116.158	474.708	縄文包含層中層・黄灰色砂質シルト	石鏃	(0.78)	1.29	0.19	(0.32)	ヤヌカイト	先端部欠損
65	-149.014.472	-5.198.726	480.858	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	1.13	1.14	0.20	0.27	ヤヌカイト	
66	-149.996.964	-5.110.170	474.259	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.20)	1.51	0.30	(0.36)	ヤヌカイト	先端部欠損
67	-149.011.782	-5.207.105	481.178	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.28)	(1.28)	0.25	(0.41)	ヤヌカイト	脚部欠損
68	-149.008.683	-5.202.994	480.844	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	1.48	1.48	0.38	0.56	ヤヌカイト	
69	-149.006.091	-5.202.285	480.764	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	(1.28)	(1.35)	0.23	(0.36)	ヤヌカイト	先端部・脚部欠損
70	-149.010.839	-5.193.170	480.118	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.88)	(1.72)	0.32	(0.85)	ヤヌカイト	脚部欠損
71	-149.000.290	-5.120.180	475.179	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	1.58	1.52	0.28	0.36	ヤヌカイト	
72	-149.007.098	-5.142.855	476.710	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	1.41	1.58	0.21	0.29	ヤヌカイト	
73	-149.996.215	-5.117.890	474.887	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.52)	(1.30)	0.37	(0.45)	ヤヌカイト	脚部欠損・両端縁が潰れている
74	-149.014.182	-5.216.587	482.820	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	(1.80)	(1.22)	0.23	(0.25)	ヤヌカイト	先端部・脚部欠損
75	-149.012.918	-5.102.289	474.039	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.41)	(1.09)	0.29	(0.20)	ヤヌカイト	脚部欠損
76	D奥層区 X20-Y42			中世中包含層・灰色土	石鏃	(1.29)	1.31	0.26	(0.30)	ヤヌカイト	先端部欠損
77	-149.995.033	-5.141.545	478.609	縄文包含層上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.10)	(0.90)	0.19	(0.13)	ヤヌカイト	脚部欠損
78	-149.996.813	-5.142.033	478.580	縄文包含層中層・淡灰色砂質シルト	石鏃	(1.07)	(1.40)	0.20	(0.18)	ヤヌカイト	先端部・脚部欠損
79	-149.994.050	-5.117.187	474.678	縄文包含層中層・褐色色砂質シルト	石鏃	1.58	1.29	0.19	0.30	ヤヌカイト	
80	E奥層区 X86-Y12			遺構跡面上層・黄灰色シルト	石鏃	(1.72)	1.30	0.34	(0.48)	ヤヌカイト	先端部欠損
81	-149.078.178	-5.378.999	501.287	縄文包含層・黄灰色シルト	石鏃	4.53	2.20	0.93	28.48	ヤヌカイト	
82	-149.022.414	-5.146.743	478.158	縄文包含層上層・黄灰色砂礫	石鏃	4.20	3.42	1.07	26.82	ヤヌカイト	水浸している
83	E奥層区 X92-Y18			中世包含層・黄灰色粘質土	石鏃	3.53	(4.45)	0.78	(14.01)	ヤヌカイト	一部欠損
84	-149.022.748	-5.216.220	481.874	縄文包含層・黄灰色シルト	削器	3.86	5.15	0.48	11.72	ヤヌカイト	
85	-149.011.677	-5.115.845	474.696	縄文包含層上層・褐色色砂質土	削器	4.54	6.89	0.52	22.30	ヤヌカイト	
86	-149.023.343	-5.102.391	473.838	縄文包含層上層・黄褐色シルト	削器	3.45	7.80	0.77	25.70	ヤヌカイト	
87	-149.013.552	-5.138.425	476.443	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	4.72	6.75	1.14	42.92	ヤヌカイト	
88	-149.000.005	-5.148.874	478.306	縄文包含層上層・黄色砂質シルト	削器	3.45	6.22	1.00	20.30	ヤヌカイト	
89	-149.994.448	-5.137.198	476.431	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	3.14	5.34	0.36	9.86	ヤヌカイト	
90	-149.997.622	-5.134.952	475.956	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	4.20	3.52	0.60	9.47	ヤヌカイト	刃部の傾斜強い・裏面の可能性あり
91	-149.004.783	-5.136.813	478.445	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	(3.40)	(2.70)	(0.87)	(6.17)	ヤヌカイト	両側面欠損・裏面の刃部加工弱い
92	-149.010.818	-5.137.492	478.387	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	(0.87)	3.20	0.26	(1.00)	ヤヌカイト	一部欠損
93	D奥層区 X95-Y34			中世包含層・灰色土	削器	(2.25)	(3.06)	0.40	3.04	ヤヌカイト	一部欠損
94	-149.010.173	-5.198.835	480.584	縄文包含層・黄灰色シルト	削器	(1.70)	(3.05)	0.80	(3.58)	ヤヌカイト	一部欠損
95	D奥層区 X20-Y42			流路2層土・暗褐色土	削器	4.28	4.59	0.96	26.39	ヤヌカイト	
96	-149.002.894	-5.120.032	475.108	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	3.24	4.26	1.14	15.91	ヤヌカイト	
97	B奥層区 X66-Y79			中世包含層・灰色土	削器	2.41	3.94	0.43	4.30	ヤヌカイト	
98	-149.000.914	-5.140.308	476.538	縄文包含層上層・黄灰色シルト	削器	(2.17)	(2.02)	(0.26)	(1.57)	ヤヌカイト	両側面欠損
99	E奥層区 X94-80-Y90			SK23・黄褐色砂礫	削器	3.33	1.89	0.43	2.18	ヤヌカイト	両側面片欠損
100	第2発掘区 南側上段中央			SK01・黄灰色砂礫	楔形石器	2.84	3.37	0.88	9.05	ヤヌカイト	
101	D奥層区 X04-Y42			中世包含層・灰色土	楔形石器	2.75	2.22	1.03	6.81	ヤヌカイト	
102	第1発掘区 西端			排水溝・黄灰色砂質土	楔形石器	3.09	2.25	0.66	7.22	ヤヌカイト	
103	D奥層区 X90-Y40			中世包含層・灰色土	楔形石器	4.26	3.40	0.74	14.83	ヤヌカイト	
104	-149.001.165	-5.115.833	474.843	縄文包含層上層・黄灰色シルト	楔形石器	1.88	2.33	0.79	4.20	ヤヌカイト	
105	-149.008.784	-5.116.862	475.515	SK47 黄灰色シルト	楔形石器	2.84	2.87	0.64	5.14	ヤヌカイト	
106	-149.011.238	-5.120.436	475.108	縄文包含層中層・黄灰色シルト	楔形石器	2.80	3.34	0.62	8.86	ヤヌカイト	

表 15 別所下ノ前遺跡出土石器観察表③

	X(m)	Y(m)	H(m)	遺構・層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考	
107				第5発掘区 X10-Y16	中世包倉層・灰色土	楔形石斧	2.52	2.21	0.95	9.07	サヌカイト	
108				D発掘区 X16-Y44	武蔵2層土上層・灰色土	楔形石斧	3.35	2.38	0.97	10.28	サヌカイト	
110	-148.071.080	-5.264.603	487.067	純文包倉層・黄色砂質シルト	楔形石斧	3.74	1.95	1.19	10.17	サヌカイト		
110				第6発掘区	旧武蔵層下層・茶褐色砂礫	楔形石斧	4.40	1.90	0.86	6.53	サヌカイト	
111				D発掘区 X24-Y38	SX03・灰色砂質土	楔形石斧	3.80	1.70	0.47	3.54	サヌカイト	
112	-148.009.687	-5.145.354	476.893	D発掘区 X35-Y34	縄文包倉層中層・灰黄色砂質シルト	楔形石斧	2.90	1.73	0.62	3.00	サヌカイト	
113				E発掘区 X34-Y20	中世包倉層・灰色土	楔形石斧	1.83	1.81	0.40	1.56	サヌカイト	
114	-148.005.454	-5.376.930	501.811		縄文包倉層・灰黄色シルト	楔形石斧	2.03	1.28	0.52	1.78	サヌカイト	
115				D発掘区 X35-Y34	中世包倉層・灰色土	石斧	5.87	4.06	0.66	35.13	磁板岩?	刃縁磨製
116	-148.000.883	-5.114.574	474.926		縄文包倉層上層・黄灰色シルト	石核	3.17	2.64	2.09	21.95	サヌカイト	
117	-148.010.879	-5.136.132	476.376		縄文包倉層上層・黄色シルト	石核	4.95	4.63	1.93	48.01	サヌカイト	
118	-148.006.773	-5.426.236	507.426		縄文包倉層・黄灰色シルト	石核	3.18	3.77	1.70	21.46	サヌカイト	
119				第6発掘区	SD01・灰色砂礫	石核	6.18	6.15	2.81	88.81	サヌカイト	
120	-148.005.483	-5.425.036	507.426		縄文包倉層・黄灰色シルト	切刃石核	5.43	3.50	1.34	40.00	ホルンフェルス	先端部・基部欠損
121	-148.056.745	-5.426.582	507.811		縄文包倉層・黄灰色シルト	打欠石核	6.95	7.55	4.22	285.00	磁板岩	上下端、裏面に打ち欠きあり
122	-148.000.032	-5.122.363	475.300		縄文包倉層上層・黄灰色シルト	礫石	11.82	7.48	3.49	370.00	礫岩	裏面ほぼ全面に磨痕あり
123				E発掘区 X38-Y96	SD23・黄褐色砂礫	敲石	11.21	10.17	4.11	690.00	砂岩	裏面に敲打痕
124				E発掘区	SB-02 ⅡB3柱石・黄灰色土	敲石	10.75	9.88	6.07	993.00	珪岩	上下端に敲打痕
125	-148.011.947	-5.123.710	475.532		縄文包倉層中層・黄灰色砂質シルト	敲石	11.30	7.68	4.10	480.00	珪岩	上下端に敲打痕
126	-148.009.782	-5.117.873	475.091		縄文包倉層上層・黄灰色シルト	敲石	8.41	5.16	4.16	220.00	砂岩	上下端に敲打痕

※口の数は欠損。なお81-11-25-34-37-44-46-57-80-65-67-70-74-84-93-106-109はC発掘区出土。

切込みを施す。121は打欠き石核で、細粒花崗岩の自然稜の上下端と表裏に1箇所ずつ打欠きを入れる。ただし打欠きは一直線に並ばず、敲石を転用したものの可能性がある。ともにA発掘区の縄文時代遺物包含層から出土し、中期末～後期前葉のものと考えられる。

磨石 (122) 斑岩製円礫の表面のほぼ全面に磨痕が残るもの。なお、不明瞭だが右側縁上部に敲打痕があり、敲石として使用した可能性がある。

敲石 (123～126) 砂岩および珪岩の円礫や歪円礫を石材とし、端部や扁平な面に敲打痕が認められるもの。上下端に敲打痕を持つものが多いが、123は表面側の広い範囲に敲打痕が残る。125は縄文時代遺物包含層中層から出土しており、早期前葉～中葉のものと考えられる。(大窪)

(3) 古墳時代の遺物 (図88・91)

土師器・須恵器、(図88-1～4) 1は土師器直口甕で、一部を欠失するがほぼ円形に復元できる。口径10.0cm、器高14.2cm。体部は外面下半にタテハケ、内面にケズリを行なう。2は土師器高杯の杯部を復元図化したもので、復元口径19.5cm。外面に放射状のタテハケが残る。3は須恵器杯身で、口径10.4cm、器高4.3cmに復元できる。4は須恵器胎で、口縁部と底部を欠失する。1・2はD発掘区、3はB発掘区、4は

第5発掘区から出土した。

滑石製勾玉 (図91-1) 長さ2.2cm、最大幅1.0cm、厚さ0.5cmで、緑灰色を呈する。C発掘区出土。

(4) 中世の遺物 (図89～91)

瓦器、羽釜、土師器などの土器の他に、銭貨3枚、石鍋、砥石などが出土している。

以下、主要なものについて述べる。

中世土器 (図89) 1・2・7・8・9・10・11・12・15はSK03出土土器である。土師器には小型品(1・2)と大型品(7・8)がある。1は口径が9.2cm、2が9.25cm、7が15.0cm、8が17.1cm。10は土師器台付皿で、高台下端部を欠失する。口径18.0cm。9は大和B1型の上師器釜で、底部を欠失する。口径

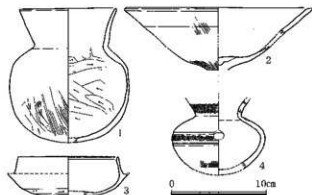


図 88 古墳時代の土器 (1/4)

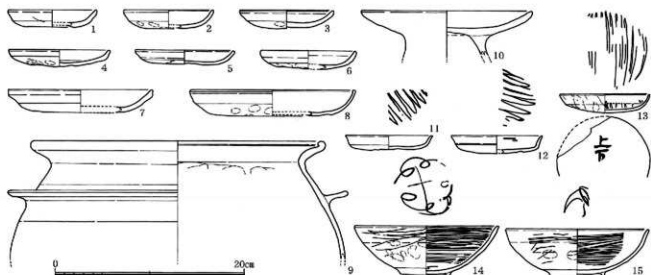


図89 中世土器 (1/4)

30.25cm、鈎の出2.5cm。11・12は瓦器皿で、底部内面に平行線状の暗文がある。口径は、11が9.05cm、12が9.6cm、15は瓦器椀で、底部内面に連結輪状の暗文がある。口径15.05cm、器高5.15cm。

4・5・6はS/D03出土の土師器皿。すべて小型品で、口径は4が10.5cm、5が10.3cm、6が9.9cm。

3・13・14は流路2下層から出土した土器である。3は小型の土師器皿で、口径9.75cm。13は瓦器皿で、底部内面に平行線状の密な暗文が認められる。内面全体に白色の付着物がみられ、底部外面に「上下」の墨書がある。14は瓦器椀で、底部内面に連結輪状の暗文と「十」の焼成後線刻がある。

これらの土器はほぼ同時期の遺物と考えられ、13・14が近江編年I-4期に相当する瓦器椀であることから、12世紀前半～中葉頃の資料と思われる。(鐘方)

銭貨 (図90) 1は唐銭の開元通宝(初鑄621年)で外縁外径2.438cm、内郭内径0.667cm、外縁厚0.116cm、重量3.11g。2は北宋銭の皇宋通寶(初鑄1038年)で外縁外径2.443cm、内郭内径0.766cm、外縁厚0.123cm、

重量2.80g。ともにE発掘区中世包含層より出土した。

3は銭文不明のもので、外縁外径2.452cm、内郭内径0.600cm、外縁厚0.112cm、重量3.02g。第26発掘区の中世溝から出土した。

石鍋 (図91-2) D発掘区の流路2から出土した滑石製石鍋。底部径17.7cm程度的大型品と考えられる。底部厚2.3cm、体部厚1.8～2.2cm。

砥石 (図91-3) D発掘区の中世遺物包含層から出土した流紋岩製の仕上げ砥。表裏・上下面に砥面とし、両側面に礫面をもつ。最大長8.8cm、最大幅6.4cm、最大厚3.5cm、重量172.89g。(大座)

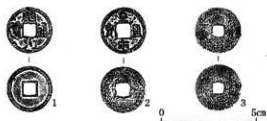


図90 銭貨 (1/2)

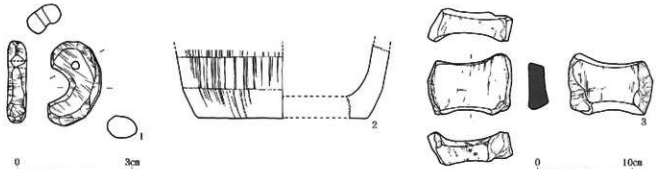


図91 勺玉 (1/1)、石鍋・砥石 (1/4)

III. 別所辻遺跡の調査成果

整備工事で削平される箇所を対象として、平成15年度に微高地Cの南端でE発掘区、平成16年度に微高地DでA・B・C・D発掘区を設定し調査した。各発掘区の位置は図20に示した通りである。

1. 調査の方法

耕土及び表土を重機で除去した後、調査地全体を基準点測量して、旧田上座標軸に沿った1mあるいは2m方眼のグリッドを設定した。グリッド名はXYともに国七座標値の下2ケタで示し、南東隅の値で代表させた。

中世の遺物包含層出土の遺物はグリッドごとに回収したが、縄文時代の遺物包含層から出土した遺物のみは、トータルステーションで出土位置の3次元データを記録しながら取り上げた。

発掘区の平面略測図を1/100で作成し、遺構の位置関係などの情報をそれに整理しながら調査を進めた。そして、個別の遺構図は1/10あるいは1/20、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国七座標値を記入して相対的な位置関係を復原した。発掘区全体の平面図はヘリコプターによる航空写真から縮尺1/50で図化した。

2. 調査の概要

(1) A発掘区

A発掘区は微高地Dの南東端に位置する。もともと北西から南東へ下がる緩傾斜地を形成していたと考えられるが、現在では上下2段の水田に造成されており、試掘調査で時期不明の炭窯や中世の遺構を検出しており、その確認を目的とした。

基本的な層序は、削平の著しい北側で水田耕土の直下が地山となるのに対して、南側では水田耕土以下、

灰色砂質土、褐黄色粘質土、地山（黄灰色砂礫・粘質シルト）となる。遺構面は、中・近世の遺構を確認した地山面及び縄文時代遺物包含層上面である。その標高は西端沿いの北端で484.6m、南端で484.2mであり、南東に向かって下がっていく。

検出遺構には、縄文時代の遺物包含層、および中・近世の炭窯、流路、溝、土坑、石組み遺構がある。以下に、主な遺構の概要について述べる。

i. 中・近世の遺構

炭窯1基、流路1条、溝1条、土坑4基、石組み遺構1基などがある。

炭窯（図94）発掘区の南端で検出した長さ3.3m以上、幅1.98mの炭窯である。緩傾斜する地形に沿ってつくられ、主軸は北で26°西に振れる。上部と南東部が大きく削平されており、深さ0.1mが遺存するのみであるため、構造の詳細は判然としない。

南東側に1.1m×0.7mの楕円形を呈する焚口（深さ0.1m）を設け、床面はその焚口に向かって約0.1m下がる勾配となっている。焚口内に焼上を挟んで2層の黒色炭層が堆積するので、少なくとも2回の焼成が行なわれたことがわかる。窯内からは木炭の他に土師器細片が出土しただけであり、操業時期は中世頃と推定できるに過ぎない。

S D01（図95上）発掘区南側で検出した全長14m以上の流路跡。北西から南東方向へ流れる。上下2層の堆積があり、埋土から15～17世紀の遺物が出土した。上層の堆積層は下層より南側に偏っており、人為的に少し流れを変えている可能性がある。上層流路の上流部分には石組みの護岸が一部に施されている。

S D02（図95下）発掘区中央付近で検出した幅0.8～1.0m、深さ0.1～0.2mの鉤形に屈曲する溝。溝

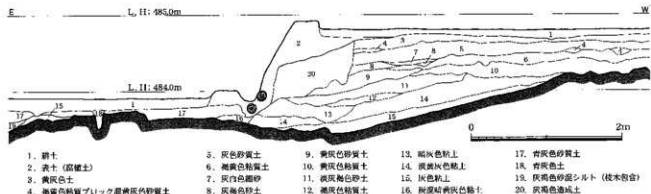


図92 A発掘区南壁堆積土層図（1/50）

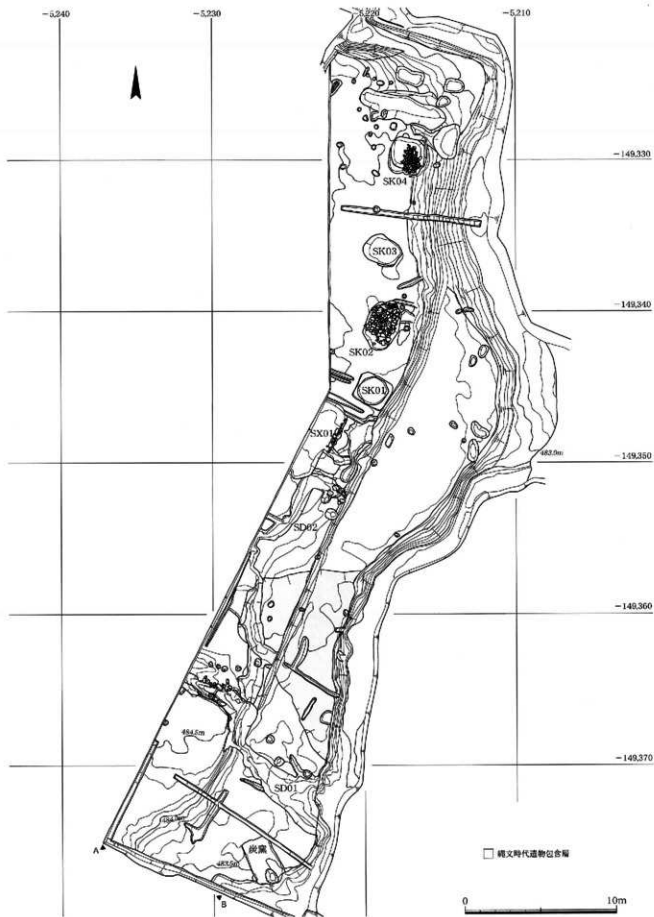


图 93 A 発掘区平面图 (1/250)

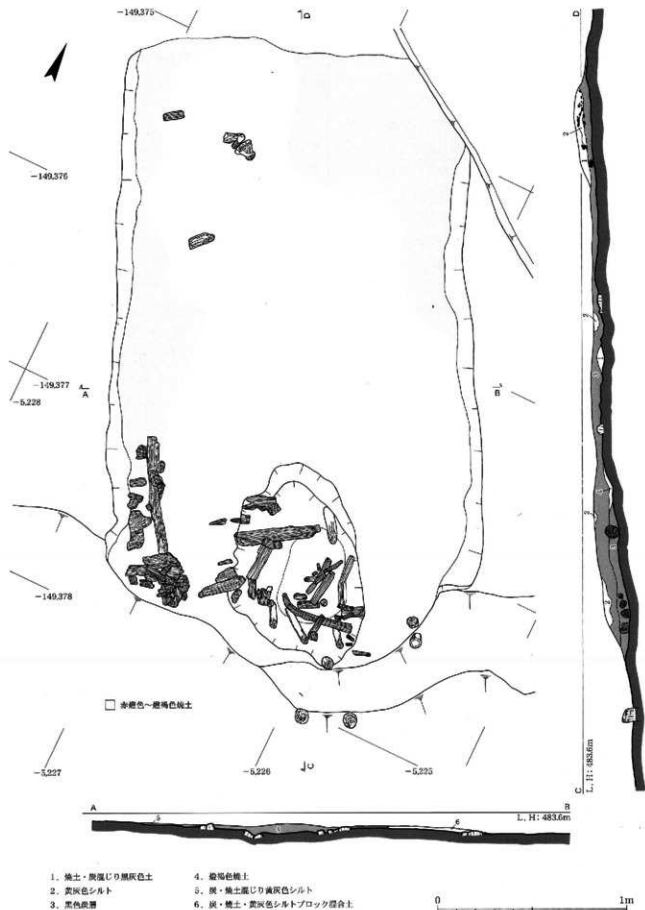


図94 炭窯平面図・断面図 (1/20)

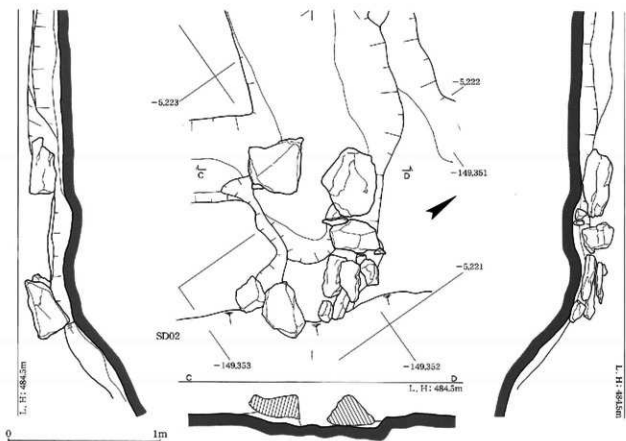
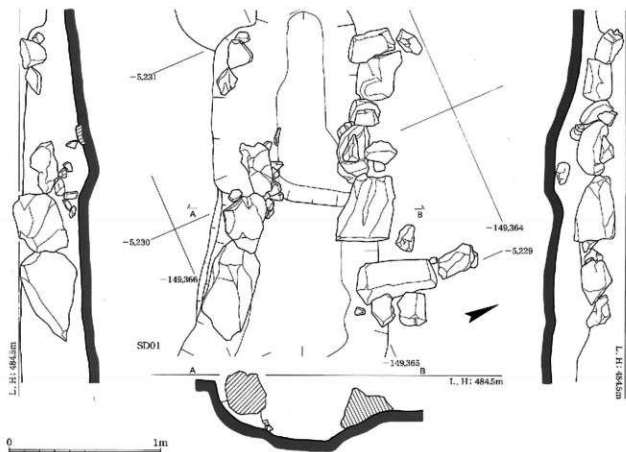
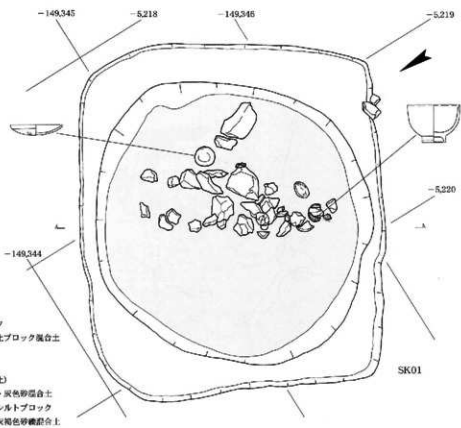
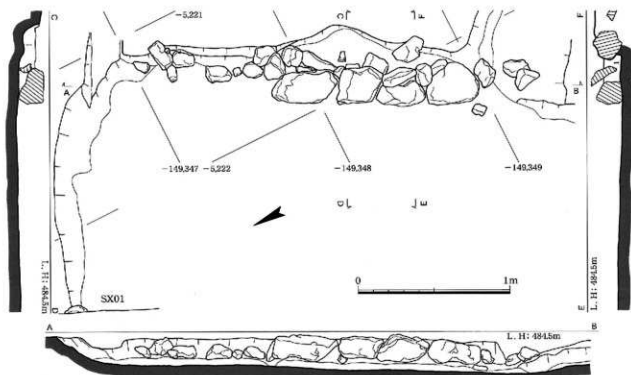


图95 SD 01・02石组平面图・断面图·立面图 (1/25)



- 2. 黄灰色シルトブロック
・灰褐色土ブロック混合土
- 3. 縦縞じり灰色土
- 4. 淡黄灰色砂礫
- 5. 橙黄色粘土 (粘土粘土)
- 6. 黄灰色粘土ブロック・灰色砂礫混合土
- 7. 黄褐色粘土・黄灰色シルトブロック
・灰褐色砂礫混合土



□ 瓦床粘土

図96 SX01・SK01 平面図・断面図・立面図 (1/25)

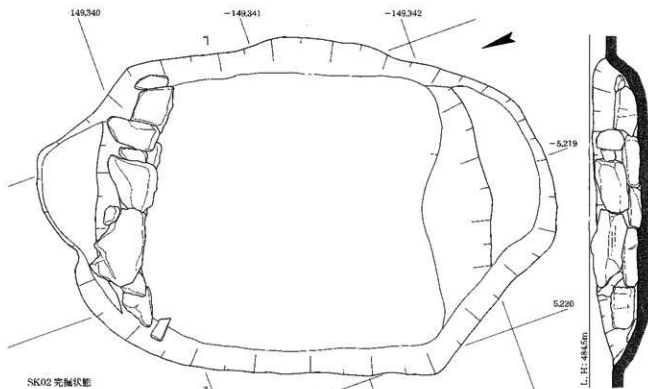
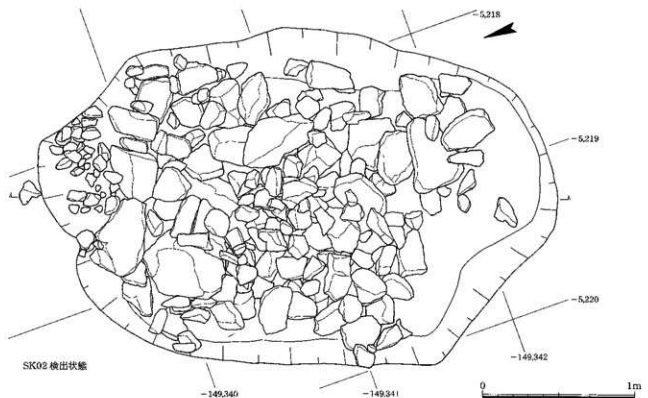


図 97 SK 02 平面図・断面図・立面図 (1/25)

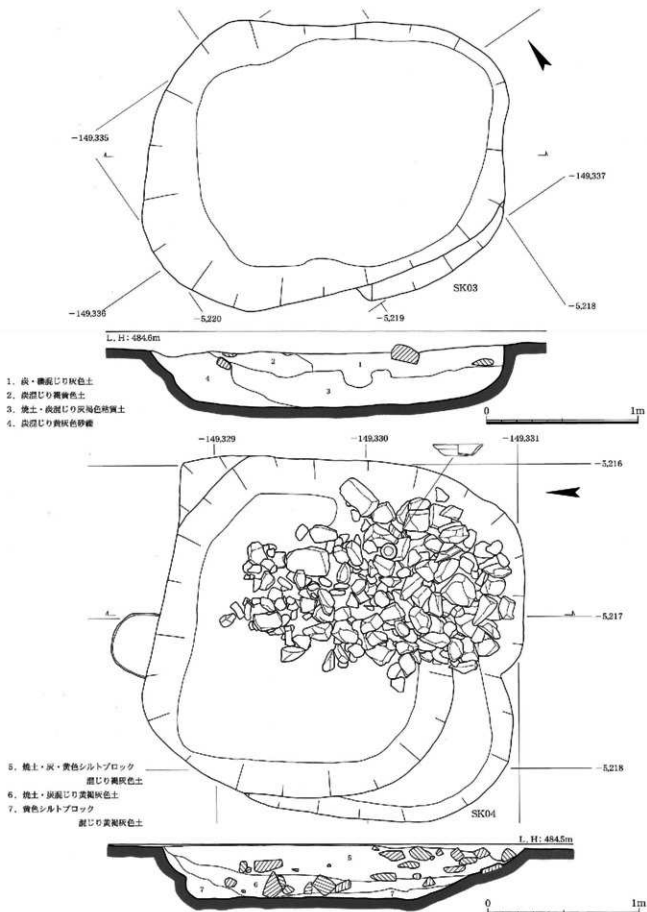


図98 SK 03・04 平面図・断面図 (1/25)

内埋土の一部はS D01の下層埋土と連続し、同時期の遺構と考えられる。埋土から15～17世紀の遺物が出土している。北端が南東へ直角に屈曲し、その端部には石組みの護岸が認められた。(図95下)発掘区外西側に想定される風敷跡からの排水溝であろうか。

S K01 (図96) 発掘区中央付近で検出した2.3m×2.0mの隅丸方形土坑で、深さ0.3mである。中央に直径1.8mの円形枠を据えていた痕跡があり、その底面には厚さ0.3～0.4mの橙黄色粘土が敷いてあった。枠材は有機質製であったらしく、腐朽して遺存しなかった。枠内からは礫と共に17世紀頃の陶磁器・土師器皿が出土した。

S K02 (図97) S K01の北側で検出した3.0m×2.2mの楕円形土坑で、深さ0.35m。土坑北側だけに長さ1.65m、高さ0.3mの2段積み石壁を設ける。その内部に多量の礫を集積しており、それが中央で陥没したような状況を看取できた。礫には焼石も少なからず混在していた。記録を取りながら慎重に礫の除去を行なったが、埋土中に14世紀の上層片が混在するのみで、集積礫内部からは何も出土しなかった。

S K03 (図98) S K02の北側で検出した2.3m×1.9mの不整形土坑で、深さ0.35mである。礫・炭・焼土が混在する灰褐色粘質土などで埋まっていたが、S K02・04のような礫の集積は認められなかった。埋土から14世紀の土器が少量出土した。

S K04 (図98) S K03の北側で検出した2.4m×2.3mの隅丸方形土坑で、深さ0.35mである。土坑内埋土下層(黄灰褐色土)の中央付近と埋土上層(褐色土)の南東部に礫の集積が認められた。集積礫上には土師器皿1点(図123-6)が置かれていた。埋土から14世紀前～中葉の土器が出土した。

S X01 (図96) 攪乱で南側の一部が壊されているが、本来は長さ5.3m、幅1.7m以上の方形掘形内に沿って石壁を設けていたと推定できる。石壁は東側で長さ1.36mが遺存するのみで、他は抜き取られていた。遺存した東側石壁は高さ約0.2mで、4つの石を横方向に並べて掘形との間に礫を入れ裏込めとする。この裏込め土から17～18世紀頃の播鉢片が出土した。

ii. 縄文時代の遺物包含層

発掘区南半に小さな谷地形があり、ここに縄文時代の遺物包含層が認められた。この包含層は上から第1

層：黄灰色シルト、第2層：暗灰色粘土、第3層：灰色シルトと大きく3層に分かれるが、後述する遺物分布の様相から第1～2層を上層、第3層を下層として扱う。遺物の大半は石器であるが、谷部中央付近で神宮寺式と無文土器が集中して出土した。

iii. 縄文時代の遺物分布

縄文時代遺物包含層の掘削を行なった結果、縄文土器62点、石器304点の遺物が出土している。土器分類の詳細は、別所下ノ前遺跡の遺物報告(p.51～57)を参照されたい。なお第4章で報告するが、国立歴史民族博物館の遠部慎・宮田作樹両氏にここから出土した神宮寺式土器の吸着炭素の年代測定をして頂いたところ、cal B C 8, 630～8, 470という暦年代値を得た。この土器の出土位置も分布図中に示している(図99・101)。石器の石材はすべてサヌカイトのため、石材別分布は示していない。

平面分布は、地山上面の旧地形図に投影した(図99)。旧地形は、北西から南東へ下る緩やかな谷地形であり、補足調査区のほぼ中央に小規模な平場がある。土器・石器は、ともに地形の起伏に制約された分布を呈し、傾斜変換点から平場にかけて集中する傾向がある。これは、両者の分布が同様の性格を持つ可能性を示唆するが、分布範囲にはやや差が認められる。

次に垂直分布(図100・101)でこれを見ると、遺物はその多くが縄文時代遺物包含層下層から出土しており、上層ではその密度が薄れることがわかる。またやや落ち込みや浮動があるものの、下層の地山上面付近で早期前葉のI群B1類b1種(神宮寺式)と中期末～後期前葉のV群F類(無文土器)との混在が確認できることから、下層は明らかな2次堆積であるといえる。上層もまた、層内に遺物が散在する傾向があることから2次堆積であるといえよう。出土する縄文土器から、下層は中期末～後期前葉以降の堆積であり、上層はそれ以降の堆積であると考えられる。

なお、土器と石器で分布範囲がやや異なる問題だが、遺物の供給源となった場所の分布が、土器と石器で異なっていた可能性もある。ただし2次堆積においては、小さく軽い遺物がより遠くまで流出すると思われることから、土器より小さく軽い石器がさらに下方まで流出しただけかもしれない。また、下層の土器が地山上面付近にピークを持つのに対し、石器は下層

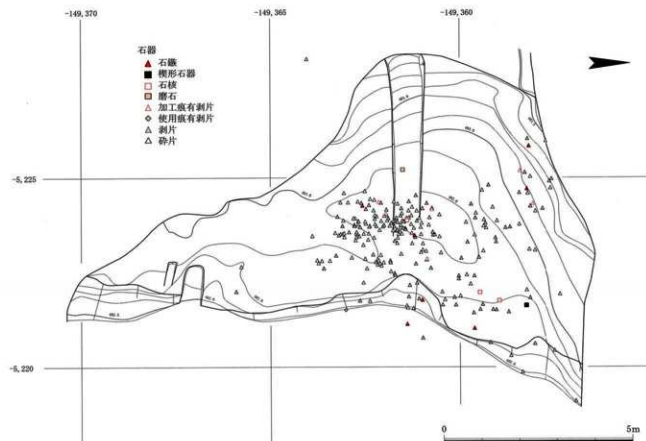
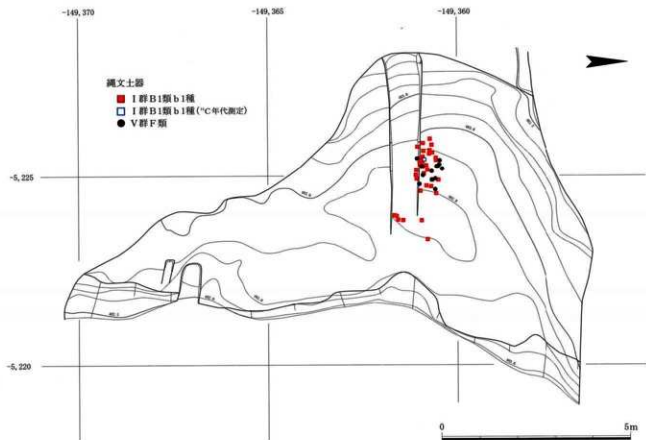


図99 A発掘区 縄文土器・石器平面分布図 (1/100)

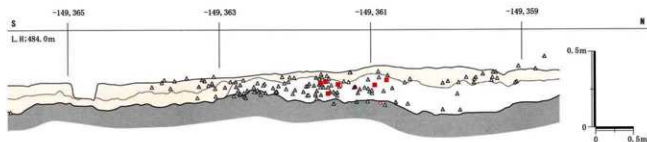


図100 Y = -5,222 ~ -5,224 m間縄文土器・石器垂直分布図 (Y = -5,223 mライン土層図に投影)

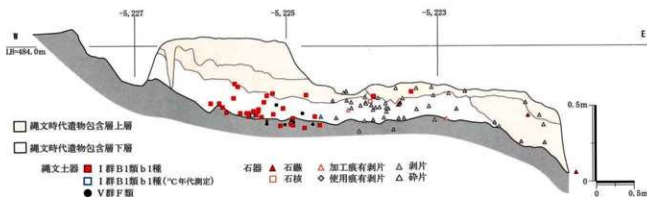


図101 X = -149,360.5 ~ -149,361.5 m間縄文土器・石器垂直分布図 (X = -149,361 mライン土層図に投影)

の上部にその多くが分布するなど、遺物包含層の堆積は一樣なものではなかった可能性がある。いずれにせよ、本来の縄文時代早期、および中期末～後期初頭の活動場所はここよりやや上方に当たる北西方向にあったと考えるのが妥当だろう。

(2) B発掘区

B発掘区は微高地Dの中央東端に相当する。ここはもともと南西から北東へ下がる緩傾斜地を形成していたと考えられるが、現状は上下3段の水田に造成されている。試掘調査で中世の遺構を検出しており、その確認を目的とした。

基本的な層序は、削平の著しい水田北側で耕土の直下が地山(黄褐色砂礫混シルト)となるのに対して、水田南側では地山の上に黄灰褐色土が堆積する。また、発掘区北東部で縄文時代遺物包含層が遺存するのを確認した。

遺構面は、中・近世の遺構を確認した地山上面及び縄文時代遺物包含層上面である。14世紀に構築された2列の石垣によって、遺構面は2段3面に造成されており、現在の水田段差はその地割りを基本的に踏襲していたことが判明した。石垣1で区画された南側の高い段(上段)における遺構面の標高は概ね485.0m前



図102 B発掘区堆積土層図 (1/50)



図103 B発掘区平面図 (1/200)

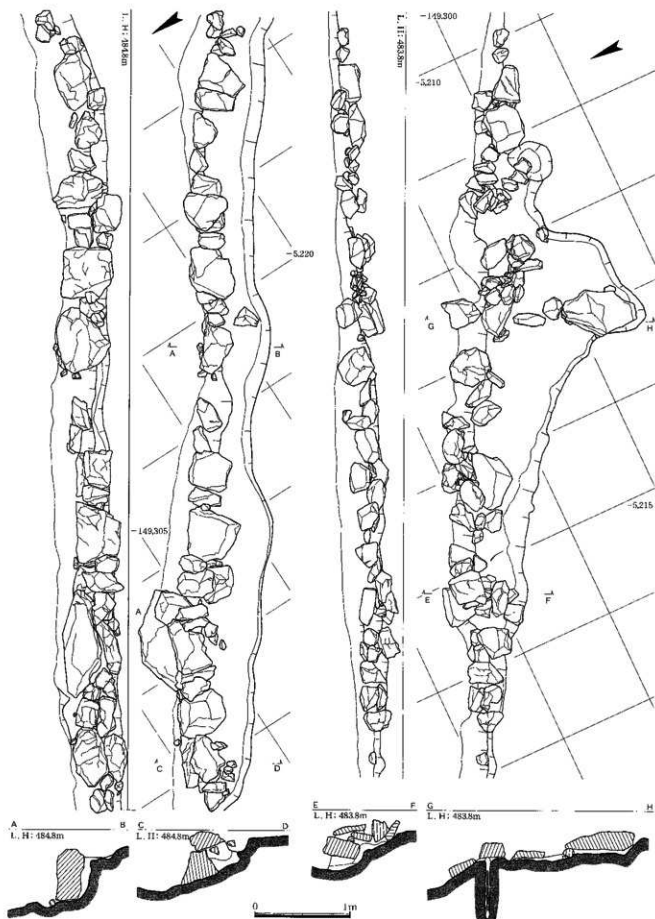


图104 石垣1・2平面图·立面图 (1/40)

後、石垣2で区画された中央の低い段(下段)における遺構面の標高は概ね484.2~484.3m、石垣2外の北側に広がる緩傾斜地における遺構面の標高は概ね483.6~483.7mである。

検出遺構には、中・近世の石垣、土坑、および縄文時代の遺物包含層がある。

以下に、主な遺構の概要について述べる。

1. 中・近世の遺構

石垣2列、土坑4基などがある。

石垣1(図104) 上段を画する全長8.45m以上、高さ0.7m以上の石垣である。その主軸は北で西へ約57°振れる。石材の大半が花崗岩である。土圧によって全体的に前へせり出しているが、1~2段分の石積みがよく残っている。石垣の前面裾に沿って幅0.25~0.4m、深さ0.07m前後の浅い溝がある。地山をL形に切り出し、1石目の形状に合わせて底を調整しながら石を立て並べ、この上に2石目以上を小口積みする。裏込め上から14世紀中葉頃の土器が出土した。

石垣2(図104・105) 下段を画する全長12m以上、高さ0.4m以上の石垣である。その主軸は北で西へおよそ62°振れ、石垣1とほぼ平行する。石材のほとんどが花崗岩である。石垣の前面裾に沿って幅0.6~0.8m、深さ0.3m前後の溝があり、底は南東方向へ下がっている。石垣は著しく崩壊し、ほとんどの石がこの溝内に崩落している。崩落石材に混ざって14世紀中葉~

15世紀の土器が出土した。

S K05(図106) 南北3.1m、東西3.0m以上、深さ0.9mの隅丸方形土坑である。土坑内北東側の一部にのみ長さ1.8m、高さ0.7mの2~3段積みの石壁を構築した後、底の全面に0.15m前後の厚さで黄色粘土を敷き詰めて粘土床をつくる。粘土床の上には厚さ0.15mにわたって礫を全面に入れる。この礫層中には焼石、焼土塊、常滑産瓷片が混在したが、その上面で何かを焼成したような痕跡は認められなかった。礫層の上には多量の礫が盛り上がるように堆積し、その埋土中には焼土や炭が混在した。出土遺物から15世紀頃の遺構とみられる。

S K06(図107) 南北3.35m、東西2.4m以上、深さ0.4mの隅丸方形土坑で、東側は削平によって壊されている。内部に礫の集積が認められたが、それに規則性はない。埋土から14世紀頃の遺物が出土した。

S K07(図107) 長さ2.8m、幅1.6m、深さ0.2mの長方形土坑である。その主軸は、北で西へ69°振れる。重複関係からS K06よりも新しい。底には厚さ0.15mの細かい砂礫を入れている。埋土中に含まれた大きい礫は、S K06起源のもので、S K07に伴うわけではない。14世紀頃の遺物が若干出土した。

S K08(図107) 1.95m×1.7mの隅丸方形土坑で、深さは0.2mである。内部を部分的に囲うような状況で礫が認められたが、その周辺からの出土遺物はな

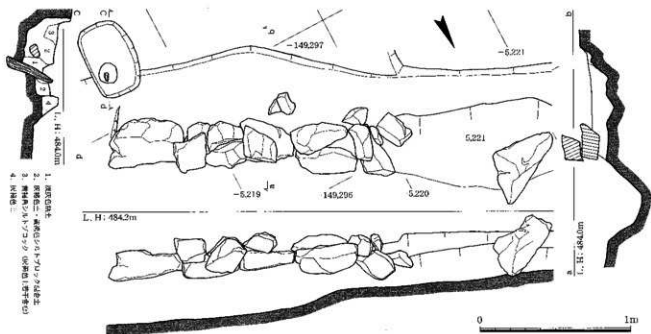


図105 石垣2北端部平面図・立面図・断面図(1/25)

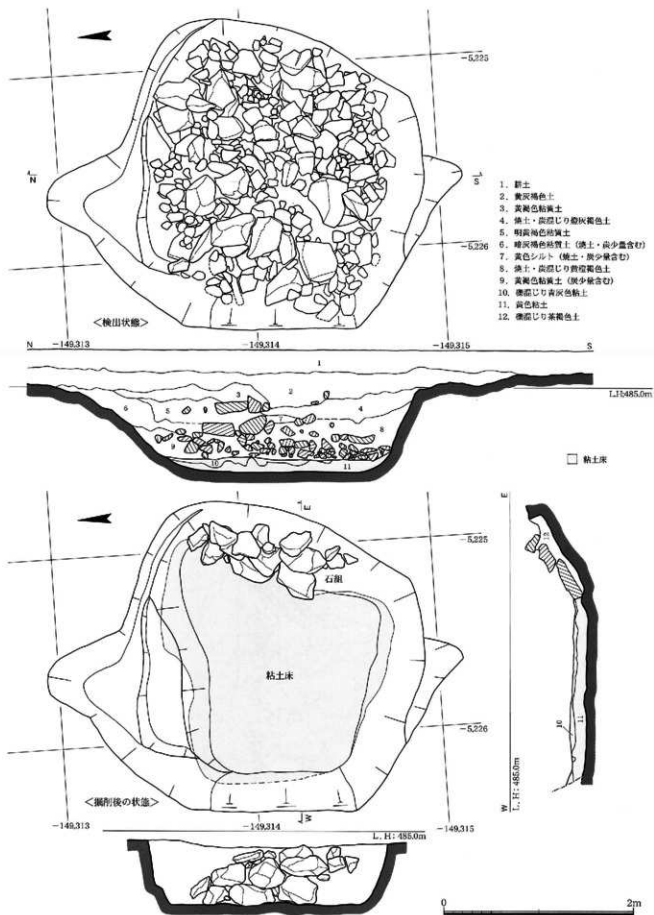


図 106 SK 05 平面図・断面図 (1/40)

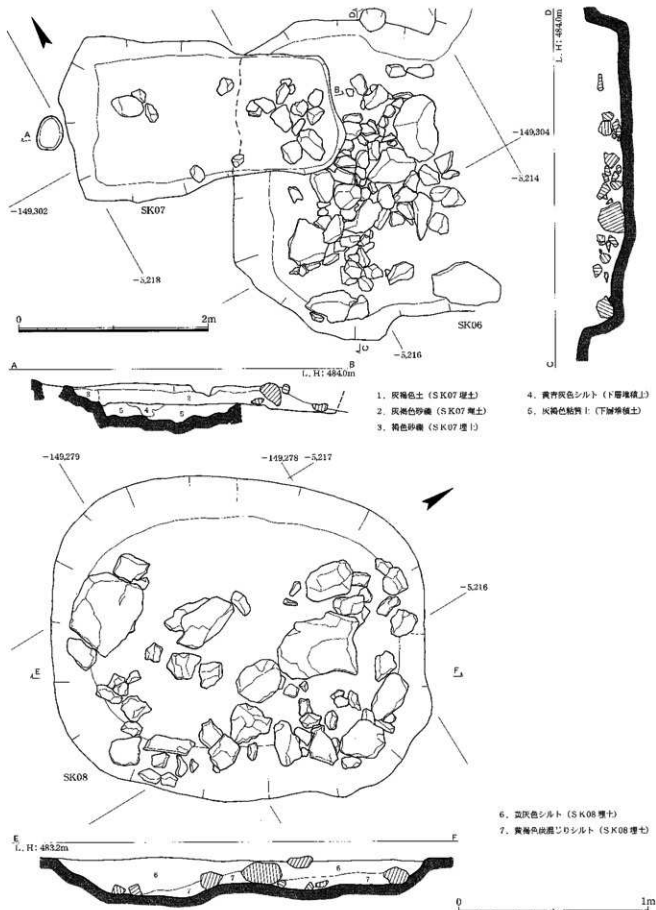


図 107 SK 06・07・08 平面図・立面図 (1/40)

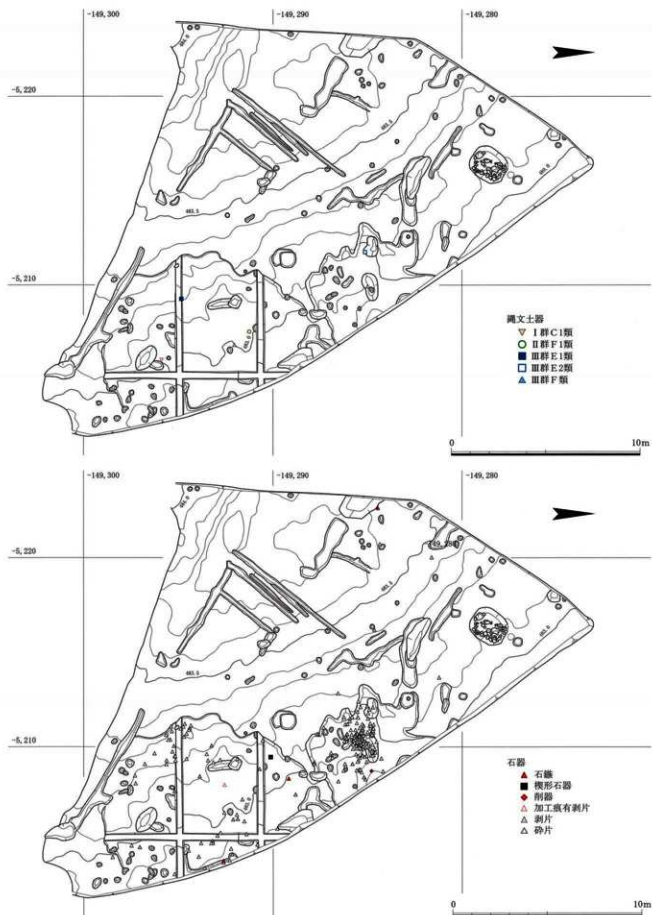


图 108 B 発掘区 縄文土器・石器平面分布図 (1/200)

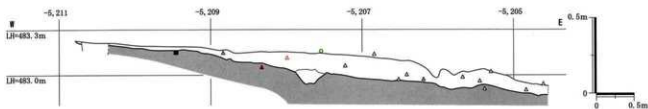


図109 X = -149,291 ~ -149,293 m間縄文土器・石器垂直分布図 (-149,291 mライン土層図に投影)

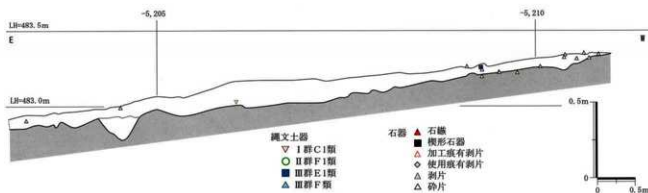


図110 X = -149,293 ~ -149,295 m間縄文土器・石器垂直分布図 (-149,295 mライン土層図に投影)

かった。埋土から14世紀頃の遺物が若干出土した。

ii. 縄文時代の遺物包含層

発掘区北東部に広がる緩傾斜面の一部に縄文時代早期の遺物包含層が認められた。包含層は黄灰色シルトで、その厚さは0.1～0.2mと薄く、遺物の出土量も少ない。出土遺物は石器の剥片類がほとんどであるが、他に神並上層式をはじめとして、早期前葉～前期初頭の土器が出土した。

iii. 縄文時代の遺物分布

縄文土器20点、石器297点の遺物が出土しており、これを地山上面の旧地形図に投影した(図108)。土器分類の詳細は別所下ノ前遺跡の遺物報告(p.51～57)を参照されたい。サヌカイト製以外の石器にはチャート製の破片が1点あるが、中世土坑からの出土であるため、図示していない。

平面分布を見ると、早期前葉から前期初頭までの土器が僅かに散在する様子が窺える。石器については、X = -149,286.5; Y = -5,210.2付近を中心として、小規模な集中が見られるが、これは風倒木痕と思われる不整形土坑から出土したものであり、それ以外は散漫な分布を呈する。

これらを垂直分布から見ると、縄文時代遺物包含層内に早期前葉～前期初頭の土器が混在する様子が窺える(図109・110)。石器も層境にピークがなく、層内に散在していることから、遺物は全て2次堆積による

ものと考えるのが妥当であろう。遺物量も非常に少ないことから、遺物の供給源となった縄文時代早期の活動場所は、ここよりやや離れた場所にあったか、活動自体が非常に小規模なものであったと考えられる。

(3) C発掘区

C発掘区は、微高地D中央南側の一段高い微高地上に位置する。現状は切り土造成された一枚の水田で、ほぼ平坦面となっている。試掘調査で中・近世の遺構と縄文時代の遺物包含層を検出しており、これらの確認を目的とした。

基本的な層序は、削平の著しい西側で水田耕土の直下が地山となるのに対して、東側では水田耕土以下、灰色土、灰褐色土と続き、地山(淡茶褐色砂礫)となる。発掘区南東部の一部で縄文時代遺物包含層が部分的に遺存するのを確認した。遺構面は中・近世の遺構を確認した地山上面及び縄文時代遺物包含層上面である。その標高は西側で487.5m、東側で486.6mである。

検出遺構には、中・近世の土坑などがある。以下に、主な遺構の概要と、縄文時代遺物包含層の遺物分布について述べる。

i. 中・近世の遺構

掘立柱建物1棟、土坑3基などがある。

S B 01 発掘区中央西側で掘立柱建物の柱穴2基を確認した。建物跡の大半が発掘区外へ続いたため、その詳細は不明である。柱間は1.0m、柱穴の深さ0.3m。

西側の柱穴内に直径0.15mの柱根が残る。柱穴埋土から15～16世紀ごろの遺物が出土した。

SK09 (図112) 長径1.4m以上、短径1.3m、深さ0.1mの楕円形掘形内に長径1.2m以上、短径1.1mの楕円形桶を埋設した土坑であると推測できる。桶自体は腐朽して遺存しないが、SK10の構造とほとんど同じであり、桶の外周には燈灰色粘土を貼り付けている。重複関係からSK10よりも古い。

SK10 (図112) 長径1.9m、短径1.4m、深さ0.5mの楕円形掘形内に長径1.5m、短径1.1m、深さ0.45m以上の楕円形桶を埋設した土坑である。底に厚さ

0.05mの淡黄色粘土を敷き、その上に桶を置いて外周に黄燈色粘土を貼り付ける。桶自体は腐朽して遺存しないが、その痕跡が底や外周の粘土面にはっきりと残っていた。桶痕跡内埋土から16世紀頃の遺物が出土している。

SK11 (図112) 長さ4.7m、幅2.7m、深さ0.1mの長方形土坑。長側壁の一部に厚さ0.1mの黄燈色粘土が貼り付けてあった。埋土には多量の炭や焼土が混在しており、15～16世紀頃の遺物が出土した。

ii. 縄文時代遺物包含層

発掘区東側に小さな谷地形があり、その一部分に縄

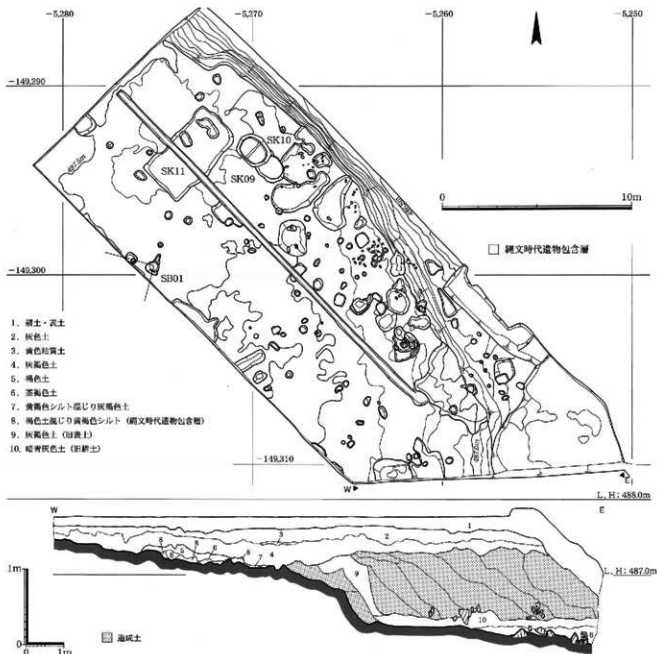
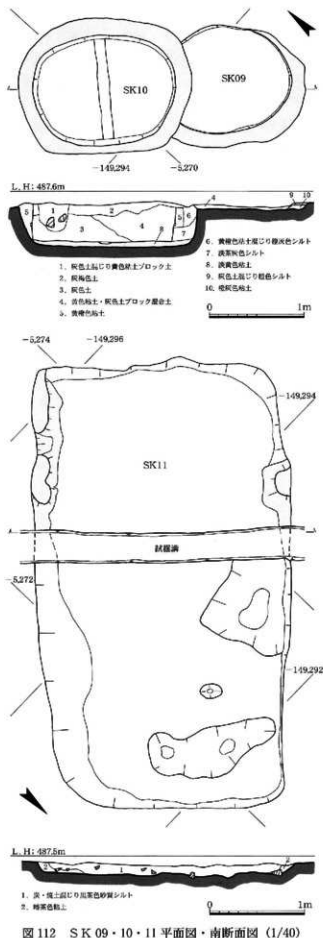


図 111 C 発掘区平面図 (1/200)・南壁堆積土層図



文時代早期の遺物包含層がわずかに遺存していた。包含層は暗黄褐色シルトで、その厚さは0.1m前後にすぎない。出土遺物は大半が石器の剥片類だが、八崎崎Ⅰ式・箱燵式土器（早期後葉）と、石鎌・楔形石器をはじめとする石器がある。

(4) D発掘区

D発掘区は、微高地D北縁部から流路1の南半部に位置する。試掘調査で中世の遺構を検出しており、また流路1が微高地口を西から北へ取り巻くように流れていることが明らかになっている。現状では西北側の流路1内にあたる箇所が大きく盛土を行ない、1段高い畑地・宅地として利用されていた。

基本的な層序は、微高地である南東側で削平が著しく、水田耕土の直下が地山となる。それに対して、谷部流路の北西側では水田耕土以下、造成土、淡紫灰色シルト、紫灰色シルトが堆積して地山（青灰色砂礫）となる。遺構面は、中世の遺構を確認した地山面である。その標高は微高地上で概ね483.0～483.3m、谷部内で481.5～481.7mである。

検出遺構には、中世の土坑、掘立柱建物、溝、庭園風の石組みなどがある。

以下に、主な遺構の概要について述べる。

S K 12 (図114) 6.4m×3.3mの不整形土坑内の東側におよそ2.7m四方の範囲で礫の集積が認められた。これらの集積礫は、さらにその分布から大きく北西側の一群（北群）と南東側の一群（南群）に分かれて密集する。北群の密集範囲はおよそ1.5m×1.0m、南群の密集範囲は1.3m×0.8mである。二群ともに中央が若干窪んで落ち込んだような状態を取でき、深さ0.3mで周囲よりも0.1mほど深くなっている。そこで、その内部に何かが納められていたのではないかと考え注意深く礫を除去していったが、何も出土しなかった。埋土から若干の14世紀頃の遺物が出土している。

S D 03 S D 04 屈曲部付近で合流する南北溝で、南から北へと流れる。長さ14m以上、幅2.0～2.3m、深さ0.4～0.6mで、杭を打ち込み護岸している。埋土から13世紀後半の遺物が出土した。

S D 04 流路1の底に設けられた溝で、幅1m前後、深さ0.2mである。発掘区西側から約7mの地点で東西方向から南北方向へ大きく屈曲する。



图 113 D発掘区平面図 (1/200)・北塚堆積土層図

この屈曲部で大きく水の流れが変わるため、石組施設が設けられている。屈曲箇所には石列がよく遺存するが、それより西側では丸太を混じえた石列が少し崩れている。屈曲部のすぐ北側には2本の半裁した丸太が平行して並べられ、水を真っ直ぐにSD05との合流部へ導くようになっている。またSD03からの流水がSD04に直接流れ込まないように、その南東側には石列がつけられている。埋土から13世紀後半の遺物が出

上した。

SD05 SD04の北側2mのところにある幅1m前後、深さ0.2mの溝で、SD04とほぼ平行する。SD04との合流点には礫を乱雑に積んで堰き止めた状態が残っている。おそらく何らかの理由でSD05からSD04へと水の流れを変更させたのだろう。埋土から13世紀後半の遺物が出上した。

SX02 2.1m×1.6mの方形土坑で、東側に開口し

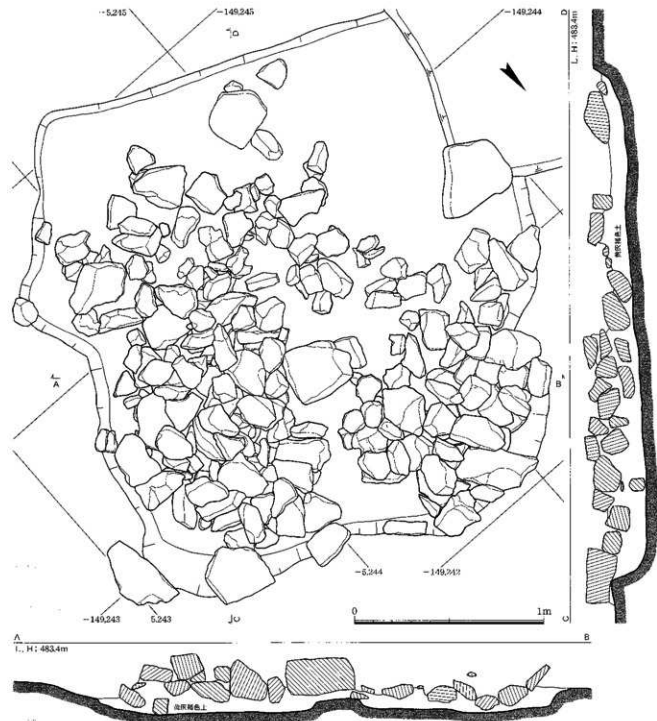


図114 SK 12平面図 (1/20)

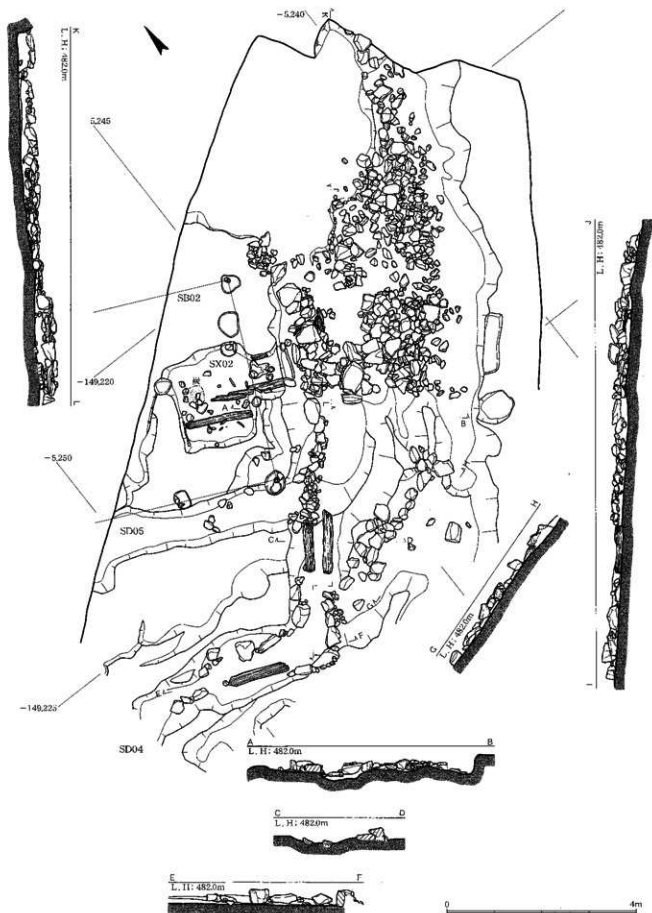


図 115 庭園風石組み平面図・立面図 (1/80)

て庭園風の石組みと接続する。深さ0.1mで、中央西側に火を焚いた時の炭が堆積し、その周囲の礫や地面が焼けている。南半には木材を平行に並べ置いてあるが、その機能は不明である。埋土から13世紀後半の遺物が出土した。

S B02 S X02を取り囲むように柱穴があり、覆屋のような建物が存在した可能性が高い。桁行3.2m以上、梁行3.8mで、発掘区外西側へと続く。重複関係から柱穴はS D05より新しい。建物がS X02と一体的な遺構であるとすれば、S D04が機能した時期にそれらが併存していたと想定することもできるだろう。

庭園風の石組み遺構 S D04あるいはS D05からの流水は、S D04とS D05の合流点北側にある深さ0.35mの凹みで一度滞水し、オーバーフローした水が凹みの北に設けられた石段を越えて石組み導水路を流下する仕組みとなっている。

石組み導水路の東側には礫の集積が流路に沿って続くが、特にその始点となる南側には多くの礫が積み上げられて島状の独立した高まりが形成されている。

石組み導水路の西側では、S X02との接続箇所近くに立石を伴う平面的な配石があり、石組み自体は北へ3.6mほどさらに延びる。埋土の上層から14世紀前半、

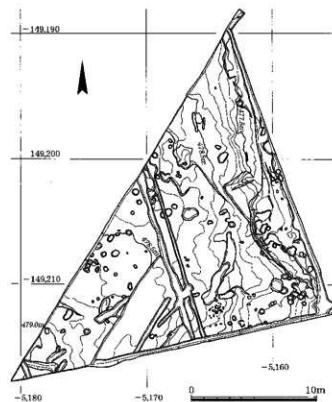


図116 E発掘区平面図(1/300)

下層から13世紀後半の遺物が出土した。

(5) E発掘区

試掘調査第7発掘区で縄文時代遺物包含層の一部を確認したため、発掘区を設定して調査を行なった。

基本的な層序は、水田耕土の下に、黄褐色色土、灰褐色砂質土、褐色土、茶灰色土、灰黄色シルト(縄文時代遺物包含層)があり、青灰色砂混シルトの地山となる。発掘区内全体が南西から北東方向へ向かって下がる傾斜地で、南西隅で標高479.2m、北東隅で標高477.5mとなり、その比高差は1.7mである。14世紀以降の水田造成によって大きく地形が改変されており、それに伴う杭列がよく残る。

別所辻堂遺跡の北端にあたるが、遺構は13世紀頃の小土坑が点在するのみで顕著なものは認められなかった。縄文時代遺物包含層は発掘区南東部に遺存しており、微高地Cの南東斜面の堆積層と考えられる。早期前葉の神宮寺式土器と早期後葉の条痕文土器が出土したが、遺物包含層の遺存状態が悪いことから、その数は極めて僅少である。

(6) 別所辻堂遺跡の縄文時代遺物分布

縄文土器141点、石器728点が出土したが、大半がA・B発掘区の出土である。その他の発掘区は遺物包含層の遺存状態が悪く、また遺物量が少なすぎるため、分析対象となり得なかった。

微高地DはA発掘区南部、B発掘区北東部、C発掘区東部に遺物包含層が遺存する。いずれも2次堆積層と考えられるが、早期前葉はA・B、早期後葉はB～D、早期末～前期初葉はB、前期前葉はD、中期末～後期初葉はA発掘区から遺物が出土している。各発掘区の層は対応関係がなく、遺物包含層の広がりには小範囲に限られる。よって微高地Dにはこれらの時期の遺跡があったと考えられるが、その活動は極めて小規模なものであったか、あるいは中心的な活動場所が微高地Dの奥部にあったと考えられる。また微高地Cには早期前葉～後葉の出土遺物があり、該期の遺跡があったと考えられるが、遺物包含層の遺存範囲も狭く、遺跡範囲を推定するには至らない。ただし微高地Aに隣接する微高地に当たるため、今後の調査では下ノ前遺跡との関連も視野に入れる必要がある。(鐘方・大窪)

Ⅲ. 出土遺物

縄文時代、中・近世の遺物が出土したが、その主体は縄文時代早期と13～15世紀の遺物である。

以下、主要な遺物について述べる。

(1) 縄文時代の出土遺物

ⅰ. 縄文土器(図117～121、表16・17)

別所辻堂遺跡で出土した縄文土器は総数141点、約1,115gである。そのうちⅠ群が46点、約281g、Ⅱ群が51点、約598g、Ⅲ群が23点、約108g、Ⅳ群が3点、約19g、Ⅴ群が18点、約108gで、Ⅰ・Ⅱ群が大半を占めている。地点ごとの出土量はA発掘区が62点、約324g、B発掘区が20点、約110g、C発掘区が22点、約231g、D発掘区が8点、約99g、E発掘区が29点、約349gである。

A発掘区では早期前葉の神宮寺式、C・E発掘区では早期後葉の土器がまとめて出土した。ただし、それぞれ同一個体と考えられるため、個体数は少ない。またD発掘区ではⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ群が出土するが、各々の点数は1・2点に留まる。このことから辻堂遺跡の利用は早期後葉を除き、ドノ前遺跡より消極的であったと考えられる。以下発掘区ごとに報告を行なう。

A発掘区出土土器(図117・118)

早期前葉の土器(1)

1はⅠ群B1類b1種としたもので、原体長軸に対して右下がりに刻んだネガティブな楕円文を全面縦位に施す。口縁部から底部の破片が1個体分(計38点)出土し、残存良好で部位が明らかなものから器形復原を行なった。底部はやや丸みを帯びた尖底で、緩やかに器体が立ち上がり、口縁部が外反する器形である。内面はナデによって平滑に調整され、胸部下半には右→左上方向の擦痕と指頭圧痕が観察される。口縁部内面にも指頭圧痕が認められ、下方から上方へユビオサエとナデにより薄く引き延ばしながら成形したと考えられる。外面は文様の切合から3単位の楕円文を左→右方向へ縦位に施したと考えられる。楕円文の形状から神宮寺式古段階に比定されると考えられる。

早期末前期初頭の土器(2～7)

2はⅢ群E1類としたもので、外面に左上がりの細かい条痕を施し、内面は左上がりのナデが行なわれている。角閃石を多く含み、外面に僅かに煤が付着している。3はⅢ群E2類としたもので、胸部下半の破片

である。外面は右上がりの条痕を縦位の条痕が切っている。内面は右上がりに条痕を施している。4・5はⅢ群E3類a種としたもので、4は外面に左上がりの擦痕状の条痕を施し、内面はナデを行なう。5は外面に左上がり、内面に右上がりの擦痕状の条痕を施す。6はⅢ群E3類b種としたもので、外面に右上がりの擦痕状の条痕、内面に右上がりの細かい条痕を施している。7はⅢ群F類としたもので、外面は鉄分の沈着により調整は不明。内面は剥離が著しいが、ナデ・ユビオサエが観察される。

中期末～後期前葉の土器(8～11)

8～11はⅤ群G類としたものである。8は胸部下半の破片で、外面は緩やかに立ち上がり、内面はユビオサエによる屈曲が顕著である。9は胸部片で、外面は横位のナデによる凹凸が認められる。10は外面を左上がりのナデ、内面をナデとユビオサエで調整する。11は胸部下半の破片で、内外をナデで調整している。

8～11は砂粒が多く、細かい雲母を含む。また、繊維や角閃石などの特徴的な混和材を含まず、無文であるため当時期に位置づけられた。しかし、8・11は立ち上がり方から丸底になる可能性が考えられ、これらはより古い時期に帰属することも考慮する必要がある。

B発掘区出土土器(図118)

早期前葉の土器(12～14)

12・13はⅠ群C1類としたもので、外面にやや頂部が丸みをもつ横長の山形文を横位に施す。12の内面は横位のナデによる擦痕と指頭圧痕が顕著に認められる。13の外面は文様の切合から下方から上方に横位施文したと考えられ、内面は丁寧なナデにより平滑に調整されている。原体は2単位と考えられる。

14はⅠ群C2類としたもので、外面は平行線文を左→右方向へ横位に施す。内面は摩滅のため、調整不明である。12～14は神並上層式に比定されるが、原体と胎上が異なるため同一個体とは考えられない。

早期後葉の土器(15～18)

15はⅡ群C1類としたもので、内面に爪形の連続刺突を行なっている。位置的に外面のユビオサエに対応することから装飾的意図によるものではなく、押圧の際に偶発的に施されたものと考えられる。その場合内面の爪形はD字状を呈していることから左→右方向へユビオサエが行なわれたと考えられる。類例は輪畑式

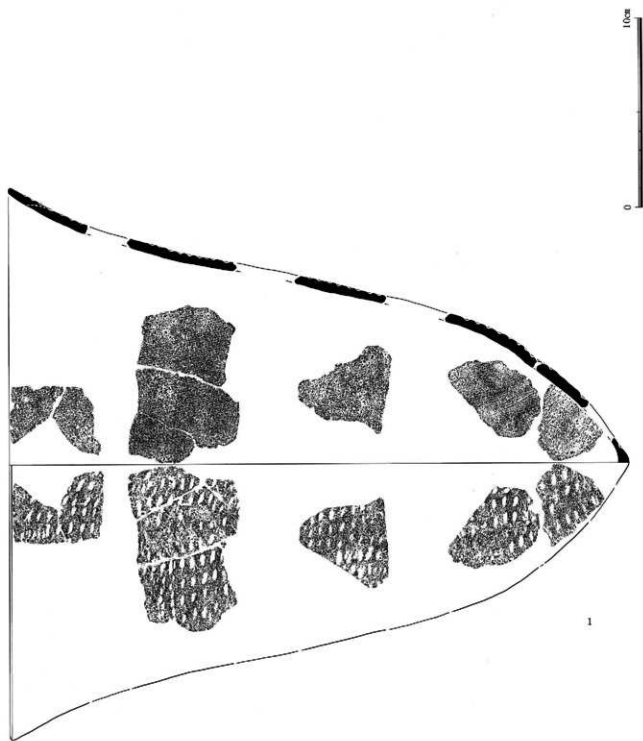


図 117 別所辻堂遺跡出土縄文土器① (1/2)

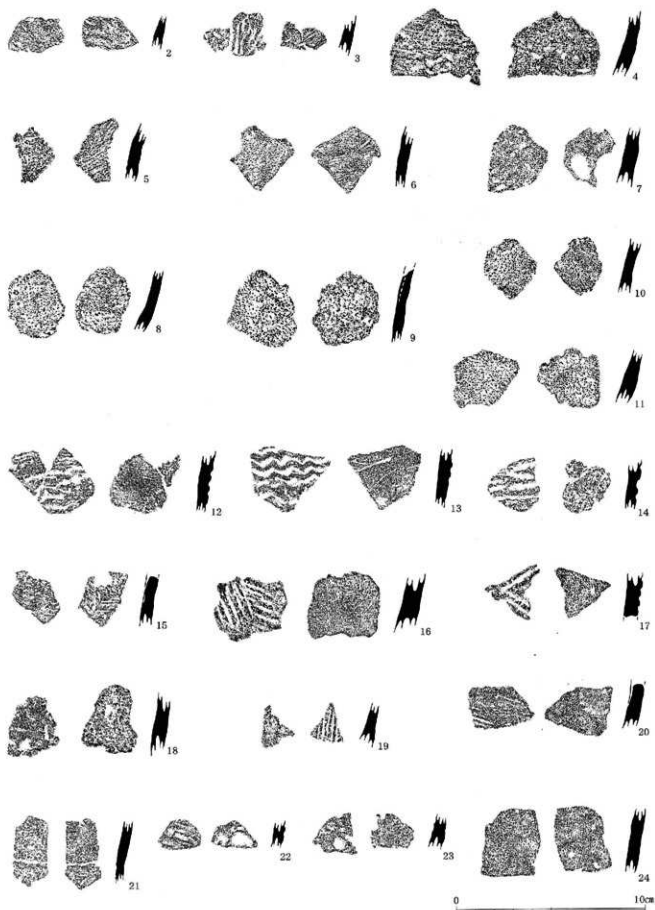


图 118 别所辻堂遺跡出土縄文土器② (1/2)

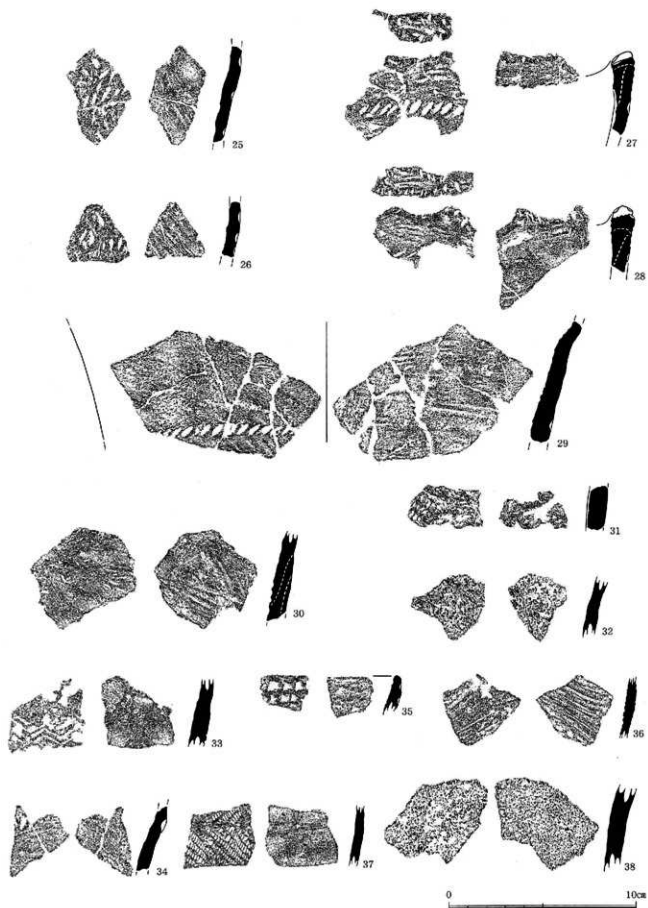


図 119 別所辻堂遺跡出土縄文土器③ (1/2)

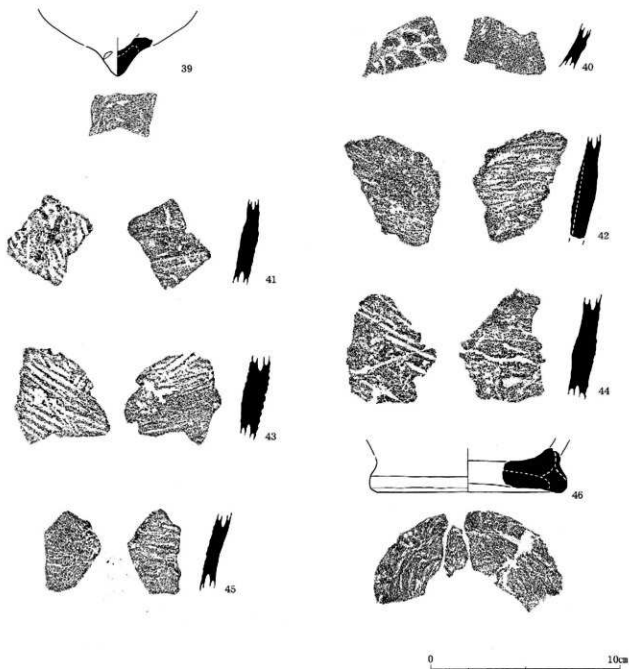


図120 別所辻堂遺跡出土縄文土器④ (1/2)

に多く見られ、内面の条痕の様相から本稿におけるⅡ群C1類へ位置づけた。

16・17はⅡ群E類としたもので、16は外面に左上がりの条痕を角度を変えて施文し、17は下方から上方へ左上がり→右上がりに交互に施している。内面はいずれもナデで平滑に調整している。

18はⅡ群F類としたものである。砂粒・繊維を多く含み、器面内外に繊維の抜け痕が顕著に観察される。
早期末前期初頭の土器 (19～24)

19・20はⅢ群E1類としたものである。19の内面は

縦位に条痕を施し、20は外面を左上がりの条痕、内面をナデで調整している。21～23はⅢ群E2類としたもので、21・23は内面に右上がり、22は外面に左上がりの粗い条痕を施す。24はⅢ群F類としたもので、内外をナデで調整し、胎土は角閃石を多く含む。

C発掘区出土土器 (図119～25～32)

25・26はⅡ群B類としたものである。外面に波状の刺突列を施し、内面は成形時の指頭圧痕と左上がりの条痕が観察される。口縁部付近の破片で、頸胴部界に段を持つ器形のハッ崎I式に比定される。両者は同一

表 17 別所辻堂遺跡出土縄文土器観察表②

報告 番号	X (m)	Y (m)	H (m)	層位	分類	時期型式	器種 形状	特徴	図解	器壁(μm)			胎土			文様			備考
										器土	器内	器外	器土	器内	器外	器土	器内	器外	
32	-149.200.979	-5.261.189	487.208	黄褐色 粘土下層	Ⅱ群F類	早期後葉	縄文 器	縦線無文	外ナデ 内ナデ	0.65	0.5	0	0	0	10970/2 灰黄	10970/4 にない黄褐	276/1 オーブ基		
33	〇発掘区 K25-741区			灰白色 シルト	Ⅱ群F類	器形式	器形 調整	押型文	外山形ナデナ 内ナデ・ユビオサエ	0.95	0.8	0	0	0	276/2 にない黄	10970/1 基陶	10970/1 黄灰		
34	-149.200.925	-5.261.230	457.311	黄褐色 シルト	Ⅱ群B類	ハッ崎Ⅰ式	器形 調整	器形調整 のみ	外山形・赤線・ナデ 内ナデ・ユビオサエ	0.75	0.8	0	0	0	276/2 にない黄	276/2 にない黄	276/1 オーブ基		
35	D発掘区 328-745区			灰白色 シルト	IV群A類	北白川 下層Ⅰa式	器形 調整	口縁直下 D字突	外山形・ナデ 内内底	0.8	0.25	0	0	0	276/2 にない黄	276/2 にない黄	276/2 にない黄		
36	-149.241.082	-5.247.254	483.206	黄褐色 シルト	IV群A類	北白川 下層Ⅰa式	器形 調整	赤線条痕	外内底 内内底	0.5	0.35	0	0	0	276/2 にない黄	276/2 にない黄	276/2 にない黄		
37	D発掘区 K21-745区			黄褐色 シルト	IV群B類	北白川 下層Ⅰa式	器形 調整	羽状縄文	外山形・R 内ナデ	0.5	0.35	0	0	0	276/2 にない黄	276/2 にない黄	276/2 にない黄	断面0.2mm 彫彫0.3mm	
38	〇発掘区 K25-741区			黄褐色 シルト	V群C類	中期後葉	器形 調整		外ナデ 内ナデ	1.0	0.8	0	0	0	277/2 にない黄	277/2 にない黄	277/1 黄灰		
39	-149.210.228	-5.168.087	476.440	黄褐色 シルト	底層Ⅰ類	神宮寺式	器形 調整	押型文 乳鉢状 底層	外ナデタイプ神宮寺 内内底	1.3	0.85	0	0	0	276/1 にない黄	729/1 オーブ基	729/1 黄灰		
40	第1発掘区 南半部中野台発掘			黄褐色 シルト	Ⅱ群C類	高山寺式	器形 調整	押型文	外内底	0.65	0.48	0	0	0	276/2 にない黄	729/1 オーブ基	276/1 黄灰		
41	-149.210.928	-5.170.001	476.532	黄褐色 シルト	Ⅱ群C類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外内底 内内底	0.9	0.56	0	0	0	10970/2 にない黄	10970/2 にない黄	276/1 黄灰		
42	第1発掘区 北半部中野台発掘			黄褐色 シルト	Ⅱ群C類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外内底 内内底	1.2	0.65	0	0	0	10970/2 にない黄	10970/2 にない黄	276/1 黄灰		
43	-149.210.602	-5.171.858	476.720	黄褐色 シルト	Ⅱ群C類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外内底 内内底	1.1	0.7	0	0	0	10970/2 にない黄	10970/2 にない黄	276/1 黄灰		
44	-149.209.493	-5.170.034	476.653	黄褐色 シルト	Ⅱ群C類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外内底 内内底	1.15	0.68	0	0	0	10970/2 にない黄	276/2 にない黄	276/1 黄灰		
45	-149.210.763	-5.171.463	476.736	黄褐色 シルト	Ⅱ群C類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外ナデ 内内底	0.8	0.8	0	0	0	276/2 にない黄	276/1 黄灰	276/1 黄灰		
46	-149.219.626	-5.171.989	476.717	黄褐色 シルト	底層Ⅰ類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外ナデ 内ナデ	2.2	1.0	0	0	0	276/2 にない黄	276/2 にない黄	276/1 黄灰		
47	-149.209.839	-5.170.998	476.673	黄褐色 シルト	底層Ⅰ類	早期後葉	器形 調整	縦線条痕	外ナデ 内ナデ	2.2	1.0	0	0	0	276/2 にない黄	276/2 にない黄	276/1 黄灰		

個体である。

27～30はⅡ群CⅠ類としたものである。27・28は突起を持つF線部片で、27は端部内面側、28は端部両端に刻みを施し、外面は口縁直下に平行刺突列を施す。いずれも突起の凹部に条痕を施しており、器面内外の地文として横位の条痕を施す。29は胴部片で、外面に左上がりの条痕を施し、平行刺突列を一条施す。内面は横位の条痕で、器面内外に成形時の指頭圧痕が顕著に認められる。30は胴部片で、内外に左上がりの条痕と指頭圧痕が認められる。これらは器面調整や胎土の特徴から同一個体と考えられる。

31はⅡ群D類としたもので、外面に幅0.4cm程の縄文Rを横位に施す。縦線を多く含み、内面の剥離面に抜け痕が顕著に残る。32はⅡ群D類としたもので、内外ともナデで調整されている。胎土はⅡ群CⅠ類に類似しており、同一個体の可能性も考えられる。

D発掘区出土土器 (図119-33～38)

33はⅠ群FⅠ類としたもので、外面に横長で人型の山形文を横位に施し、その直上に横位のナデを行なっている。内面はナデとユビオサエで調整され、指頭圧痕が顕著に認められる。穂谷式に比定される。

34はⅡ群B類としたもので、頸部部に縦い段を持

ち、その段上に左下がりの刻みを施す。頸部には左下がりの条痕を施し、内面はナデとユビオサエで調整する。上部の文様は残存しないが、波状の刺突列を施すものと思われ、ハッ崎Ⅰ式に比定される。

35・36はⅣ群A類としたものである。35は口縁部片で、外面に竹管状工具の管外側を用いて左一右方向へD字状の刺突を施している。内面は横位の条痕を施している。36は同一個体の胴部片と考えられ、外面は右上がり、内面は左上がりに粗い条痕を施している。北白川下層Ⅰa式に比定される。

37はⅣ群B類としたもので、外面に縄文R・L・Rの異なる縄文を横位に施すことで羽状に施文している。内面はナデとユビオサエで調整を行なっている。北白川下層Ⅱ式に比定される。

38はⅤ群G類としたもので、器壁が厚く胎土に砂粒を多く含み、内外はナデで調整される。直立する器壁から外反する器形になると考えられる。中期末から後期前葉に属するものと考えられる。

E発掘区出土土器 (図120-39～46)

39は底部Ⅰ類である。乳頭状の尖底で、内外に成形時の絞込による螺旋状の痕跡が観察される。またネガティブ柵文と考えられる文様が観察され、神宮寺式

に比定される。

40はI群E2類としたもので、外面に粗大な楕円文を施す。内面はナデで平滑に調整されている。高山寺式に比定される。

41～45はII群E類としたものである。胎土に繊維を多く含み、内外に二枚貝によるものと考えられる条痕を施す。46はこれらの底部と考えられ、平底から立ち上がった直後に、一旦くびれてまっすぐのびる器形の底部II類である。円形の粘土板上に逐次粘土を積み重ね成形した過程が断面に認められ、また底面には繊維の抜け痕が顕著に観察される。(熊谷)

ii. 石器 (図121・122、表18・19)

出土石器は試掘調査分を含めて、石鏃30点(破片含む)、石匙1点、掻器1点、削器1点、楔形石器7点、石核10点、加工痕有剥片18点、使用痕有剥片4点、剥片274点、砕片379点、蔽石1点、磨石1点、凹石1点、出土総数728点である。剥片石器類の石材は、チャート11点(楔形石器1、石核3、剥片6、砕片1)を除いて全てサヌカイトである。

石鏃(1～23) 1～6は平基式の石鏃である。全て加工は粗く、周縁加工に近いものもあり、素材面を広く残す。これらに用いられている素材剥片は、両面ともに平坦な剥離面で構成された、薄い剥片であり、両種打法によって剥離された剥片の可能性がある。

7～9は左右非対称というよりは不定形といえる粗い整形の石鏃である。素材の選択や用い方が不適當で、いわば「下手」な作品である。実用的ではなく、未製品というわけでもなさそうであり、何故このようなものが製作されたのか不明である。7は削器の破損

表18 別所辻堂遺跡出土石器内訳表

	A	B	C	D	E	その他	計
石鏃	11	11	2	6			30
石匙	1						1
掻器		1					1
削器		1					1
楔形石器	2	1	2	2			7
石核	3	2	2	1		2	10
加工痕有剥片	11	4	1	1	1		18
使用痕有剥片	2			1	1		4
剥片	127	71	29	27	14	6	274
砕片	145	206	6	4	18	2	379
蔽石	1						1
磨石	1						1
凹石				1			1
計	304	297	42	43	32	10	728

品を転用した可能性がある。

10・11は浅い凹基式である。基部は数回の剥離で意図的にゆるく内彎させている。10は裏面右側縁が未加工であり、未製品の可能性もある。

12～17はある程度意識的に脚部を作り出した凹基式である。形状的にはバラつきがあるが、胴部に比して短い脚部をもつ形態である。

18は浅く内彎する基部をもつが、10・11と異なり正三角形に近い形状をもつものである。素材は比較的厚い剥片が用いられ、先端部、脚部ともに丁寧に加工されている。

19～21は長脚鏃である。本遺跡で最も丁寧な作りで規格的形式である。縄文時代草創期～早期に特徴的に認められる形態である。

22は脚端部が外側に反り返る形態のもので、縄文時代早期に属する可能性がある。

23は柳葉形を呈するもので、尖基とも円基ともいえない寸詰まりな基部となっている。加工状態と形状から鏃ではなく石鏃と判断される。

本遺跡出土の石鏃については、形態のバラエティーがさほど多いとは言えない。脚部が明瞭に作り出されたものはほとんどなく、先端部を鋭く尖らせるものほとんどない。そのなかで長脚鏃は特徴的であり、定期的に異なるものが混在している可能性がある。

石匙(24) 右側が欠損するが、おそらく三角形の横型石匙である。刃部は左半が急角度で、右に行くにつれ刃角が浅くなる。背面とつまみ端部に自然面が残る。

掻器(25) いわゆるラウンドスクレイパーに近い形態で、素材剥片の打点周辺に調整を施し、半円形に刃部を作り出している。刃角は比較的浅い。素材剥片は同一方向に連続して剥離された幅広剥片である。

楔形石器(26～31) 26は唯一青灰色チャートを用いたものである。上下端はツブレが顕著で、左右両側にもツブレが見られる。両種打法の小石核ともとれるが、これにより得られる剥片は石器素材となり得ないと考えられ、楔形石器と判断した。

27～31のサヌカイト製5点の内29を除く4点は素材の主要剥離面を残している。29は上端が傾斜面状に加工されており、石核の可能性もある。27・30・31は片側に、28は両側に剪断面を有す。30・31は両側打

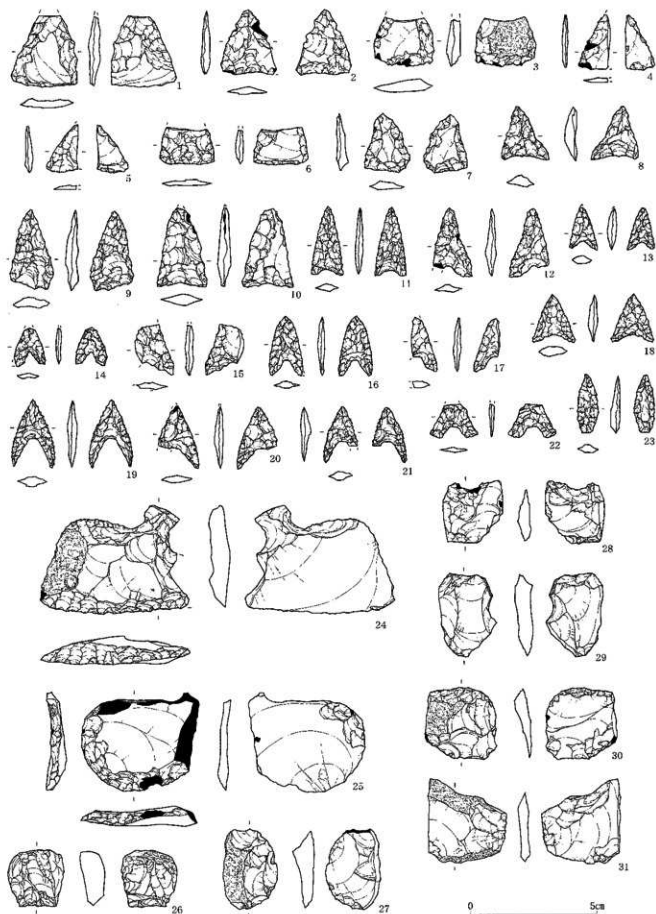


图 121 别所让堂遺跡出土石器① (2/3)

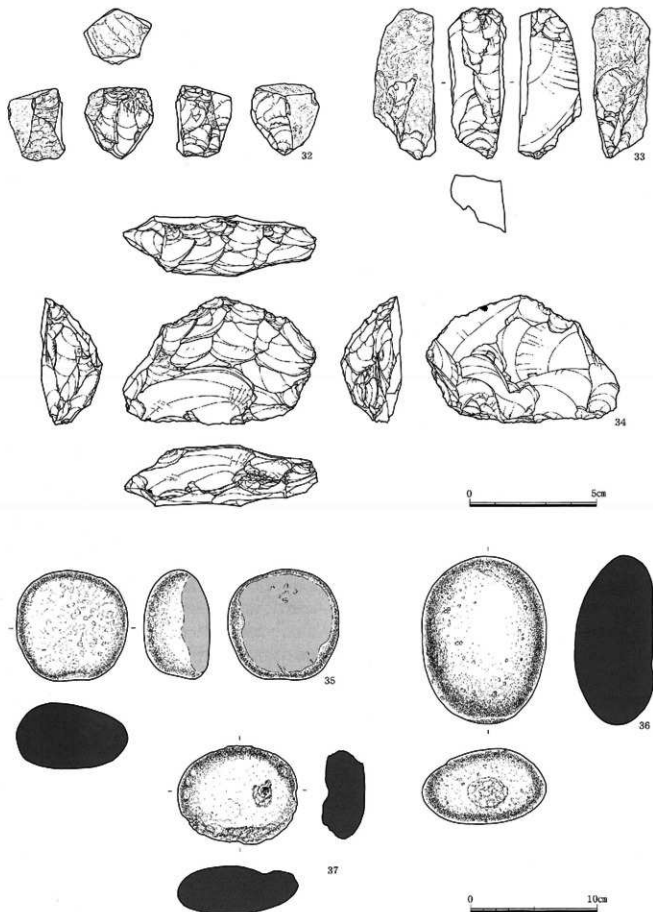


図 122 別所辻堂遺跡出土石器② (32～34 : 2/3、35～37 : 1/3)

表 19 別所辻堂遺跡出土石器観察表

	X(m)	Y(m)	H(m)	遺構 層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石核	備考	
1				D発掘区X21-Y41	普通土下層 灰色砂質土	石核	(2.75)	2.61	0.43	(3.38)	サスカイト	先端部欠損
2				B発掘区X21-Y11	SD5: 灰色砂質土	石核	2.53	2.21	0.36	1.75	サスカイト	
3				A発掘区X35-Y27	SD04: 灰色粘土	石核	(1.85)	2.41	0.58	(3.56)	サスカイト	先端部欠損。破断して全体に剥離面残存
4				B発掘区	石列内層位土: 灰褐色土	石核	(2.15)	(1.16)	0.18	(0.72)	サスカイト	片側欠損
5				A発掘区X29-Y13	中世包含層: 灰褐色土	石核	(1.87)	(1.23)	0.27	(0.54)	サスカイト	片側欠損
6	-149353.244	-5224.718	483.892	縄文時代遺物包含層上層	石核	(1.31)	2.15	0.29	(1.33)	サスカイト	上半部欠損	
7				B発掘区X35-Y11	中世包含層: 灰褐色土	石核	2.32	1.79	0.36	1.49	サスカイト	側面の再加工か
8				D発掘区X39-Y48	SD98: 灰色砂	石核	2.15	1.84	0.40	1.29	サスカイト	素材粗悪
9				D発掘区X41-Y48	SD98: 灰色砂	石核	3.18	(1.73)	0.46	(2.72)	サスカイト	
10				第10発掘区直上剥離面	黄灰色砂礫層土: 油山(黄褐色粘土)	石核	(3.08)	1.98	0.45	2.40	サスカイト	先端部欠損
11				D発掘区X21-Y45	普通土下層: 灰色砂	石核	2.80	1.25	0.28	0.88	サスカイト	
12				D発掘区X33-Y51	中世包含層: 灰色土	石核	(2.65)	(1.58)	0.41	(0.98)	サスカイト	側部欠損
13				C発掘区X34-Y66	SK79: 褐色土	石核	(1.86)	(1.10)	0.32	(0.43)	サスカイト	両端部欠損
14	-149379.639	-5221.054	483.471	縄文時代遺物包含層上層	石核	(1.35)	(1.22)	0.16	(0.34)	サスカイト	先端部・側部欠損	
15				B発掘区X21-Y07	中世包含層: 灰褐色土	石核	(1.95)	(1.50)	(0.27)	(0.62)	サスカイト	先端部・側部欠損
16				B発掘区X27-Y17	中世包含層: 灰褐色土	石核	(2.25)	(1.20)	0.28	(0.72)	サスカイト	両端部欠損
17				第12発掘区南側	中世包含層直上	石核	(2.12)	(0.83)	0.27	(0.51)	サスカイト	片側欠損
18				A発掘区X39-Y23	中世包含層: 灰褐色土	石核	1.85	1.68	0.38	0.78	サスカイト	
19	-149289.168	-5208.326	483.053		黄灰色シルト	石核	2.87	1.89	0.39	0.96	サスカイト	
20	-149284.453	-5222.641	483.577		黄褐色砂礫	石核	(2.46)	1.58	0.30	(0.82)	サスカイト	先端部・側部欠損
21				B発掘区X39-Y12	SD51: 灰色砂質土	石核	(2.15)	(1.25)	0.36	(0.53)	サスカイト	側部欠損
22				D発掘区X21-Y45	SD99: 灰色砂	石核	(1.27)	1.85	0.20	(0.48)	サスカイト	先端部欠損
23				C発掘区X04-Y66	中世包含層: 黄灰色土	石核	2.27	0.72	0.31	0.88	サスカイト	裏面に素材面(主要剥離面)残存
24				第11発掘区中段南側	普通土直下層	石核	4.25	(5.91)	0.72	(25.83)	サスカイト	一側欠損
25				B発掘区X35-Y05	中世包含層: 灰褐色土	石核	3.95	4.60	0.75	15.43	サスカイト	新しい欠損
26	-149303.773	-5280.122	487.288		Na9	褐色石核	2.25	2.22	0.85	6.62	チャート	黄灰色チャート
27	-149379.261	-5221.644	483.635	縄文時代遺物包含層上層	褐色石核	3.07	2.14	0.60	6.16	サスカイト	自然面は水磨しおり、旧剥離面が認められる	
28	-149290.126	-5208.458	483.159		黄灰色シルト	褐色石核	2.43	2.31	0.48	4.28	サスカイト	
29				第11発掘区上段南側	中世包含層	褐色石核	3.33	2.27	0.68	8.66	サスカイト	黄褐色石核
30				D発掘区X19-Y41	普通土下層: 灰色砂	褐色石核	2.77	2.82	0.47	5.88	サスカイト	自然面は水磨している
31				D発掘区X19-Y41	普通土下層: 灰色砂	褐色石核	3.38	3.07	0.40	5.88	サスカイト	
32				C発掘区X30-Y04	SK93: 黄灰色土	石核	2.86	2.70	2.10	20.19	チャート	打面粗悪 黒色チャート
33	-149359.490	-5221.897	483.563	縄文時代遺物包含層上層	石核	5.90	2.44	2.03	39.99	サスカイト	両側打法、分割線素材	
34				第14発掘区中部	堆土直上中世包含層	石核	5.01	7.84	2.37	88.35	サスカイト	両側打法
35	-149301.505	-5225.210	483.492	縄文時代遺物包含層上層	磨石	8.58	8.78	5.16	625.00	灰褐色		
36				南壁 中世包含層	磨石	13.25	6.14	3.85	1013.00	黄褐色		
37				D発掘区X19-Y39	普通土上層: 褐色土	磨石	9.31	7.73	3.71	387.00	花崗岩	

法により得られた剥片を用いている。

石核 (32～34) 32は上 \downarrow 180° および側面に90°の打面転移を行なった黒色チャートの石核。正面の打点部および下端にツブレが認められるが、それぞれの作業面と打面の関係は対応しており、両極打法というわけではない。33は円礫を4分割したような、断面扇形を呈する剥片の1つの平坦面で両極打法を行なっている。34は厚手の剥片を用いて両極打法が行なわれたもので、正面上半が主要な作業面となっている。左端部は剪断面で、それ以外の周縁部はツブレが認められる。裏面左上にはこの石核素材の主要剥離面が残る。

この石核から剥離された剥片の大きさを推定すると、石核の素材とされた可能性が考えられる。

磨石 (35) 片面のみに摩擦痕が認められるが、摩擦の状態はさほど強くなく、礫のあばたが残る。

敲石 (36) 比較的大形のものでも、一端にわずかな敲打痕ととどめる。敲打の傾度はあまり多くないようである。形状的には磨石に適しているように思えるが、摩擦痕は確認できない。

凹石 (37) 楕円礫の長軸上に偏って、一箇所の浅い凹みをもつ。凹みはやや不定形で、径約1.5cm、深さ約0.3cm。(松浦)

(2) 中・近世の遺物

i. 土器 (図123～126)

A・B・D発掘区出土土器の一部について、その概要を報告する。

A発掘区出土土器 (図123) 1～4はSD01、5・10～12はSK01、6・9はSK04、7は炭窯、8・13はSK03から出土した資料である。

1～6は土師器皿で小型品(1～4)と大型品(5・6)がある。口径は1が8.7cm、2が8.2cm、3が8.0cm、4が7.4cm、5が10.8cm、6が10.15cm。

7は小型の瓦器椀で、内面のみにヘラミガキがあり、口縁端部の沈線は認められない。復原口径8.7cm。

8は常滑産の甕で、口径22.8cm。9は瓦質土器搥鉢で、口径30.8cm。10・11は肥前産磁器の染付椀、12は肥前産陶器の椀である。口径は10が11.2cm、11が11.4cm、12が10.7cm。13は瀬戸美濃陶器御皿で、底部外面に糸切り痕が残る。口径16.4cm。

B発掘区出土土器 (図124・125) 15～25が石垣1、26・27・46・47が石垣2覆土、28～45・51が石垣2前面溝の埋土、48・50がSK06、49・14がSK08から出土した資料である。

15～31・33・34は土師器皿で、33が大型品である他はすべて小型品である。へそ皿形態の例が目立つ。口径は15が7.3cm、16が6.6cm、17が6.9cm、18が7.55cm、19が7.6cm、20が6.8cm、21が8.15cm、22が6.85cm、23が8.4cm、24が8.2cm、25が8.05cm、26が7.75cm、27が7.15cm、28が8.15cm、29が7.2cm、30が8.25cm、31が6.35cm、33が10.45cm、34が9.2cm。32は瓦器椀の終末型で、内外面のヘラミガキが認められない。口径9.5cm、器高3.3cmに復原できる。

35・36は瓦質土器火鉢で、方形隅の脚部が貼り付く箇所の破片である。37は増埒で、内面に厚くカラミが付着する。被熱によって器壁内面は赤変し、外表面は剥落が激しい。口径は18cm前後に復原できる。

38・39は瓦質土器搥鉢である。38は復原口径32.8cmで、内面をハケメ調整する。40は瓦質土器鉢で、内面を粗くヘラミガキする。復原口径29.5cm。41・42は信楽陶器搥鉢である。復原口径は41が26.5cm、42が25.4cm。43は常滑産の甕で、復原口径22.7cm。

44～51は土師器羽釜で、大和B1型(44・48・51)と大和H1型(45)・H2型(47・49・50)・H3型

(46)がある。口径は44が15.65cm、45が15.4cm、46が19.3cm、47が19.75cm、48が28cm、49が18.2cm、50が16.0cm、51が16.8cm。14は常滑産の大甕で、全体の約1/2が残存する。肩部外面に巴文の押印がめぐる。径42.0cm、器高61.9cm。

D発掘区出土土器 (図126) 75・81・82・87・94以外が流路1埋土、75がSD05、81がSX02、82・87・94がSD04から出土した資料である。

52～67は土師器皿で、小型品(52～63)と大型品(64～67)がある。口径は52が9.6cm、53が9.55cm、54が8.8cm、55が9.0cm、56が8.85cm、57が8.65cm、58が8.75cm、59が9.1cm、60が8.9cm、61が8.4cm、62が9.0cm、63が9.6cm、64が12.0cm、65が12.5cm、66が11.8cm、67が14.3cm。

68～70は瓦器皿で、底部内面に平行線状の暗文がある。68は暗文が密で器壁が厚いものに対して、70は暗文が疎で器壁が薄い。口径は68が8.25cm、69が8.4cm、70が8.55cm。

71～87は瓦器椀で、小型品(71・72)が少量認められる。71・72は内面のみにヘラミガキがある。これらの口縁端部内外面や高台端部に著しい磨耗痕が認められ、真言密教の仏前作法に用いられた六器椀である可能性が考えられる。75の底部外面には「大」の墨書がある。77は成形後に口縁部を片口状に変形させている。口径は71が7.4cm、72が7.7cm、73が8.1cm、74が8.9cm、76が13.2cm、77が12.2cm、78が13.2cm、79が13.2cm、80が12.2cm、81は14.7cm、82が12.9cm、83が14.5cm、84が12.85cm、85が14.2cm、86が12.6cm、87が14.0cm。

88は東播系須恵器甕で、焼成が悪く軟質である。外面に平行タタキ目が残る。口径20.5cm。

89～96は土師器羽釜で、大和B1型(89・90・92・94)と大和H1型(91・93・95・96)がある。口径は89が25.45cm、90が26.9cm、91が20.2cm、92が28.95cm、93が21.0cm、94が26.6cm、95が19.1cm、96が30.0cm。

以上の土器は庭園風石組の周辺から主に出土しており、その存続期間を推測させる。瓦器椀には近江編年I-5～II-3期までの資料があることから、12世紀中葉～14世紀中葉頃に庭園風石組が機能したと考えられる。(鎌方)

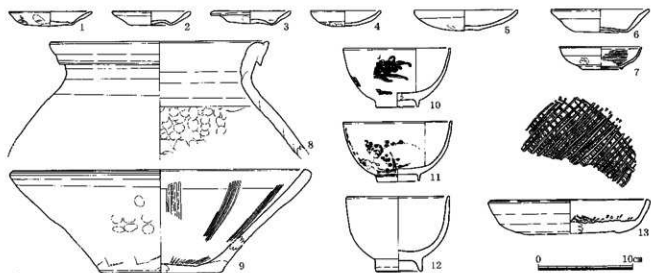


图 123 A 発掘区出土中・近世土器 (1/4)

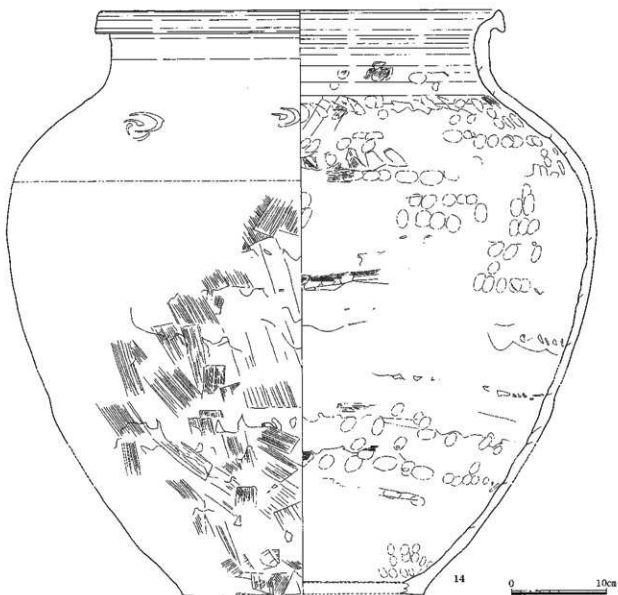


图 124 B 発掘区SK 05 出土中世土器 (1/4)

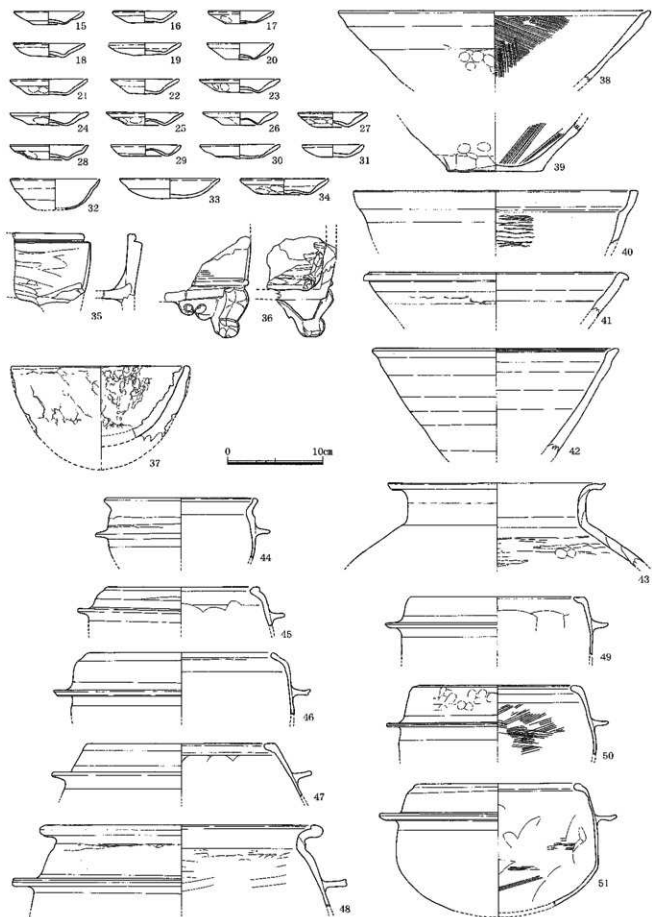


図125 B 免剝区川土中世土器 (1/4)

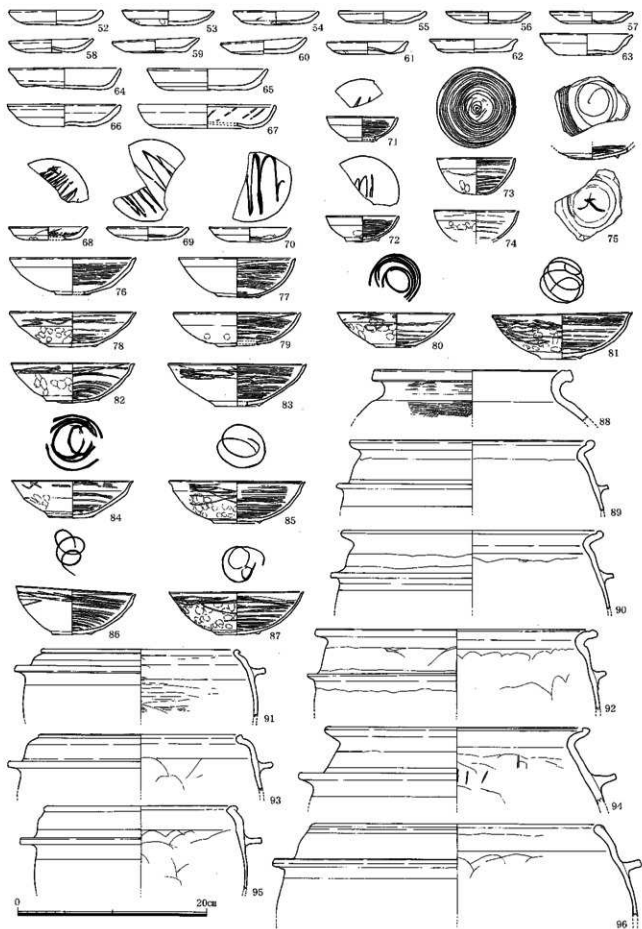


图 126 D 発掘区出土中世土器 (1/4)

ii. その他の遺物 (図127)

漆碗 (1~3) 1はロクロ挽きで内外面黒漆塗り。残存高2.3cm、高台径8.6cm。樹種はケヤキ。2はロクロ挽きで内外面黒漆塗り。残存高1.9cm、高台径8.4cm。樹種はトネリコ属。3はロクロ挽きで内外面黒漆塗り。高台内部は漆を塗らない。残存高2.3cm、高台径8.6cm。樹種はクリ。全てB発掘区出土。

銭貨 (4・5) 4は銭文が不鮮明であるが開元通寶と思われる。「元」の撥ねが特徴的である。外縁外径2.237cm、内郭内径0.671cm、外縁厚0.149cm、重量1.89g。5は北宋銭の天聖元寶(初铸1023年)。外縁外径2.454cm、内郭内径0.71cm、外縁厚0.129cm、重量2.36g。ともにD発掘区出土。

切子玉 (6) 面取りが不均等で、扁平な六角柱を呈す。中央の稜は面取りごとに形成されているため、稜線が直線的でなく、全体的な上下のバランスが悪い。紐通し穴は片側穿孔。高さ2.1cm、最大幅1.5cm、重量4.92g。水晶製。C発掘区出土。

砥石 (7~14) 7は頁岩製の細身の砥石。両側面は擦り切りの痕跡が残る。残存長5.4cm、幅2.9cm、最

大厚0.9cm、重量18.18g。8はホルンフェルス製の仕上げ砥。両側面および端部は擦り切りであり、左側面は砥面として使用されたようである。残存長6.5cm、幅3.5cm、残存厚1.4cm、重量38.34g。9は頁岩製で隅丸形状に成形された砥石。下端は擦り切り面が残る。正面の一部にのみ砥面が残る。縦5.6cm、横4.5cm、残存厚1.9cm、重量47.92g。10は粘板岩製。残存長5.5cm、残存幅5.0cm、残存厚1.3cm、重量67.03g。11は銀色で絹光沢のある千枚岩製。両側と下端の中央部に紐ずれのような痕跡がある。残存長10.2cm、幅6.5cm、最大厚1.7cm、重量170.91g。12は砂質ホルンフェルス製で、石皿の可能性がある。破損後に被熱し煤が付着した後、再度破損している。残存高5.5cm、重量286.51g。13は砂質ホルンフェルス製の粗砥。右側面も使用した可能性がある。長さ17.5cm、幅7.9cm、残存厚2.9cm、重量556.0g。14は頁岩製で正面のみ砥面が残る。破損後に煤が付着している。残存長12.8cm、残存幅2.5cm、残存厚2.4cm、重量70.26g。7・10・11・13・14がB発掘区、8・9がC発掘区、12がD発掘区出土。(松浦)

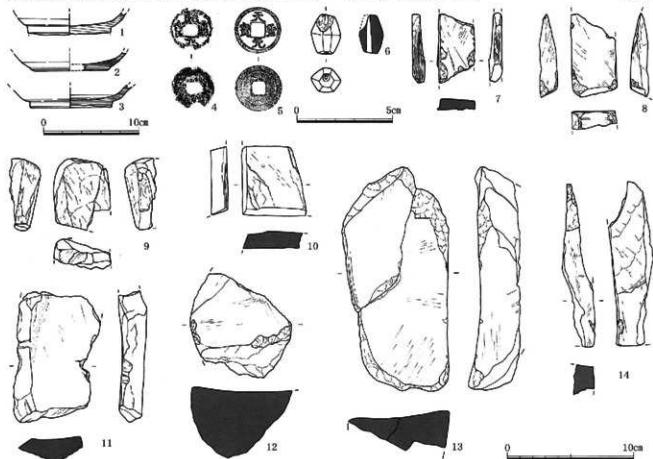


図127 漆器 (1/4)、銭貨・玉 (1/2)、砥石 (1/3)

第2節 別所大谷口遺跡

I. 試掘調査の方法と概要

調査地は、平成13年度の遺跡有無確認踏査で確認した遺物散布地内に相当する。別所町の集落がある谷間の入り口に広がる南北方向の谷筋にあたり、西から張り出す微高地の先端部分とその東側を流れる打滝川に沿って造成された水田である。微高地の西側には南から尾根1・尾根2・尾根3と仮称する3つの尾根が延びてきており、その奥には大きく崩れた跡がみられるという。この村近一帯で過去に山崩れが起こり、全域が土砂で埋まったらしいという伝承も残っている。

平成18年度に別所町199地の当該地で整備工事が行なわれる計画となり、平成18年5月22日から6月28日にかけて試掘調査を実施した。削平が及ぶ地点を中心に9箇所を発掘区（図128）を設定して試掘調査したところ、第3・4・7発掘区で石器や縄文土器が出土する包含層を確認した。また、第6発掘区で平安時代（11世紀）の掘立柱建物の一部とみられる柱穴を検出した。そこで、第4・7発掘区を拡張して縄文時代遺物包含層を調査すると共に、第6発掘区で検出した柱穴周辺部を拡張して掘立柱建物の規模を確認した。

各発掘区の平面図は1/100、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国十座標を記入して調査地での位置関係を記録した。

なお、発掘区番号及び地形名称は、図128に示した通りである。遺構番号は本調査区のそれに従う。

1. 各発掘区の概要

第1発掘区（157㎡）尾根1の東側に設けた発掘区である。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に灰色土、灰褐色土もしくは褐色土、暗褐色もしくは灰褐色の腐植土が堆積して灰色砂礫もしくは青灰色シルトの地山となる。

発掘区全体にわたって腐植土層が堆積しており、ここが谷底内に相当することを示している。腐植土層内には14世紀前半頃の遺物が少量包含されている。地山の高さは西南から東北方向へ向かって低くなり、その標高は西南端で461.85m、東北端で460.5mである。

発掘区中央で南北方向の流路の一部を検出した。流路の規模は幅4.8m、深さ0.5m前後である。流路埋土

からは中世以前の上師器片1点が出土しただけであり、詳細な時期は不明である。

第2発掘区（68㎡）第1発掘区の北東に設けた発掘区で、調査地のほぼ中央付近に位置する。

発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に暗灰色土、灰白色砂、暗褐色腐植土が堆積して灰色砂礫もしくは青灰色シルトの地山となる。発掘区全体にわたって腐植土層が堆積しており、ここが谷底内に相当することを示している。腐植土層内には14世紀前半頃の遺物が包含されている。地山の高さはほぼ平坦で、その標高はおよそ459.3～459.4mである。

発掘区北半部には灰色砂で埋まる幾つかの不整形な窪みがあり、13世紀末～14世紀前半頃の遺物が出土した。また、発掘区中央南寄りで南北方向の流路の一部を検出した。流路の規模は幅1.4m、深さ0.3m前後である。埋土からは切断面のある木屑が多く出土したが、時期を推定できる遺物はなかった。

第3発掘区（124㎡）尾根1と尾根2の間に挟まれるようにして微高地1があり、その西側に設けた発掘区である。

発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に灰白色砂、灰色土（旧耕土）、黄色シルト・砂と灰色土の混合土、暗灰色土、暗灰色シルトブロック・黄色シルトブロック混合土、黄色シルト、淡黄灰色砂質シルト、黒灰色シルト混じり灰白色砂・シルトが堆積して淡黄灰色粗砂あるいは淡灰色シルトの地山となる。

また、発掘区内北側に流路1があり、暗灰色土以下に黄灰色砂混じり暗灰色シルト、灰白色砂と暗灰色シルトの互層、灰色シルトブロック混じり黄褐色砂が堆積する。流路1は尾根1と尾根2の間に小さな谷部を形成している。

微高地1は東へ向かって緩やかに下がる地形であり、その上面に黄色シルト以下の縄文時代遺物包含層が堆積するのを確認した。黄色シルト上面の南側に多くの遺物が分布する傾向が認められた。ただし、淡黄灰色砂質シルト、黒灰色シルト混じり灰白色砂・シルト中からは少量の剥片類の石器が出土したに過ぎず、遺物の包含量は少ない。地山の標高は南側で464.5m、北側で463.8m、縄文時代遺物包含層の検出面はおおよそ464.6～464.7mである。

暗灰色土には14世紀前半頃の遺物が包含されてお

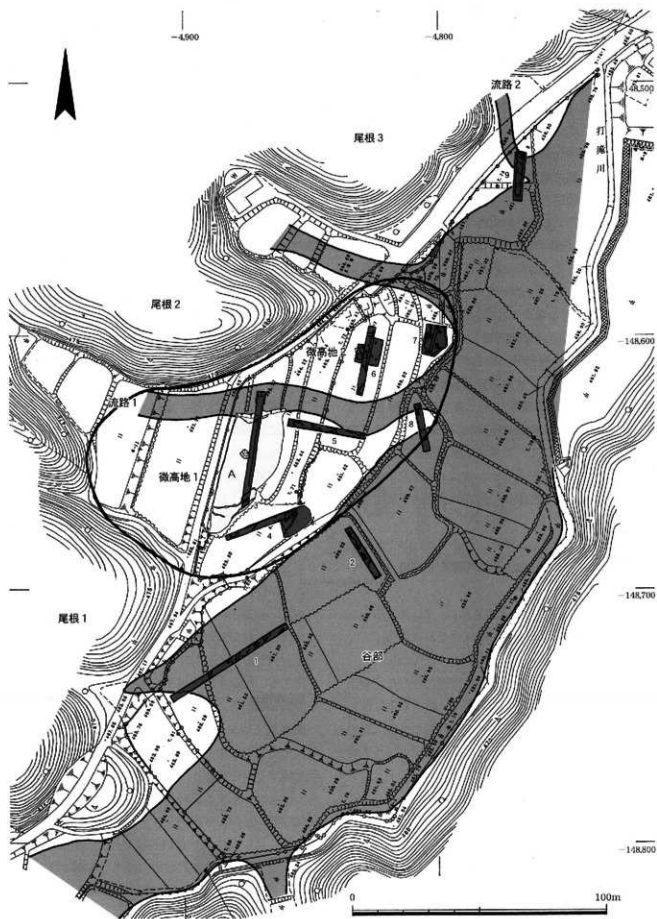


図 128 別所大谷口遺跡発掘区位置図 (1/1,500)

り、流路1埋土(灰白色砂と暗灰色シルトの互層)からは平安時代の遺物が少量出土した。また、縄文時代遺物包含層である黄色シルトからは、縄文時代早期前葉の神宮寺式や早期後葉の粕畑式等の土器6点と、剥片類の石器が32点出土している。

なお、発掘区南端は水田造成による地下げで削られているが、その底で幅2.5m、深さ0.3~0.4mの溝を検出した。現在の水田地割りに沿っているようにみえ、本来は用水路として掘削された溝であったかと思われる。埋土からは14世紀頃の遺物が出土している。

第4発掘区(135m) 第3発掘区の南側に設けた発掘区で、微高地1の南端部に相当する。過去に大きな地下げを行なって拡張された水田内に位置する。

西半部では耕土の下が直ちに地山であり、大きな擾乱を受けている箇所も認められた。これは西半部が地下げによって削られ、旧地形すら残っていないことを示している。

一方、東半部は盛土造成されていたため、旧耕土以下の堆積層がよく遺存していた。その基本的な層序は、旧耕土の下に淡灰色土、黄色シルトブロック混じり暗灰色土、黄色シルトが堆積して黄褐色砂礫・シルトの地山となる。地山の標高は削平された西側で463.4m、東側で462.6m前後であり、本来は西から東へと緩やかに下がる傾斜地であったことが分かる。

黄色シルトが縄文時代遺物包含層であることが判明したため、削平が及ぶ発掘区東端部を拡張して調査を行なった。しかし、縄文時代遺物包含層からは削器1点と剥片類8点の石器が出土したに過ぎず、遺物包含

量はわずかであった。

黄色シルト上面では、古墳時代の土坑1基(図129)を検出した。土坑は東西1.1m、南北0.65mの長楕円形を呈し、深さ0.35mである。東端で底より0.3m上の位置から逆さまになった土師器小壺1点が出土している。

また、拡張区東端で不整形な焼土坑1基を確認した。東西1.4m、南北7.5m、深さ0.1mで、西半部に炭の堆積と焼土が認められた。埋土から土師器小片1点が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

なお、黄色シルトの上に堆積する暗灰色土からは14世紀頃の遺物が少量出土した。

第5発掘区(84m) 第3発掘区の東側に設けた発掘区である。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に黄白色砂、灰色土(旧耕土)、灰褐色土、暗灰色土、黄色シルトが堆積して淡青灰色砂礫・シルトの地山となる。地山の標高は西端で463.56m、東端で460.7mであり、西から東へ下がる傾斜地となっている。発掘区東北部で北へと下っていく落ち込みの肩を検出したが、これはおそらく第3発掘区北側から続く流路1の南肩であろう。

黄色シルトは第3発掘区で確認した縄文時代遺物包含層と一連の層位とみられるが、水田造成によって大部分が削平されており、局部的に遺存するに過ぎない。しかも、遺物が出土したのは、発掘区東北部の流路1南肩周辺域に限られる。出土遺物は、山形押型文土器片1点と剥片類の石器7点があるのみである。

また、発掘区北側で不整形な幾つかの土坑を検出した。埋土は灰色粗砂で、14世紀前葉頃の遺物が若干出土している。

第6発掘区(142m) 尾根2の東側に設けた発掘区である。当初、流路1の北肩を確認する目的で調査したが、発掘区南端でも検出されず、流路1は第5発掘区と第6発掘区の間位置するものと考えられる。そして、尾根2の先端部東側に微高地2が広がることが判明した。

発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に黄白色砂、灰色土(旧耕土)、暗灰色土、暗黄灰色粘質シルト、黄色粘質シルトが堆積して淡青灰色礫混シルトの地山となる。地山の標高は北端で461.4m、南端で461.0mである。北端が高くなるものの概ね461.0m前後で平

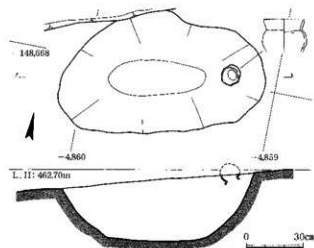


図129 第4発掘区 古墳時代土坑(1/20)

坦面を形成している。黄色粘質シルトは第7発掘区の縄文時代遺物包含層と一連の層位である可能性が高いが、第6発掘区内では遺物が出土しなかった。

暗灰色土、暗黄灰色粘質シルトは平安時代遺物包含層である。暗灰色土から11世紀後半の土師器皿・黒色土器・瓦器、さらに開元通寶・皇宋通寶の2枚が重なった状態で出土した。また、暗黄灰色粘質シルトから10世紀中葉頃の土師器杯・黒色土器椀などが出土している。

暗黄灰色粘質シルト上面で掘立柱建物の一部とみられる柱穴を検出したため、その周辺部を東西に拡張して建物規模の確認調査を行なった。その結果、掘立柱建物は北で西へ少し振れる東西棟総柱建物であることが判明した。南北2間(4.6m)・東西3間以上の規模

で、柱間は梁間2.3m等間・桁行1.8-2.1-1.8mに復元できるが、柱穴の配列は少し歪んでいる。柱穴埋土が暗灰色土と同質であり、暗灰色土層内から柱穴が掘り込まれたと判断すれば、11世紀後半の建物跡と推定できる。なお、盛土保存される箇所位置するため、平面規模を確認するにとどめて、柱穴の掘削は行なわなかった。

第7発掘区(98m) 第6発掘区の東側に設けた発掘区で、微高地2の東側先端部付近に相当する。

発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に黄白色砂、灰色土(旧耕土)、黄色シルトブロック混暗灰色土、暗黄灰色シルト、黄色シルトが堆積して明灰褐色~暗灰色砂質シルトの地山となる。地山の標高は459.1~459.3mで概ね平坦である。

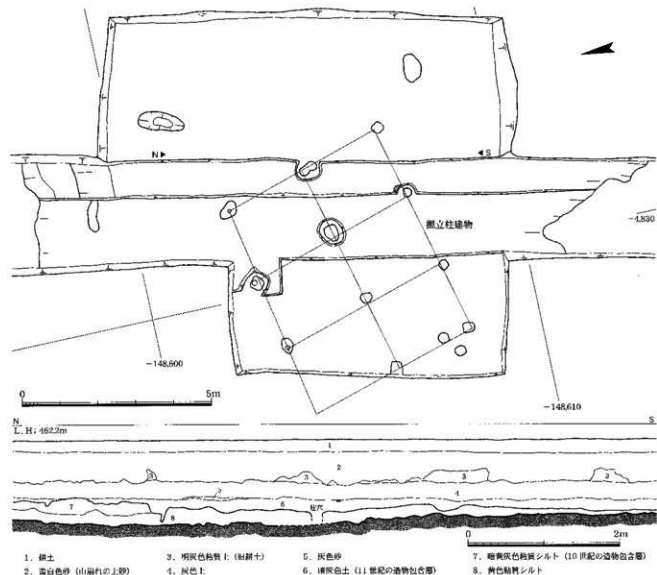


図130 第6発掘区 平安時代後期の掘立柱建物と周辺の堆積土層序

黄色シルトが縄文時代遺物包含層と判明したため、周囲に拡張してその調査を行なった。しかし、水田造成によって黄色シルトの上位が削平されており、0.05～0.1mほどの厚さしか遺存していなかった。出土遺物は石器のみであるが、石鏃2点、削器1点、楔形石器1点、石核1点、その他に剥片類が47点出土している。

また、黄色シルトブロック混暗灰色土からは13世紀末～14世紀前半頃の遺物が出土した。

第8発掘区 (56m) 第7発掘区の南側に設けた発掘区である。

発掘区北半では耕土の下に造成土が堆積するだけで、直ちに黄褐色砂礫の地山が現れる。地山の標高は最も高いところで459.1mである。この地山の高まりは微高地1の東端に相当すると判断されるが、その上面は削平を受けており遺物包含層すら遺存しない。

発掘区北端には流路1の一部が認められ、造成土の下に暗灰色腐植質シルト、暗褐色腐植土、淡黄灰色砂が堆積する。深さ0.45mで、底の標高は458.54mである。

発掘区南半は南へと下っており、谷部の一部に相当する。造成土の下に淡灰色砂礫、灰色砂、暗灰色細砂・シルトが堆積する。底の標高は458.54m前後で概ね平坦となっている。

第9発掘区 (77m) 尾根3の東側に設けた発掘区である。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に造成土、暗灰色土(旧耕土)、暗黄灰色造成土、暗灰褐色泥質シルトが堆積して明黄灰色礫混シルトの地山となる。発掘区中央で地山が高まり、その最も高いところで標高456.24mである。この高まりは尾根3の東裾に相当すると考えられる。発掘区南側は谷部へと向かって地山が下っており、暗灰褐色泥質シルトの下に褐色腐植土、淡褐色細砂・シルトが堆積する。その南端で地山の標高は455.6mである。

一方、発掘区北側では流路2を検出した。幅6m、深さ0.9mで、底の標高は455.3mである。暗灰褐色泥質シルトの下に暗褐色腐植土・淡褐色細砂の互層、淡褐色細砂・粗砂の互層が堆積し、底から10世紀頃の黒色土器片が出土している。また、この北層に接して灰色粗砂で埋まる不整形な土坑があり、12世紀前半頃の瓦器碗が出土した。

2. 試掘調査の成果

試掘調査の結果、縄文時代、古墳時代、平安時代後期の遺物包含層や遺構がここに存在することが判明した。そこで、今回新たに確認した遺跡を、調査地の字名から別所大谷口遺跡と命名した。

確認できた遺物包含層や遺構の分布は、時代ごとに異なっている。この点について、以下にまとめておく。

縄文時代 微高地1・2ともに黄色シルトの縄文時代遺物包含層が堆積している。しかし、縄文土器が出土するのは微高地1だけであり、石器の出土量も微高地1が最も多い。よって、縄文時代の遺跡が主に形成されたのは微高地1であったと推測でき、その時期は早期前葉から後葉であると考えられる。

古墳時代 微高地1で古墳時代の土坑1基を確認した。ただし、周辺に古墳時代の遺物包含層が形成されているわけでもなく、単発的な土地利用が行なわれたに過ぎないと思われる。周辺の遺跡でも局所的に古墳時代の遺物が出土する傾向が認められるので、それに類する性格を有するものであろうか。

平安時代後期 10～11世紀頃の土器は微高地1・2および流路1・2からの出土に限られる。特に10～11世紀の遺物包含層として確認できるのは微高地2のみであり、そこには11世紀後半の掘立柱建物が存在したことが判明した。微高地2にはさらに幾つかの掘立柱建物などの遺構が残っている可能性が高く、平安時代後期の遺跡が形成されていたと推定できる。この時期には水園柏の荘園化が進行することが知られており、その南側に近接する本調査地もその影響を受けて開発され始めた可能性があろう。

また、13世紀末～14世紀前半頃の遺物が調査地全域から出土する。この傾向は別所辻堂遺跡でも見られ、その頃になって本調査地周辺の開発が大きく進展したことを示す資料と考えられる。

なお、調査地内で広域的に黄白色ないし灰白色砂の堆積が認められた。特に微高地1・2上において旧耕土を覆うように堆積する状態を観察できる。非常に均質な山砂であり、人為的な造成土とは思えない。この付近一帯が過去に山崩れで埋まったという伝承に対応する層位と考えて間違いないだろう。山崩れの時期を特定する手掛かりを欠くが、伝承を聞く限りそれほど遠い昔ではないようである。

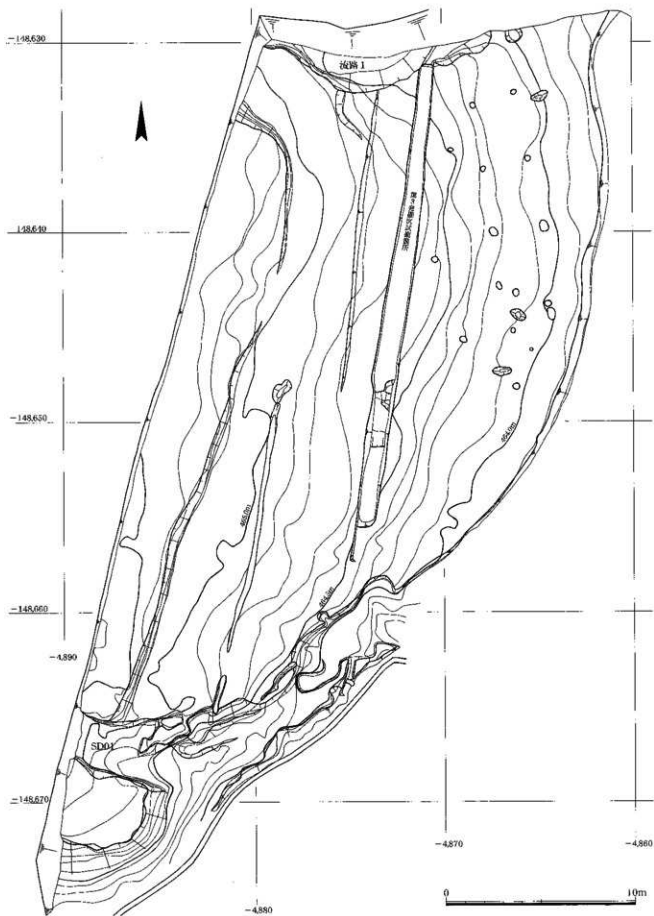


図131 A発掘区 中世遺構面平面図 (1/200)



图 132 A 発掘区 縄文時代遺構面平面図 (1/200)

II. 別所大谷口遺跡の調査成果

試掘調査第3発掘区の周辺は、整備工事で大きく削平される箇所に該当しており、改めて発掘調査を実施する必要が生じた。そこで、奈良県教育委員会・奈良県北部農林振興事務所と協議の上、当該地の微高地1上を中心にA発掘区を設けて本調査を行なった。

発掘区の位置は図128に示した通りである。

1. 調査の方法

耕土及び表上を重機で除去した後に、調査地全体を基準点測量して、旧国土座標線に沿った2m方眼のグリッドを設定した。地区名は南東隅の座標値下2ケタで表している。

遺構検出は、中世遺構面と縄文時代遺構面で行っている。中世遺構面で写真撮影・平板測量を行ない、一度この面を記録した。発掘区の平面略測図を1/100で作成し、遺構の位置関係などの情報をそれに整理しながら調査を進めた。そして、個別の遺構図は1/10あるいは1/20、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国土座標を記入して相対的な位置関係を復元した。発掘区全体の平面図は、ヘリコプターによる航空写真撮影を縄文時代遺構面で行なって縮尺1/50で図化した。

縄文時代遺物包含層については面的に掘り下げた後、最終的に縄文土器・石器の分布が集中する地点を2箇所で認めたため、その部分に補足調査区を設けて確認調査を行なっている。

なお、中世遺物包含層の遺物はグリッドごとに回収したが、縄文時代遺物包含層の遺物は、トータルステーションで出土位置の3次元データを記録しながら

取り上げた。

2. 調査の概要

(1) A発掘区

尾根1と尾根2に挟まれた小さな扇状地形を呈する微高地は、その中央を東西に流れる流路1によって微高地1と微高地2に分かれる。A発掘区は微高地1の中央に位置する。現状は、高低差が約0.75mある東西2枚の水田である。

発掘区内の基本的な層序は、水田耕土の下に淡黄灰白色砂、灰色粘土(旧耕土)、暗灰色土(中世遺物包含層)、黄色シルト(縄文時代遺物包含層上層)、淡黄灰色シルト(縄文時代遺物包含層下層)、暗灰色シルト・礫混じり淡黄灰色シルト、淡灰色砂礫と続いて淡青灰色砂質シルトの基盤層となる。

淡黄灰白色砂は、非常に均質な山砂であり、遺跡全体を覆うように広く堆積する状態を観察できる。遺跡付近の一角が過去に山崩れで埋まったという伝承があり、詳細な時期は不明ながら、おそらくその伝承に対応する層位と推測できる。灰色粘土は山崩れによって埋没した旧耕土で、所々で軟状の凹凸がみられる。暗灰色土には14世紀頃の土器が包含されているが、高さが低くなる東側ではこの層の下に更に黒灰色土が堆積して10～11世紀頃の遺物を包含する。

黄色シルト・淡黄灰色シルトは縄文時代遺物包含層で、上層から早期中葉～後葉の「山芦屋期」や条痕文土器、下層からは早期前葉の神宮寺式土器が出土した。特に下層の遺物は、暗灰色シルト・礫混じり淡黄灰色シルトとの層境を上下して出土しており、ここが縄文時代早期頃の地表面付近と考えられた。なお、暗

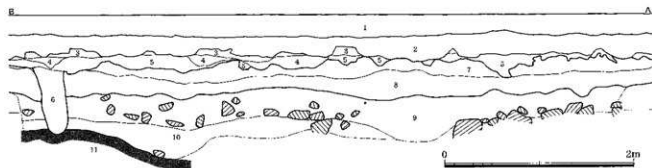
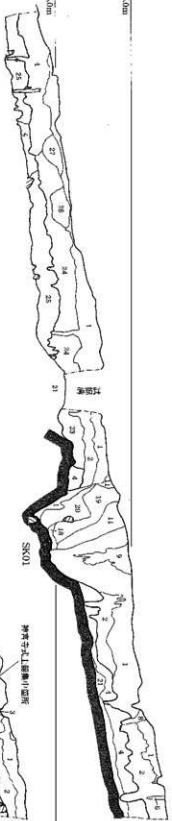


図133 西壁堆積土層図(1/40)

D
L. H: 60.00m



E
L. H: 60.00m



F
L. H: 60.00m



G
L. H: 60.00m



図 134 縄文時代遺物の分布地形土図

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 縄文土 2. 縄文土 3. 縄文土 4. 縄文土 5. 縄文土 6. 縄文土 7. 縄文土 8. 縄文土 9. 縄文土 10. 縄文土 11. 縄文土 12. 縄文土 13. 縄文土 14. 縄文土 15. 縄文土 | <ul style="list-style-type: none"> 16. 縄文土 17. 縄文土 18. 縄文土 19. 縄文土 20. 縄文土 21. 縄文土 22. 縄文土 23. 縄文土 24. 縄文土 25. 縄文土 |
|--|--|



灰色シルト・礫混じり淡黄灰色シルト、淡灰色砂礫にも極めて少量の遺物が包含されていたが、石器のみで土器は出土していない。基盤層の硬く締まった淡黄灰色砂質シルトは一部で確認したにとどまるが、その平面的な広がりなどから暗灰色シルト・礫混じり淡黄灰色シルト、淡灰色砂礫は旧流路内の堆積層であったと推測できる。

以上のような層序から、暗灰色土を除去した黄色シルトの上面（中世遺構面）と縄文時代遺物包含層を除去した暗灰色シルト・礫混じり淡黄灰色シルトの上面（縄文時代遺構面）で遺構検出を行ない、平面図を作成した。その後、さらに遺構面の断ち割り調査を実施し、遺構面を形成する層位の観察と基盤層の確認を行った。

i. 中世の遺構（図131）

中世遺構面は西から東へ下る傾斜面で、発掘区内東西での高低差は約1.8mである。北端には東内方向へと延びる流路1の一部が認められた。南端で溝SD01、東半部で幾つかの小土坑を検出した。

SD01は長さ18.5m以上、幅2.5～3.8m、深さ0.6mの東西溝で、南東側が水山造成時の削平によって壊されている。礫混じり灰色粗砂で埋まっており、西から東へと水が流れていた痕跡が残る。埋土から14～17世紀頃の遺物が少量出土した。

小土坑の中には並んでみえるものがあり、上層観察などを行ない検討したが、柱穴はなかった。トンネル状に斜めに掘削されているものもあり、ほとんどが小動物の掘削穴かと思われる。

ii. 縄文時代の遺構

縄文時代遺構面は、中世遺構面と同様に西から東へ下る傾斜面で、発掘区内東西での高低差は約1.4mである。上層の黄色シルトを掘削した時点で下層の上面から上坑SK01を検出し、下層の淡黄灰色シルトを掘削した時点で幾つかの不整形土坑を検出した。

SK01は南北3.6m、東西3.0m、深さ0.8mで、断面形が楕円状を呈する。土層断面の観察から、西側の黄色シルト・SK01→東側の黄色シルトという重複関係が判明した。明確に把握することはできないものの、上層の堆積に大きな時間幅が想定できるのは間違いなからう。また、下層で検出した幾つかの不整形土坑は、その形状から風倒木痕と思われる。

遺物包含層から出土した遺物の平面分布をみると、大きく南北2箇所分布がことが分かれる判明した。また、遺物が遺構面の上下に分散する可能性を考慮し、遺物が分布する範囲に補足調査北・南区を設けて断ち割り調査を行なった。

その結果、補足調査北区で縄文時代遺構面直下に礫が密集して堆積する箇所があり、礫の隙間に落ち込んだ状態で神宮寺式土器片が多く出土する地点を確認した。また、補足調査南区では南東方向へ広がる深さ0.3mの小さな谷地形を検出し、その埋土中に早期後葉の条痕文土器片が石器と共に包含されているのを確認した。いずれも周囲より若干窪んだ微地形となっており、そこに遺物が2次堆積したものと推測できる。

また、補足調査北区から東へ延長した断ち割り調査区内で早期木の石山式土器が出土したため、その南側に補足調査東区を設定した。しかし、ここからはほとんど遺物が出土せず、石山式土器は局地的に少量散在したに過ぎないと判断した。東区の調査によって、試掘調査第3発掘区より東側では、遺物包含層下層と遺構面の間に淡黄灰色～淡褐色砂が堆積し、遺構面は0.2mほどさらに下位となることが判明した。ただし、遺構面の標高は464.0m前後であり、整備工事の計画高464.26mよりも低い位置にあるため、これ以上の調査は行なわなかった。

iii. 縄文時代の遺物分布

試掘および本調査で縄文土器226点、石器1,084点の縄文時代遺物が出土しており、これらを縄文時代遺構面の地形図に投影した（図135・136）。なお、剥片石器の石材にはサヌカイト以外にチャートとガラス質安山岩があるが、後者は中世の流路理上から出土しているため図示していない。その他、時期不明の七器も煩雑となるため分布図から除外した。土器分類の詳細は別所下ノ前遺跡の項（p.51～57）を参照されたい。

平面分布の全体的な傾向を見ると、土器・石器ともに発掘区の北西部と南西部の2ヶ所に集中する傾向がある。これらはともに浅い谷状地形の傾斜変換点であり、両者が同じ成因によって分布していることを窺わせる。ただし分布する土器の時期が異なることから、その内容には違いがあるといえよう。これら遺物の集中する2箇所において補足調査北・南区を設け、下層の調査を行った。

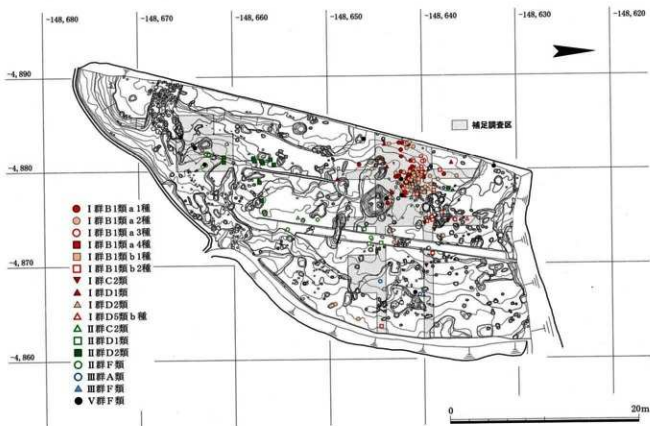


图 135 A発掘区出土縄文土器平面分布 (1/400)

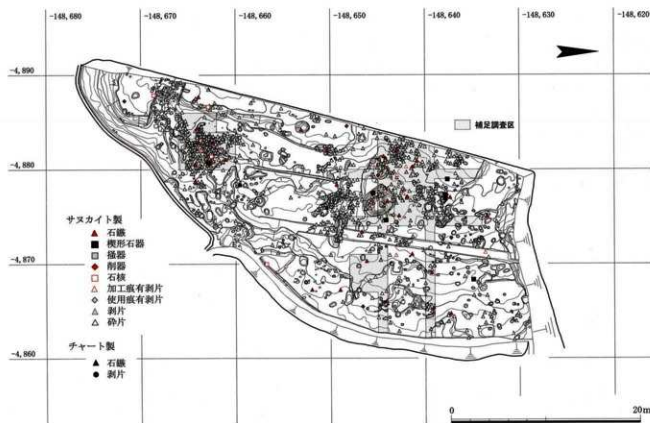


图 136 A発掘区出土石器平面分布 (1/400)

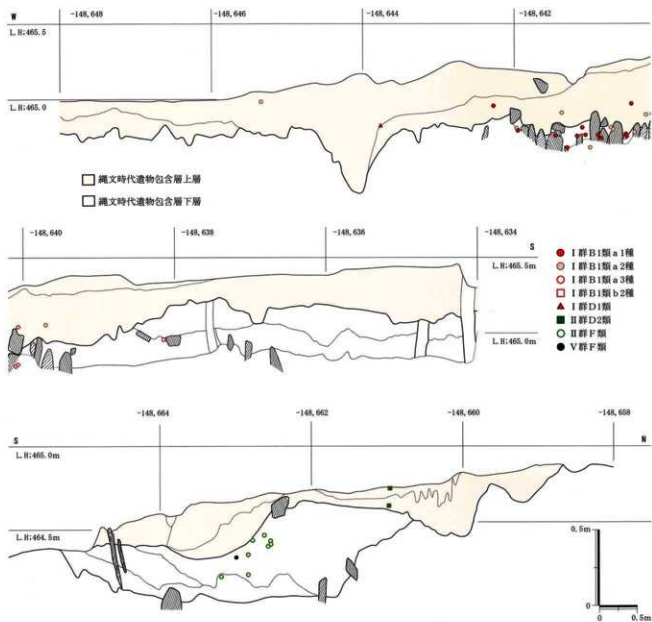


図 137 Y = -4,879.5 ~ 4,880.5 m間縄文土器垂直分布図 (Y = -4,880 mライン土層図に投影)

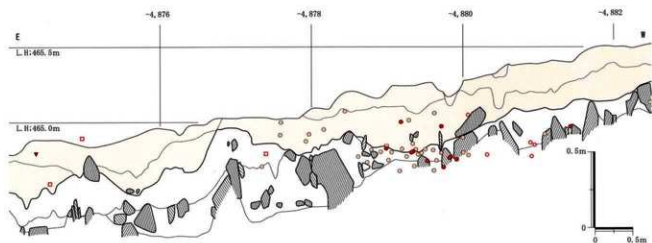


図 138 X = -148,639 ~ -148,641 m間縄文土器垂直分布図 (-148,640 mライン土層図に投影)

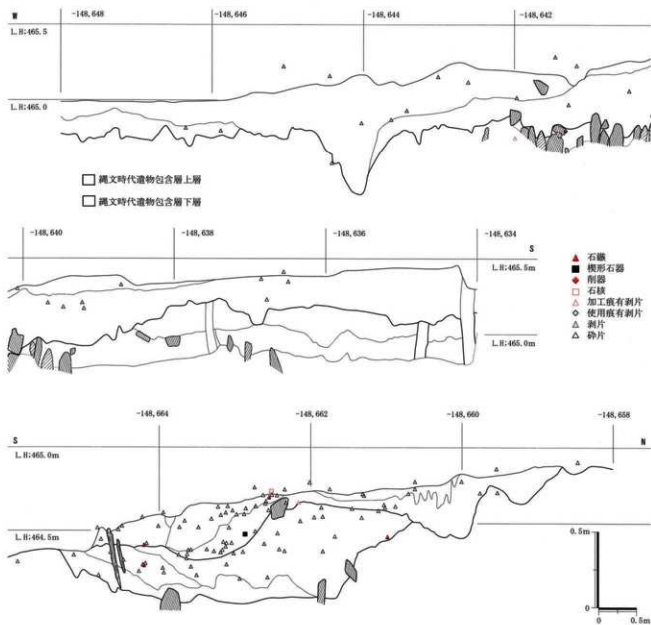


図 139 Y = -4,879.5 ~ -4,880.5 m 間石器垂直分布図 (Y = -4,880 m ライン土層図に投影)

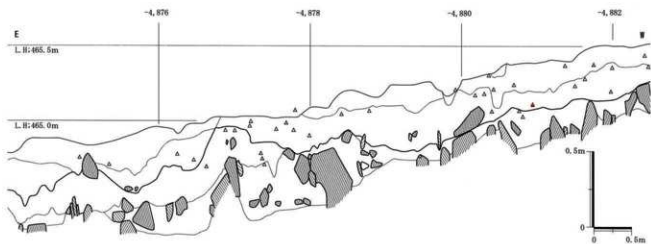


図 140 X = -148,639 ~ -148,641 m 間石器垂直分布図 (-148,640 m ライン土層図に投影)

この結果、北区の集中箇所には上下2層の遺物包含層があり、I群B1類a1・2種をはじめとする早期前葉の神宮寺式(古段階)土器が下層に集中して分布することが分かった(図138)。そのほとんどは、遺構面直下の礫の間に落ち込むように出土している。これはこの箇所が地形の傾斜変換点に相当することから、上方から流れ込んできた遺物が、礫に阻まれて溜まった状態を表していると考えられる。このことから遺物はいずれも2次堆積したものであるといえるが、下層にはI群B1類以外の土器はなく、早期前葉の遺物包含層であるといえよう。

これに対し上層には、垂直分布には表れないが若干のⅢ群F類やⅤ群F類の無文土器が混じり、混在の様子が窺える。ただし、量的にはほぼ全てがI群の遺物であることから、客体的なものとする必要があるかもしれない。

石器については、下層ではなく上層からその多くが出土しており、土器とはやや様相を異にする。平面的には、土器と同様に地形に左右された分布傾向があり、浅い谷状地形の起伏に従って分布が集中する様子が窺える(図136)。また、垂直分布(図139・140)からも石器は層境にピークを持たず、層内に散在することから、これらの石器はいずれも2次堆積したものであることが示唆される。特定の器種についても、集中して分布するなどの傾向は見られない。

南区の集中箇所については、先にも述べたとおり、北区とはやや異なった様相が観察できる。浅い谷状地形や、地形の傾斜変換点付近に遺物が分布する傾向は同じであるが、土器は時期が異なり、出土数も少ない(図135)。I群B1類の土器が全く見られず、II群の土器が主体となる。石器は狭い谷状地形に集中して分布し、その密度は濃い。

垂直分布では、縄文時代遺物包含層上層にII群D2類(含織維縄文土器)が含まれ、下層にII群F類(含織維無文土器)とⅤ群F類が含まれることが分かる(図137)。土器・石器ともにいずれの層境にもピークを持たず、層内に散在して分布する。なお、石器の分布は上層にやや多い傾向があるが、下層にも多く含まれ、北区集中箇所とは様相を異にする。これらの点から、上下層の遺物は明らかに2次堆積によるものと言えよう。また下層のⅤ群F類は1点しかなく、混入の

可能性を考えた方がよいかもしいない。このため下層をII群F類の早期後葉、上層はそれ以降の時期とするのが妥当と思われる。

なお、南区と北区では、上層は直接繋がっているが、下層は繋がっていない。遺物分布や時期が符合しないことから、両地区の下層は異なる層であるといえよう。また、両地区では土器の様相がまるで違うことから、遺物の供給源となった場所や時期が異なっている可能性が高い。

次に、北東部の補足調査東区では早期末のⅢ群A類(石山式)が見つかった。垂直分布は提示していないが、これもまた他の時期の土器が混在する層からの出土であり、2次堆積によるものである。

以上のように、本遺跡からは早期、中期末～後期前葉の遺物が出土しているが、原位置を保っていると言える遺物はなかった。ただし時期別の分布にはある程度の集中傾向が見られ、大きな混在もないことから各時期の遺物供給源はさほど遠い場所でない可能性が高い。早期前葉～中葉の遺物が集中する北区、早期後葉の遺物が集中する南区に関しては、そのやや上方に実際の活動箇所があったと考えるのが妥当だろう。早期末以降は土器の出土量が格段に減ることから、この時期の活動が遠く離れた場所に移ったか、あるいは極めて小規模なものとなった可能性がある。(鐘方・大塚)

3. 出土遺物

試掘調査時の出土遺物と合わせて、その概要を報告したい。出土遺物には、土器・石器・砥石・銭貨・木屑があり、土器には、縄文土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器がある。

(1) 縄文時代の遺物

i. 縄文土器(図141～145・表20～22)

別所大谷口遺跡で出土した縄文土器は総数267点、約1,254gである。そのうちI群が212点、約678g、II群が39点、約494g、III群が5点、約35g、Ⅴ群が11点、約47gである。数量共にI群が圧倒的に多く出土し、またII群は破片の残存が良好なため、点数に比して重量がある。III・Ⅴ群は量的に少なく、また無文がほとんどであるため、該期の様相は不明瞭である。

このように大谷口遺跡は早期を主とする遺跡であるが、特に早期前葉の神宮寺式は複数個体分がまとまって出土しており、数量共に下ノ前・辻堂遺跡のそれを

渡いでいる。また、点数は少ないが、神並上層式と黄島式の間に位置づけられる「山芦屋期」（熊谷2006）の口縁部内面に刻みを施す山形文・無文土器、および早期末の石山式が出土した。該期は県内において不明瞭とされる時期であり、重要な資料といえる。

以下時期ごとに出土土器の報告を行なう。

早期前葉～中葉の土器（1～54）

1～15はI群B1類a1種としたものの口縁部～胴部下半片で、これらは同一個体と考えられる。1～3は口縁部片で、1は口縁端部に面取りを行い、外面は縦位にネガティブ楕円文を施した後、口縁に沿って2単位3条の山形文を横位に施している。内面はナデとユビオサエで調整され、浅い指頭疔痕が観察される。5は頭部片で、胴部からわずかに屈曲し口縁部に向かい外反する器形である。底部は出土していないが、乳頭状の尖底で、緩やかに立ち上がる器形になると考えられる。口縁部に刻みを施さない点は特徴的であるが、山形文を施す点、ネガティブ楕円文の形状から神宮寺式古段階に位置づけられる。

16～27はI群B1類a2種としたものの口縁部～底部付近片で、すべて同一個体と考えられる。16～18は口縁部片で、16・17は端部外面上端に右下がりの刻みを施す。18に刻みは見られないが、16が間隔を空けて施文していることから、無文部だけが残存したと考えられる。外面は縦位のネガティブ楕円文を左から右へ縦位に施文している。胴部片は内面にナデとユビオサエを行っており、指頭疔痕が観察される。27は底部付近片で、乳頭状の尖底になると考えられる。

28～33はI群B1類a3種としたもので、同一個体の口縁部片である。いずれも口縁部外面にやや左下がりの刻みを施し、28・29は口縁部にネガティブ楕円文を横位に施文している。30～33は無文部が残存したと考えられ、文様が観察されない。これらの胴部片と考えられるものは認められなかった。

34はI群B1類a4種としたものである。口縁部片で、横位にネガティブ楕円文を施す。内面には指頭疔痕が認められる。本遺跡では1点のみ出土した。

35はI群B1類b1種としたものの胴部片である。外面はネガティブ楕円文を縦位に施し、内面はナデによる左上がりの擦痕が認められる。本遺跡では1点のみの出土である。

36～43はI群B1類b2種としたものである。角四石を殆ど含まない点が他のI群B類と異なる。36～39の文様はやや細長い形状をし、B2類a種に近い。40～43はやや方形に近い文様である。それぞれ同一個体となる可能性が高い。

44・45はI群C2類としたものである。44は平行線文を横位に施し、内面は指頭疔痕が顕著に認められる。45は平行線文を右上がりに施し、内面はナデを施している。

46はI群D3類としたもので、外面にやや横長の山形文を横位に施す。砂粒を多く含み、若干繊維を含む。

47～52はI群D2類としたものの口縁部～胴部片である。47は口縁部片で、外面に小振りに縦長の山形文をやや左下がりに施し、内面は端部に垂直な刻みをやや左下がりに施す。端部はやや丸みを帯びた先尖り状を呈している。48～50は胴部片で、外面に3単位の小振りな山形文を左下がりに施している。51・52は外面に複合鋸歯文を施す胴部片である。これらは文様・胎土の特徴から同一個体と考えられ、刻み位置から「山芦屋5期」に位置づけられる（熊谷2006）。

53はI群D2類とした口縁部片で、外面はナデとユビオサエによる擦痕・指頭疔痕が顕著に認められる。内面は端部上端に右下がりの刻みを施す。胴部上半から外反させる器形で、端部は先尖り状を呈する。内面に刻みを施す無文土器は県内に類例がないが、端部の刻み位置はI群D2類よりやや上部に位置するため、「山芦屋4期」に位置づけられると考えられる。

54はI群D5類b種としたものである。口縁部片で、端部の形状は剥離のため判然としない。外面は横長の楕円文を横位に施し、口縁内面は櫛状文を施し、以下は剥離のため調整不明である。胎土に結晶片岩を含み、紀北地方に由来する可能性が考えられる。黄島式に比定される。

早期後葉の土器（55～71）

55～57はII群C2類としたものである。55は口縁部片で、端部は先尖り状を呈している。外面は横位のナデによる幅広の浅い屈曲上に、ヘラ状工具によると考えられる爪形状の刺突を、上下幅約2cm程間隔を空けて平行に施す。56はこの直下に位置する破片と考えられ、平行する刺突列は3～4条施されたと考えれ

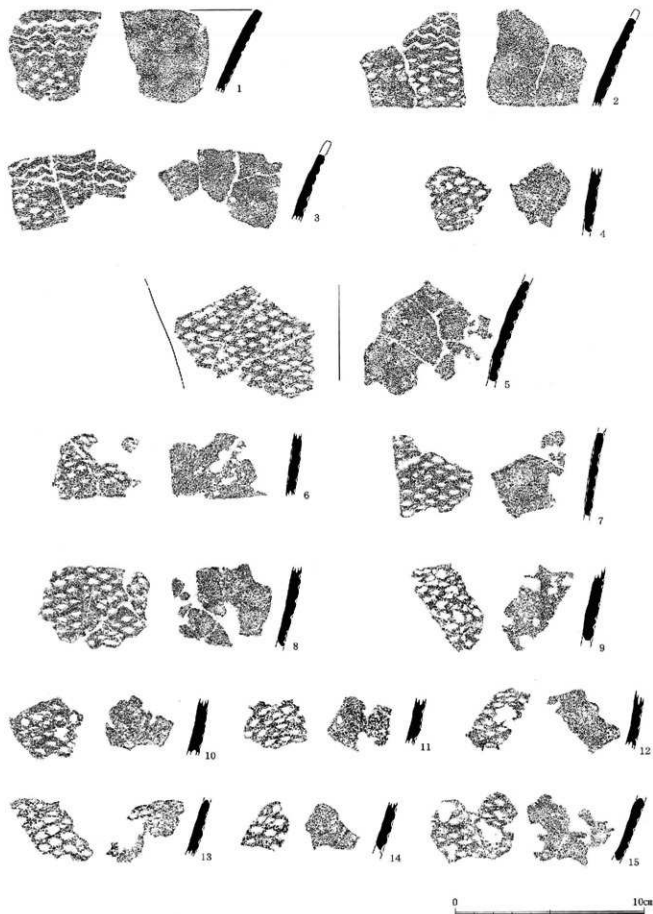


図 141 別所大谷口遺跡出土縄文土器①

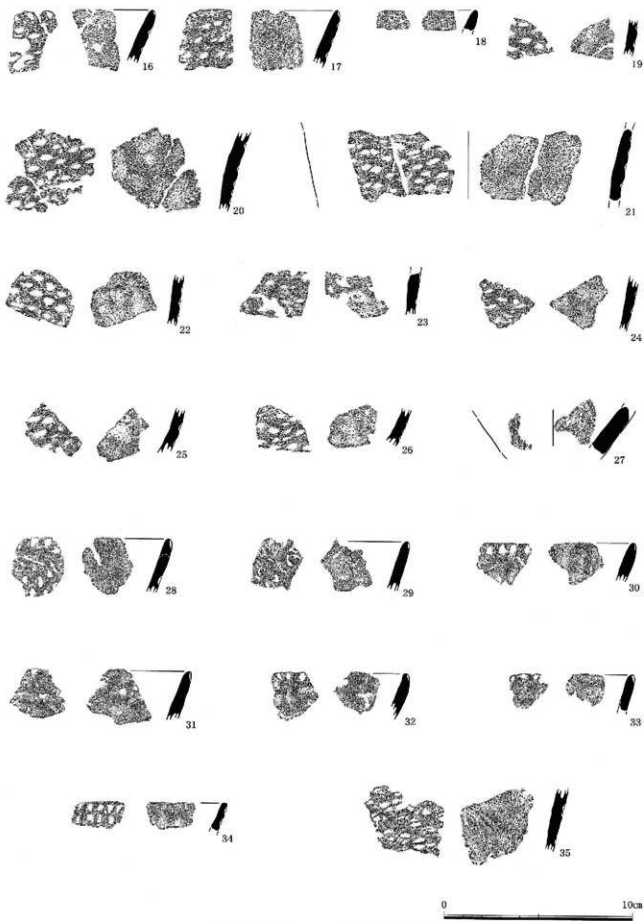


图 142 別所大谷口遺跡出土縄文土器②

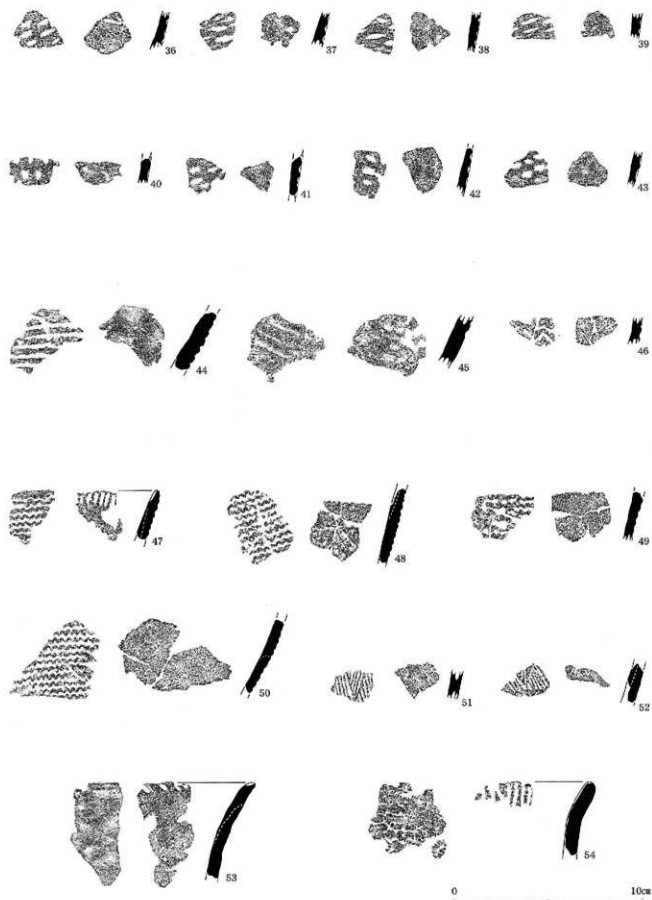


図 143 別所大谷口遺跡出土縄文土器③

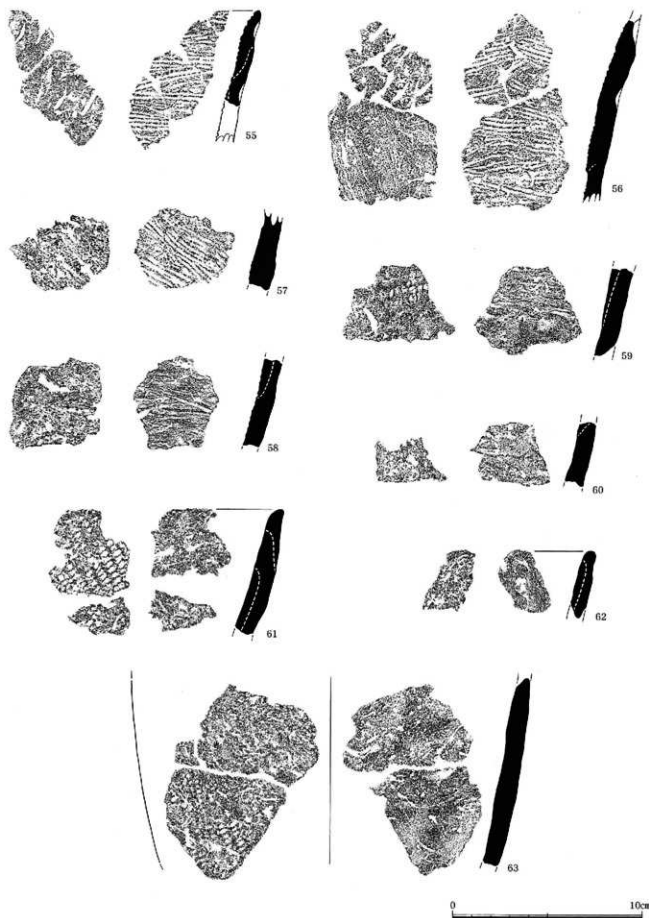


圖 144 別所大谷口遺跡出土縄文土器④

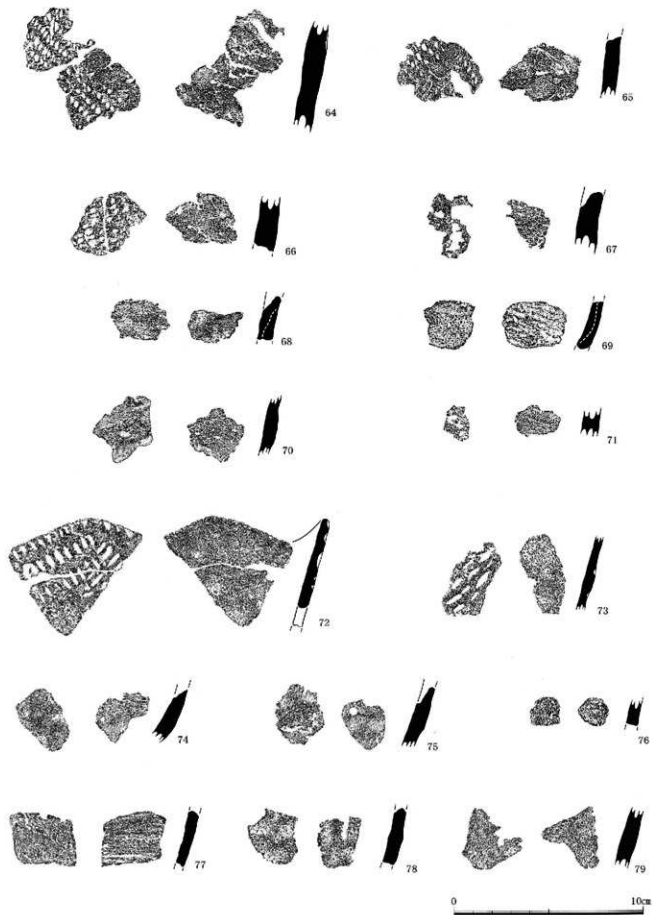


図 145 別所大谷口遺跡出土縄文土器⑤

表 20 別所大谷口遺跡出土縄文土器観察表①

発掘番号	X (m)	Y (m)	H (m)	層位	分層	発掘形式	遺物	特徴	位置	断面(cm)		胎土			色調			備考		
										最大	最小	形状	厚さ	色	質	層	外壁		内壁	断面
1	-148.676.722	-4.896.442	454.422	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.53	0.4	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/3 黄灰	2.5Y/1 黄灰	山崎3遺跡 層長1.8m
2	-148.676.214	-4.897.495	454.202	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.56	0.4	○	○	○	○	2.5Y/1 黄灰	2.5Y/3 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
3	-148.679.400	-4.894.688	454.798	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.5	0.35	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/3 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
	-148.679.482	-4.894.681	454.795	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ										
	-148.679.458	-4.894.679	454.788	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ										
	-148.679.478	-4.894.681	454.795	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ										
4	-148.679.877	-4.873.174	454.893	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.6	0.45	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
5	-148.679.481	-4.894.683	454.783	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.6	0.5	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	縄文4層 層長4.4m
6	-148.678.874	-4.864.847	454.783	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.35	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
7	-148.677.730	-4.895.402	454.590	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.35	○	○	○	○	2.5Y/1 黄灰	2.5Y/2 黄灰	10Y/3/1 黄灰	
8	-148.678.869	-4.894.682	454.744	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.6	0.4	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
9	-148.674.169	-4.894.187	464.764	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.6	0.4	○	○	○	○	5Y/6/8 赤褐色	2.5Y/2 黄灰	10Y/3/1 黄灰	
10	-148.676.305	-4.894.663	454.825	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.63	0.5	○	○	○	○	5Y/6/8 赤褐色	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
11	-148.678.902	-4.893.895	454.812	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	
12	-148.679.147	-4.895.021	454.824	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.6	0.45	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	
13	-148.676.944	-4.894.415	454.783	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.3	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
14	-148.640.448	-4.879.706	464.870	黄色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y/6/3 黄褐色	10Y/5/2 黄褐色	10Y/5/2 黄褐色	
15	-148.676.834	-4.894.477	454.756	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A1	神宮寺式	深鉢 口縁部 直下	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.4	0.45	○	○	○	○	5Y/6/8 赤褐色	2.5Y/2 黄灰	2.5Y/1 黄灰	
16	-148.679.862	-4.894.395	454.818	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	10Y/5/3 黄褐色	2.5Y/2 黄灰	
17	-148.679.481	-4.895.273	454.734	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.68	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
18	-148.679.481	-4.894.638	454.739	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ナデ 内)ナデ	0.5	0.3	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
	-148.679.562	-4.894.356	454.754	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/2 黄褐色	
20	-148.679.578	-4.894.431	454.821	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ナデ 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/2 黄褐色	
21	-148.679.567	-4.894.414	454.795	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ナデ 内)ナデ	0.8	0.45	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
21	-148.679.145	-4.894.850	454.706	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ナデ 内)ナデ	0.65	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
21	-148.679.431	-4.894.638	454.739	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ナデ 内)ナデ	0.65	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
22	-148.679.221	-4.894.991	454.747	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/4/2 黄褐色	10Y/4/2 黄褐色	
23	-148.677.396	-4.895.894	454.882	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.6	0.5	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/4/2 黄褐色	10Y/4/2 黄褐色	
24	-148.679.681	-4.894.643	454.876	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.45	0.3	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/4/2 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
25	-148.639.636	-4.877.576	454.813	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.45	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
26	-148.640.283	-4.877.988	454.819	黄色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.6	0.45	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/1 黄褐色	
27	-148.637.869	-4.872.965	454.744	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)深鉢 内)ナデ	0.8	0.65	○	○	○	○	10Y/5/4 黄褐色	10Y/5/4 黄褐色	10Y/5/2 黄褐色	
28	-148.679.283	-4.893.108	454.734	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)深鉢 ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	2.5Y/1 黄灰	2.5Y/1 黄灰	2.5Y/2 黄灰	
29	-148.680.212	-4.893.066	454.643	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	2.5Y/1 黄灰	10Y/5/4 黄褐色	10Y/5/4 黄褐色	
30	-148.679.395	-4.880.120	454.864	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)深鉢 内)ナデ	0.59	0.4	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/4 黄褐色	
31	-148.679.372	-4.892.582	454.969	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)深鉢・ナデ 内)ナデ	0.6	0.45	○	○	○	○	2.5Y/2 黄灰	10Y/5/4 黄褐色	10Y/4/2 黄褐色	
32	-148.679.530	-4.894.288	454.785	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)深鉢・ナデ・ユビオサエ 内)ナデ	0.6	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	2.5Y/2 黄灰	10Y/5/4 黄褐色	
33	-148.640.067	-4.880.054	454.853	黄色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)深鉢・ナデ 内)ナデ	0.5	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
34	-148.678.285	-4.896.385	454.667	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ・ユビオサエ	0.4	0.3	○	○	○	○	10Y/5/4 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	
35	-148.679.586	-4.895.315	454.826	遺棄 灰色 シルト	1	群01-層A2	神宮寺式	深鉢 口縁部	深笠型	外)ネギタイプ楕円文 内)ナデ	0.6	0.4	○	○	○	○	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	10Y/5/3 黄褐色	

表21 別所大谷口遺跡出土七圃土器観察表②

編年層	X (m)	Y (m)	H (m)	単位	分類	時期型式	発掘部位	特徴	調査	断面(cm)			形状			備考		
										最大	最小	平均	底面	内径	口径		外径	内径
36	-148,875.466	-4,919.520	462.753	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.3	0.35	0	○	○	10YB5.3 に点い黄焼	8YB7.2 オリーブ	10YB5.2 灰黄焼	
37	-148,873.968	-4,876.428	464.533	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.8	0.45	0	○	○	10YB5.4 に点い黄焼	10YB5.4 に点い黄焼	10YB5.2 灰黄焼	
38	-148,881.855	-4,884.676	464.940	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.4	0.35	0	○	○	10YB5.2 に点い黄焼	10YB5.2 に点い黄焼	10YB5.2 灰黄焼	
38	-148,880.981	-4,802.962	464.428	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.5	0.4	0	○	○	10YB5.2 に点い黄焼	2YB5.2 黄灰	10YB4.2 灰黄焼	
40	-148,890.418	-4,889.854	464.584	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.8	0.45	0	○	○	2YB5.2 黄灰	2YB5.2 黄灰	5YB7.1 灰	
41	-148,839.089	-4,874.960	454.823	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.3	0.45	0	○	○	10YB5.3 に点い黄焼	2YB5.2 黄灰	10YB5.4 に点い黄焼	
42	-148,840.033	-4,877.387	464.789	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.7	0.35	0	○	○	10YB5.2 に点い黄焼	2YB5.2 黄灰	10YB5.2 灰黄焼	
43	-148,836.982	-4,874.890	464.570	黄色 シムト	I群01型2群	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)本方タイプ横内文 内)ナナ	0.45	0.3	0	○	○	2YB5.2 黄灰	2YB4.1 黄灰	2YB4.1 黄灰	
44	-148,837.351	-4,874.938	464.906	黄色 シムト	I群01型	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)早期横文 内)ナナ・ユビオサエ	0.85	0.6	0	○	○	10YB5.4 に点い黄焼	2YB7.4 黄灰	2YB7.4 黄灰	
44	-148,838.792	-4,889.851	454.643	黄色 シムト	I群01型	神宮寺式	遺跡 跡部	押型文	外)早期横文 内)ナナ	0.8	0.55	0	○	○	10YB5.4 に点い黄焼	2YB7.4 黄灰	10YB4.4 黄灰	
46	-148,837.311	-4,837.470	461.294	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)山部文 内)ナナ	0.8	0.4	0	○	○	2YB4.2 黄灰	2YB5.2 黄灰	2YB4.1 黄灰	
47	-148,841.810	-4,877.287	464.789	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)山部文 内)跡みナナ	0.6	0.5	0	○	△	10YB5.3 に点い黄焼	3YB5.4 黄灰	10YB5.3 に点い黄焼	
48	-148,843.787	-4,880.369	464.828	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)山部文 内)ナナ	0.8	0.5	0	○	△	10YB5.4 に点い黄焼	10YB5.3 に点い黄焼	10YB4.2 灰黄焼	
48	-148,836.892	-4,889.787	455.293	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)山部文 内)ナナ	0.89	0.45	0	○	△	10YB5.3 に点い黄焼	2YB5.2 黄灰	10YB5.1 黄焼	
50	-148,844.022	-4,852.814	455.241	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)山部文 内)ナナ	0.6	0.6	0	○	△	2YB5.4 に点い黄焼	10YB4.1 黄灰	10YB5.2 黄焼	
51	-148,844.474	-4,881.232	465.257	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)鎌倉遺文 内)ナナ	0.8	0.55	0	○	△	2YB5.4 に点い黄焼	10YB4.1 黄灰	10YB5.2 黄焼	
52	-148,846.007	-4,879.982	464.939	黄色 シムト	I群01型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	押型文	外)鎌倉遺文 内)ナナ	0.7	0.65	0	○	△	2YB5.3 に点い黄焼	10YB4.2 黄灰	10YB5.3 黄焼	
53	-148,856.782	-4,891.619	464.477	灰色 黄灰 シムト	I群02型	「山芦屋」 之上	遺跡 跡部	内面刻文 黒文土器	外)ナナ・ユビオサエ 内)跡みナナ・ユビオサエ	0.8	0.5	0	○	○	2YB7.1 黄灰	10YB7.3 黄焼	10YB5.2 黄焼	
54	-148,854.677	-4,899.249	454.340	黄色 シムト	I群05物類	黄灰式	遺跡 跡部	押型文	外)横内文 内)横文・ナナ	0.89	0.85	0	○	○	10YB5.3 に点い黄焼	3YB5.4 黄灰	5YB3.1 オリーブ	縁点片 断面
55	-148,858.710	-4,875.513	454.548	黄色 シムト	I群02型	初期式	遺跡 跡部	黄灰文	外)跡みナナ 内)黄灰	0.95	0.5	0	○	○	2YB7.3 黄灰	5Y4.1 灰	2YB7.3 黄灰	内面横付
56	-148,858.588	-4,875.238	464.555	黄色 シムト	I群02型	初期式	遺跡 跡部	黄灰文	外)跡みナナ 内)黄灰	1.10	0.65	0	○	○	10YB5.3 に点い黄焼	3YB5.1 黄灰	2YB7.1 黄灰	内面横付
57	-148,855.238	-4,876.020	464.703	黄色 シムト	I群02型	初期式	遺跡 跡部	黄灰文	外)ナナ 内)黄灰	1.8	0.9	0	○	○	2YB7.5 黄灰	5Y4.1 灰	2YB7.1 黄灰	
58	-148,848.298	-4,875.740	454.480	黄色 シムト	I群01型	早期黄灰	遺跡 跡部	黄灰文	外)ナナ 内)黄灰	1.09	0.85	0	○	○	2YB7.2 黄灰	2YB5.1 黄灰	10YB4.1 黄灰	
58	-148,845.722	-4,872.200	454.422	黄色 シムト	I群01型	早期黄灰	遺跡 跡部	黄灰文	外)黄灰・ナナ 内)黄灰	1.1	0.9	0	○	○	2YB7.3 黄灰	2YB4.1 黄灰	5YB5.1 黄灰	断面0.25cm 断面0.45cm
60	-148,844.457	-4,872.265	464.441	黄色 シムト	I群01型	早期黄灰	遺跡 跡部	黄灰文	外)ナナ 内)黄灰	1.0	0.7	0	○	○	2YB7.4 黄灰	6Y3.1 オリーブ	5Y5.1 黄灰	
61	-148,856.879	-4,880.817	464.261	黄色 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)黄灰・L 内)ナナ・ユビオサエ	1.15	0.8	0	○	○	7YB5.3 黄灰	2YB7.1 黄灰	10YB5.1 黄焼	断面0.3cm 断面0.45cm
62	-148,855.287	-4,878.768	464.859	黄灰 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)黄灰 内)ナナ・ユビオサエ	1.6	0.5	0	○	○	2YB5.3 に点い黄焼	3YB5.2 黄灰	5Y5.1 黄灰	
63	-148,857.943	-4,878.875	464.604	黄色 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)黄灰・L 内)ナナ・ユビオサエ	1.2	0.85	0	○	○	3YB5.4 に点い黄焼	10YB5.2 黄灰	2YB7.2 黄灰	断面0.25cm 断面0.45cm
64	-148,857.758	-4,881.030	464.943	黄色 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)黄灰・L 内)ナナ・ユビオサエ	1.25	0.7	0	○	○	3YB5.4 に点い黄焼	10YB4.2 黄灰	10YB4.1 黄灰	断面0.3cm 断面0.45cm
65	-148,856.881	-4,880.993	464.947	黄色 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)黄灰・L 内)ナナ・ユビオサエ	0.85	0.65	0	○	○	2YB5.2 黄灰	2YB4.1 黄灰	6Y3.1 オリーブ	断面0.4cm 断面0.45cm
66	-148,857.285	-4,877.967	455.057	黄色 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)黄灰・L 内)ナナ	1.1	0.6	0	○	○	10YB4.2 黄灰	10YB5.2 黄灰	2YB7.1 黄灰	断面0.5cm 断面0.5cm
67	-148,855.729	-4,860.854	455.006	黄色 シムト	I群02型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)ナナ 内)ナナ	1.2	1.05	0	○	○	2YB7.2 黄灰	2YB5.2 黄灰	10YB4.1 黄灰	
68	-148,851.182	-4,874.778	464.801	黄色 シムト	I群01型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)ナナ 内)ナナ・ユビオサエ	0.6	0.7	0	○	○	10YB4.1 黄灰	2YB5.1 黄灰	10YB2.1 黄灰	
69	-148,857.455	-4,892.251	454.271	灰色 黄灰 シムト	I群01型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)ナナ 内)ナナ	0.75	0.4	0	○	○	10YB5.3 に点い黄焼	2YB4.1 黄灰	2YB4.1 黄灰	
70	148,857.158	-4,893.261	454.149	黄色 シムト	I群01型	早期黄灰	遺跡 跡部	縁点横文	外)ナナ 内)ナナ	0.8	0.55	0	○	○	10YB5.3 に点い黄焼	2YB4.1 黄灰	2YB4.1 黄灰	

表 22 別所大谷口遺跡出土縄文土器観察表③

器物番号	X (m)	Y (m)	H (m)	形状	分類	時期	器種	特徴	調整	胎土										備考
										層数	色	砂粒	骨角	角礫石	繊維	外層	内層	断面	備考	
71	-148.697.279	-4.892.185	484.400	灰赤 粘厚 シルト	Ⅱ群F類	早期前葉	器縁部 器底	縦横割文	内)ナデ 内)ナデ	0.8	0.75	○	○	○	○	10000/1 黄灰	250/1 黄灰	10000/1 黄		
72	+148.875.805	-4.905.781	489.289	黄赤色 粘厚 シルト	Ⅱ群A類	石山式	器縁 口縁部	縦文 刺突列	内)割文・縦文・ナデ 内)ナデ・ユビオサエ	0.7	0.5	○	○	○	○	10000/2 灰黄緑	10000/3 に5:1黄緑	250/1 黄灰		
73	-148.690.289	-4.898.768	484.100	黄赤 シルト	Ⅱ群A類	石山式	器縁 器底	縦文 刺突列	内)割文・縦文・ナデ 内)ナデ・ユビオサエ	0.8	0.4	○	○	○	○	10000/2 黄灰	250/1 黄灰	250/1 黄灰		
74	-148.691.234	-4.877.055	484.777	黄赤 シルト	Ⅱ群F類	早期末 前期初葉	器縁 器底	縦文 刺突列	内)ナデ 内)ナデ	0.78	0.85	○	○	○	○	2500/2 黄灰	50/1 灰	10000/2 灰黄緑		
75	-148.677.738	-4.895.002	484.676	黄赤 粘厚 シルト	Ⅱ群F類	早期末 前期初葉	器縁 器底	縦文 刺突列	内)ナデ 内)ナデ	0.8	0.7	○	○	○	○	2500/1 黄灰	2500/1 黄灰	2500/2 黄灰		
76	-148.684.056	-4.882.746	484.948	黄赤 粘厚 シルト	Ⅱ群F類	早期末 前期初葉	器縁 器底	縦文 刺突列	内)ナデ 内)ナデ	0.80	0.55	○	○	○	○	2500/2 黄灰	2500/2 黄灰	250/1 黄灰		
77	-148.684.028	-4.882.532	484.954	黄赤 粘厚 シルト	V群F類	中期末後葉 終葉?	器縁 器底	縦文 刺突列	内)ナデ・ケズリ 内)ナデ	0.6	0.4	○	○	○	○	2500/2 黄灰	2500/2 黄灰	50/1 黄灰		
78	-148.677.764	-4.896.715	484.615	黄赤 粘厚 シルト	V群F類	中期末後葉 終葉?	器縁 器底	縦文 刺突列	内)ナデ・ユビオサエ 内)ナデ・ユビオサエ	0.7	0.55	○	○	○	○	2500/2 黄灰	50/1 灰	10000/3 に5:1黄緑		
79	-148.654.506	-4.890.318	484.697	黄赤 粘厚 シルト	V群F類	中期末後葉 終葉?	器縁 器底	縦文 刺突列	内)ナデ 内)ナデ	0.8	0.7	○	○	○	○	2500/4 に6:1黄	2500/3 黄灰	2500/3 黄灰		

※11-13-15-24-28-32-34-40は、縄文時代遺物発掘調査下層出土
※14-26-27-33-41-79は、縄文時代遺物発掘調査上層出土

る。56の刺突列下位には右下→左上方向の幅広いナデが行なわれており、擦痕が顕著に認められる。55～57の内面は指頭圧痕が顕著に認められ、その上に細かい条痕を横位ないし斜位に施している。また指頭圧痕の凹部に煤の付着が認められる。繊維を多く含み、繊維の抜け痕が顕著である。これらは同一個体であり、平行刺突列を施すことから粕畑式に比定されると考えられる。

58～60はⅡ群D1類としたもので、これらは同一個体である。59は外面に節の太い縄文LRをやや左上がりに斜位に施し、内面は粗い条痕を横位に施す。58・60の外面は摩滅が著しく、ナデによる擦痕のみが残る。内面は粗い条痕を施す。これらは砂粒・繊維を多く含み、器面には繊維の抜け痕が顕著に認められる。

61～66はⅡ群D2類としたものである。61・62は口縁部片である。61は直立する口縁部から、わずかに屈曲する器形である。端面は内傾する面をもつ。外面には節の太い縄文RLを横位に施し、内面にはナデによる凹凸が認められる。62は口縁部をつまみ上げてわずかに外反させ、端面は厚く丸みをもつ。外面は摩滅のため調整は不明である。内面には指頭圧痕が認められる。

63～66は胴部片で、いずれも節の太い縄文RLを横位に施す。63・64の内面にはナデによる凹凸が顕著に認められる。これらはいずれも繊維を多く含み、繊維の抜け痕が顕著に認められる。

67～71はⅡ群F類としたもので、いずれも胴部片である。67は厚手の無文土器で、外面はナデによる屈曲が認められ、内面は横位のナデを行なう。擬口縁が顕著に認められる。70の外面は楕円状に隆起する部分が認められる。あるいは粗大楕円文となる可能性も考えられるが、判然としない。器壁は薄く、内面はナデで平滑に調整されている。

早期末～前期初葉の土器 (72～76)

72・73はⅢ群A類としたものである。72は波状を呈する口縁部片で、II縁部上端に右下がりの刻みを施し、外面には刺突を左→右方向へ波状に施す。内面はナデとユビオサエで調整され、浅い指頭圧痕がわずかに認められる。73は胴部片で、波状の刺突を4条施している。内面はナデとユビオサエで調整されている。両者は石山式に比定されるが、刺突列の条数や胎土が異なるため別個体と考えられる。

74～76はⅢ群D類としたものである。74・75は胴部下片で、立ち上がりの形状から丸底になると考えられる。内外ともナデで調整され、砂粒を多く含む。

中期末～後期前葉の土器 (77～79)

77～79はV群F類としたもので、いずれも胴部片である。無文のため時期比定は困難であるが、胎土の特徴から中期末～後期前葉に属すると考えられる。77の外面は横位のナデの後、右下→左上方向にケズリを行っている。内面は横位のナデである。78は内外に指頭圧痕が認められる。79は内外をナデで調整している。(熊谷)

ii. 石器 (図146~147、表23)

出土石器は石鏃(破片含む) 33 (3) 点、搔器1点、削器9 (1) 点、楔形石器9 (1) 点、石核9 (1) 点、加工痕有剥片21 (1) 点、使用痕有剥片5 (1) 点、剥片435 (20) 点、砕片562 (45) 点で総数1,084点である(括弧内はそのうちA発掘区外の出土点数)。

石材はチャート2点(石鏃1、砕片1) ガラス質安山岩1点(石鏃1)を除いて全てサスカイトである。以下、主な製品について記す。

石鏃(1~18)は未製品と考えられるが、中央の厚みが除去できずに遺棄されたものかもしれない。

2~5は浅い抉りの凹基式である。3・5は平面形が正三角形にちかく比較的厚みのあるタイプで、縄文時代早・前期に見られる。3は灰色チャート、5は下呂石に似たガラス質の安山岩であり、この2点のみ石材が異なる。

6・7は抉りが三角形を呈し、先端部が細く尖る。

8~14は明瞭な抉りを施すが、脚部は胴部より短いもので、9は脚端部がわずかに外反する。

15~17は小形で深い抉りをもつタイプで、早・前期に認められる。

18は脚部が段をもって開くタイプであるが、この製品はおそらく欠損後の再加工品であり、短いほうの脚部も加工されている。

削器(19~22) 19はインバースリタッチで刃部が

比較的急角度に整形されており、刃部は平面観、正面観とも直線的である。

20は斜軸にちかい縦長剥片を素材とし、刃部がやや内彎する。

21は両刃の削器であるが、刃部加工は主要剥離面(左)側のほうが丁寧であり、インバースリタッチを基本としたものと考えられる。

22は他と比べて刃部の剥離痕が細かい。素材は定型的な石核から連続して剥離された横長剥片を用いており、複剥離面の打面が残る。

楔形石器(23~28) 23・24は小形の剥片を用いたものであるが、それぞれ両極打法によって得られた剥片の可能性がある。ともに剪断面を有し、24は打点側に剪断面がある。

25は形態的には楔形石器であるが、両極打法によってなんらかの石器を成形しようとしたものと思われる。左側面が剪断面となっており、このアクセントによって廃棄されたものと推測される。

26はこの素材自体が両極打法によって剥離された可能性が高く、極めて薄い剥片を用いている。主要剥離面(右)側の斜めの剥離痕は、素材剥離時に既に力が抜けていたものと考えられる。

27は主要剥離面(右)側の右半に広い剪断面を有するもので、あまり使用されること無く廃棄されたものと考えられる。

表23 別所大谷口遺跡出土石器観察表

	X(m)	Y(m)	H(m)	層位・遺物	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考	
1	-148683.871	-4862.854	464.791		SDC1-灰色燧石	石鏃	2.87	2.90	0.89	2.9	サスカイト	未製品
2	-148650.383	-4875.581	484.863		黄色シルト	石鏃	1.79	1.68	0.37	(0.01)	サスカイト	先端部欠損
3	-148663.875	-4867.707	485.488		黄色シルト	石鏃	(1.68)	(1.45)	0.33	(0.88)	チャート	先端部・脚部欠損
4	-148663.875		485.488		黄色シルト	石鏃	(2.69)	(1.80)	0.27	(0.85)	サスカイト	脚部欠損
5		X32-Y74区			緑褐色・灰色砂	石鏃	1.74	1.36	0.34	0.45	ガラス質安山岩	
6	-148451.287	-4871.059	484.620		黄色シルト	石鏃	2.05	1.33	0.33	0.71	サスカイト	
7	-148043.876	-4878.672	484.611		黄色シルト	石鏃	(1.79)	1.42	0.31	(0.68)	サスカイト	先端部欠損
8	-148903.793	-4800.984	459.216		黄灰色シルト	石鏃	(1.90)	(1.52)	0.27	(0.65)	サスカイト	先端部・脚部欠損
9	-148633.449	-4875.073	484.815		灰色土(中硬)	石鏃	1.66	1.42	0.27	0.52	サスカイト	
10	-148664.201	-4880.521	484.358		黄色シルト	石鏃	(1.35)	1.52	0.22	(0.48)	サスカイト	先端部欠損
11	-148651.972	-4867.276	483.897		黄色シルト	石鏃	2.15	1.95	0.37	1.06	サスカイト	
12	-148637.292	-4884.767	484.086		黄色シルト	石鏃	2.22	1.77	0.38	0.87	サスカイト	
13	-148653.080	-4884.229	485.327		黄色シルト	石鏃	(1.60)	1.90	0.30	(0.51)	サスカイト	先端部欠損
14	-148664.202	-4876.707	484.224		黄色シルト	石鏃	(1.67)	(1.44)	0.23	(0.36)	サスカイト	脚部欠損
15	-148644.082	-4866.075	483.844		灰褐色シルト	石鏃	(1.40)	(1.20)	0.22	(0.24)	サスカイト	先端部・脚部欠損
16	-148048.979	-4867.258	484.197		黄色シルト	石鏃	(1.48)	(1.30)	0.19	(0.25)	サスカイト	脚部欠損
17	-148953.320	-4852.200	463.127		黄色シルト	石鏃	(1.26)	(1.18)	0.29	(0.27)	サスカイト	先端部・脚部欠損
18	-148648.684	-4873.423	484.480		黄色シルト	石鏃	(1.87)	(1.58)	0.39	(0.76)	サスカイト	脚部欠損
19	-148632.246	-4872.748	484.728		黄色シルト	削器	3.24	3.65	0.81	10.49	サスカイト	インバースリタッチ
20	-148041.328	-4880.248	484.788		黄灰色シルト	削器	2.98	3.56	0.52	5.52	サスカイト	
21	-148600.891	-4601.736	459.255		黄色シルト	削器	3.62	3.03	1.06	30.56	サスカイト	インバースリタッチ
22	-148630.125	-4865.289	484.123		黄色シルト	削器	3.81	4.46	0.59	12.70	サスカイト	
23	-148662.868	-4885.709	454.428		黄色シルト	楔形石器	2.07	1.91	0.60	4.62	サスカイト	両側面有
24	-148637.643	-4878.890	485.922		黄色シルト	楔形石器	2.73	1.59	0.76	3.41	サスカイト	両側面有
25	-148637.840	-4876.913	484.679		黄色シルト	楔形石器	2.77	3.26	0.95	16.37	サスカイト	両側面有
26	-148644.126	-4880.248	484.109		淡灰色砂	楔形石器	2.80	2.27	0.40	2.49	サスカイト	
27	-148645.487	-4877.499	484.543		黄色シルト	楔形石器	3.70	3.00	0.98	11.15	サスカイト	両側面有
28	-148634.303	-4868.336	484.340		黄色シルト	楔形石器	5.02	3.74	1.22	26.77	サスカイト	両側面有
29	-148644.980	-4878.104	484.285		黄色シルト	石鏃	10.80	13.45	2.74	406.00	サスカイト	両端石核

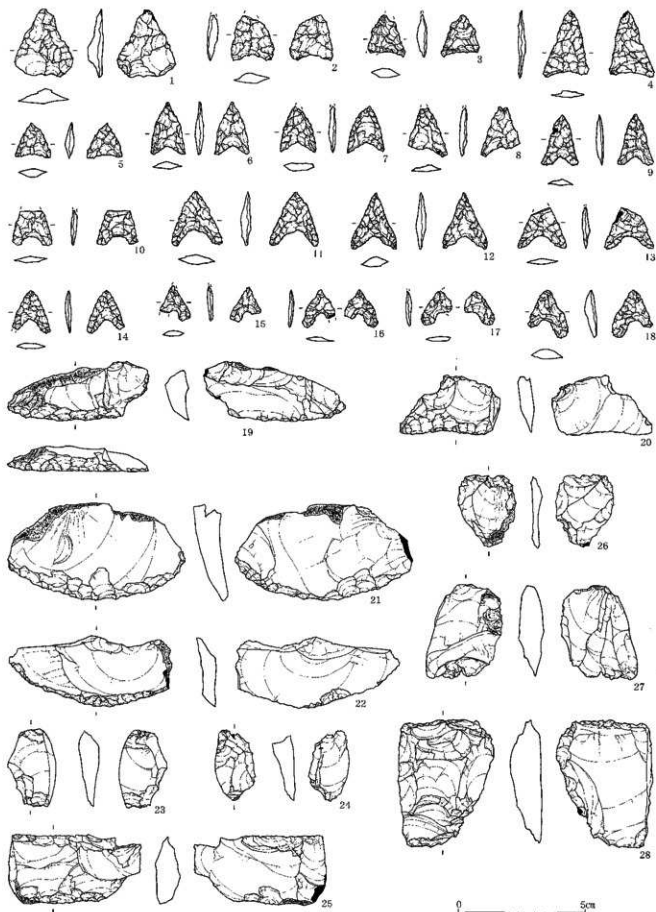


图 146 别所大谷口遺跡出土石器① (2/3)

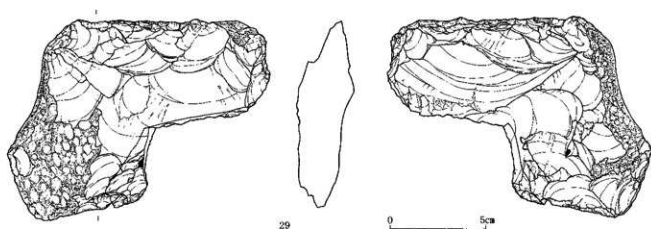


図147 別所大谷口遺跡出土石器② (1/2)

28は本遺跡では大形の楔形石器である。素材は両極打法で得られており、左側面に剪断面を有する典型的な楔形石器である。

石核 (29) 出土した石核のなかで最大なものである。板状の原礫を素材としたものと思われ、表裏面に自然面を残す。周縁はツブレとともに細かい階段状剥離が著しい。両極打法によって剥離が行なわれているが、基本的には台石の上に据えて敲くという単純な作業を行なったにすぎず、剥離痕は極めて不規則である。正面右下がアクセシントで大きく欠けた後、その割れ面に加工を施しているが、結局廃棄されたものと考えられる。この石核は石礫の素材剥片を生産した可能性がある。

本遺跡に持ち込まれるサヌカイトは最大この程度の原礫であった可能性が高く、これより大きな原礫もしくは剥片は確認されていない。(松浦)

(2) 古墳時代の遺物

試掘調査第4発掘区土坑出土の土師器壺(図148-1)1点がある。口径8.6cmで、底部を欠失する。体部内面はケズリ後にナデで調整する。

(3) 古代～中世の遺物

土器 10～11世紀頃の土器と14世紀頃の土器が包含層から出土している。ここでは、第6発掘区掘立柱建物周辺の平安時代遺物包含層出土土器(図148-2～6)の概要を述べておく。

2は口径9.3cmの土師器皿で、上層(暗灰色土)から黒色土器B類碗・壺・瓦器碗の破片と共に出土した。11世紀後半頃の資料であろう。

3～6は下層(暗黄灰色粘質シルト)出土土器であ

る。3・4は土師器杯で、3の口径13.3cm、4の口径14.3cm。

5・6は黒色土器A類碗で、6の底部には高台が貼り付く。口径は5が14.4cm、6が15.5cm。

他に黒色土器A類鉢の破片がある。これらは南都Ⅲ期古段階に相当し、10世紀中葉頃の資料とみられる。

銭貨(図148-7・8) 開元通寶(7)1点と皇宋通寶(8)1点がある。7は621年初鑄で、外縁外径2.35cm、内部内径0.68cm、外縁厚0.13cm、重量2.487g。

8は1038年初鑄で、外縁外径2.48cm、内部内径0.67cm、外縁厚0.125cm、重量3.359g。7・8は第6発掘区平安時代遺物包含層直上から重なって出土した。

磁石(図148-9) 9は泥岩製の砥石で、一部を欠失する。残存長7.3cm、幅2.2cm以上、厚さ0.4～1.3cm、重量23.898g。(鏡方)

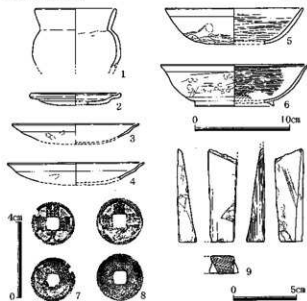


図148 古墳時代～中世上層・磁石・銭貨

第3節 水間遺跡

I. 試掘調査の方法と概要

水間遺跡では、これまでに第1～7次調査を実施してその概要を報告してきた。ただし、その調査箇所は主要地方道奈良名張線及び国道369号線よりも南側に限られており、水間遺跡北限周辺の様相は不明のままであった。平成18年度に整備工事が予定された水間町1052ほかの区域は、平成16年度の遺跡有無確認踏査で遺物散布を確認した場所であり、まさに水間遺跡北限となる可能性が想定できる。

調査地の現状は、西から東に延びる尾根⑦の南側に造成された水田である。南側で一段水山が高くなるが、これは尾根⑥の稜線を造成して水田化したことに起因している。調査地の南東側には尾根⑥の東半分が独立した高まりとなって現在残っているが、これは尾根⑥の鞍部中央を切り通して国道369号線が走っているためである。I発掘区の西側にあたる尾根⑥の中腹に念仏寺跡、尾根⑦の西側頂上に水間城跡、中央南側斜面に番上屋敷跡、東側先端部に尾ノ上寺跡がある。

水間遺跡第8次調査となる試掘調査は、平成17年11月28日から平成18年1月13日にかけて行なった。事業地内での遺跡の正確な分布範囲とその時期を確定することを目的とし、主に切土工事予定箇所を対象に発掘区を9箇所設定して試掘調査を実施した。

各発掘区の平面図は1/100、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国土座標を記入して調査地での位置関係を記録した。なお、発掘区の位置及び地形名称は、図149に示した通りである。遺構番号は本調査区のそれに従う。

1. 各発掘区の概要

第70～78発掘区の位置は図149に示した通りで、発掘面積は合計で約555m²である。なお、現地調査時に付した発掘区番号(第1～9)が既報告の発掘区番号と重複するため、本書の記述にあたっては、それとの混乱を避けてその続き番号に改めた。

第70発掘区 発掘区全体が谷部の中に収まり、西南から東北へと地山が下がっている。基本的な層序は、耕土の下に暗青灰色土(もしくは澄灰褐色土)、明灰色粘土、砂混じり暗青灰色粘土が続いて花崗岩質岩盤(表面風化して軟質)の地山となる。地山の標高は

西南部の最高所で460.56mである。発掘区北端は、これより一段下がる深さ約0.8mの谷底流路となる。谷底流路には上から砂混じり灰色粘土、暗灰褐色粘質シルト、褐色腐植土の堆積があり、底での標高は西側で459.3mである。

発掘区中央南寄り、北西から南東へ流れる溝SD05を確認した。幅1.9～2.2m、深さ0.3～0.5mで、北側の法面は2段に落ちる。南北両岸には、木材や網代のような編物を横に並べて杭留めした護岸施設が認められた。溝内には上から砂混じり明青灰色粘土、澄褐色砂礫、淡灰色砂・シルト混じり粘土が堆積し、澄褐色砂礫から16世紀の土器器皿などが出土した。

第71発掘区 発掘区全体が谷部の中に収まり、西南から東北へと地山が下がっている。基本的な層序は、耕土の下に水田造成土、旧耕土、砂混じり明灰色粘質土、淡灰色粘土、暗褐色腐植土が続いて花崗岩質岩盤(表面風化して軟質)の地山となる。地山の標高は西側の最高所で457.5m、最も低くなる北東部で456.6mである。最下層の暗褐色腐植土内から12世紀の遺物が出ただけで、遺構はなかった。

第72発掘区 調査地最高所に位置する水田に設定した発掘区である。北側の谷部より一段高い尾根⑥上に位置し、西から東へ下がる緩傾斜地となっている。基本的な層序は、耕土の下に灰色土混じり黄褐色土(水田造成土)、茶灰色土、灰褐色土、暗褐色土(13世紀頃の遺物包含層)、砂混じり黄灰色粘質シルト(縄文時代遺物包含層)が続いて黄褐色砂礫の地山となる。西端では耕土直下が地山で、その標高は459.05mである。東端での地山の標高は457.5mで、東西の比高差は1.55mとなる。

発掘区全面にわたって土坑・溝・柱穴などの遺構を検出したが、西側の高いところで13世紀頃の遺物を含む遺構が多く認められる傾向にある。東側の下がったところでは、砂混じり黄灰色粘質シルトから掘り込まれた東西4.8m、南北1m以上の堅穴建物SB02を検出した。内部を掘削していないため詳細な時期は不明である。東隅付近に焼土の分布が見えており、カマドのような施設となる可能性が考えられた。

第73発掘区 発掘区全体が谷部の中に収まり、西から東北へと地山が下がっている。基本的な層序は、耕土の下に水田造成土、旧耕土、砂混じり明灰色粘土、暗

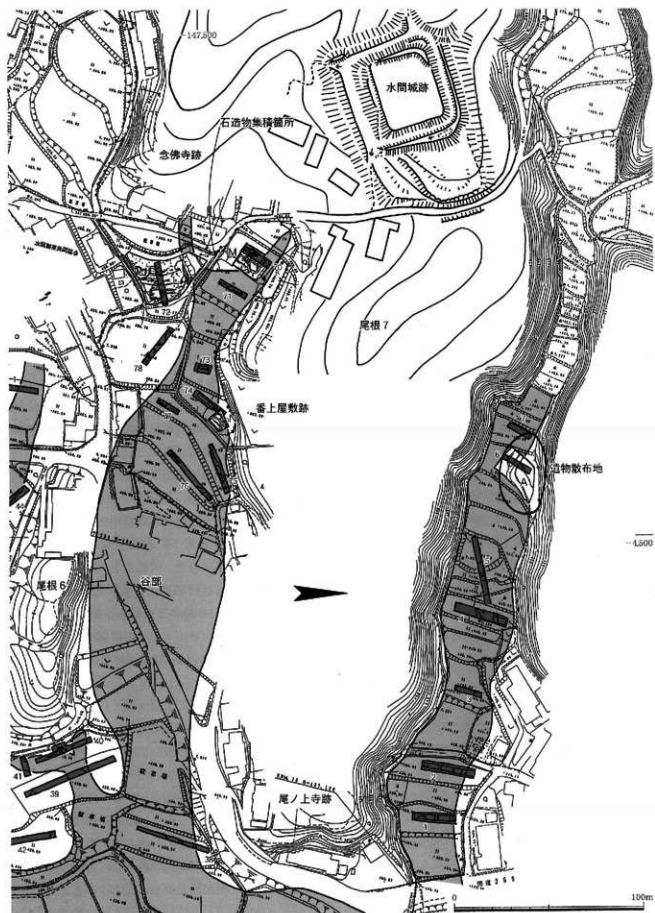


図 149 水間遺跡第 8・9 次調査、水間町遺物散布地発掘区位置図 (1/2,000)

灰色シルト、褐色シルト、暗褐色腐植土が続いて青灰色砂礫の地山となる。谷底までの深さが現地表下1.8m以上と深かったため、2段掘りで調査を行なった。地山の標高は西南隅で453.1m、最も低くなる北東隅で452.9mである。最下層の暗褐色腐植土内から12世紀の遺物が出土しただけで、遺構はなかった。

第74発掘区 北側で尾根⑦の裾を検出し、南側は谷部となっている。尾根⑦の裾の上面は削られて平坦面となり、耕土直下が地山である。その標高は453.8mで、平坦面上には16世紀頃の遺物を包含する小土坑が遺存していた。一方、谷部では耕土の下に暗青灰色粘質土、暗黄灰色粘質土、灰色粘土、暗灰色シルト、暗灰褐色シルト、暗茶褐色腐植土、褐色腐植土が続いて燈褐色砂礫の地山となる。谷底までの深さが現地表下1.8m以上と深かったため、発掘区南側では2段掘りで調査を行なった。谷底は451.8m前後でほぼ平坦である。暗茶褐色腐植土層中から多くの割り裂いた板材が奈良～平安時代の土器片と共に出土した。また、灰色粘土層中からは嘉祐通寶（北宋銭；1056年初鋳）1点が出土している。

第75発掘区 発掘区全体が谷部北斜面に相当し、北から南へと地山が下がっている。微視的にみると、若干中央が南に張り出すため、東西端へ向かってさらに深くなる。基本的な層序は、耕土の下に水田造成土、赤灰褐色土、灰褐色土、淡茶灰色粘土が続いて砂礫混じり青灰色シルトの地山となる。地山の標高は北側で452.2m、南側で451.5mである。

灰褐色土内で礫が並ぶように出する地点があり、慎重に精査してみたが、礫の分布に規則性はなく、13世紀の土器片と共に自然堆積しただけであることが判明した。灰褐色土中に13世紀の遺物が多く含まれているのが注意されたものの、遺構は全くなかった。

第76発掘区 発掘区全体が谷部の中に収まるが、中央部に0.6mほど高まる地形が認められる。これは第75発掘区で認められた南への張り出しに続く微高地に相当する。基本的な層序は、耕土の下に淡灰色土、砂混じり灰色粘土、明灰色粘土、砂混じり暗灰色粘土が続いて青灰色砂礫の地山となる。地山の標高は最高所で450.8m、北側で450.1mである。最下層の砂混じり暗灰色粘土層内から13世紀の遺物が出土したが、量的には少ない。

発掘区南端で地山は急激に下がっており、おそらく谷底流路の北斜面とみられる。北斜面には粗砂で埋まる多くの凹みがあり、その中からは13世紀の遺物が出土した。この他に遺構は認められない。

第77発掘区 発掘区全体が谷部の中に収まり、南から北へと緩やかに地山が下がっている。基本的な層序は、耕土の下に暗黄灰色土、旧耕土、灰色土、暗灰褐色粘土が続いて青灰色砂礫の地山となる。地山の標高は西南側で452.4m、東北側で451.8mである。最下層の暗灰褐色粘土層内から13～14世紀の遺物が出土したが、量的には少ない。

発掘区南端で地山は急激に下がっており、おそらく谷底流路の北斜面とみられる。北斜面には第76発掘区と同様に粗砂で埋まる凹みがあり、その中からは13世紀の遺物が出土した。この他に顕著な遺構は認められない。

第78発掘区 第72発掘区で検出した尾根⑥上の遺構の広がりを確認する目的で設定した。調査の結果、東西方向へ下がる3段の水田造成土、旧耕土、黄灰色シルトブロック混じり灰色土・黄褐色シルト混じり淡灰色土（造成土）が続いて砂礫混じり青灰色シルトの地山となる。地山の標高は西北端で455.3m、東南端で454.5mである。尾根⑥がここまで及んでいるのを確認したものの、遺物包含層や遺構は全く検出できなかった。本来の尾根⑥上面（地山面）は大きく削平されていることが判明し、遺構が認められないのもそのためと考えられる。

2. 試掘調査の成果

調査地北側に尾根⑦があり、その南側に谷部と尾根⑥が存在した。尾根⑥には第72発掘区で確認したように8世紀以前と13世紀頃の上坑・溝・柱穴などの遺構があり、2時期の集落跡が存在する可能性が高かった。一方、谷部では第70発掘区で16世紀の溝S D05を検出したのみで、顕著な遺構は認められなかった。ただし、谷部下層埋土中に8～13世紀頃の遺物が包含されている点は、文献史料に残る水間柚との関連で非常に興味深い。尾根⑦の北側にある細長い谷部を昨年度試掘調査したが、そこでも同じ時期の遺物が出土しており、尾根⑦上に水間柚に関わる遺構が存在する可能性が想定できる。第76・77発掘区のように、尾根⑦

から少し距離をおくところで遺物の出土が極めて少なくなる点は、その傍証となるかも知れない。また、尾根⑥を確証した第74発掘区では、削平された地山平坦面上で13世紀頃の土坑などを検出した。この地点のすぐ北側には「番上屋敷」と地元で呼ばれる屋敷跡と石垣井戸が残っている。いつ頃の屋敷跡かは判然としないが、それとの関連性も注意しておく必要がある。

II. 水間遺跡第9次調査の成果

試掘調査の成果に基づいて、第9次調査は切土工事が予定されている3箇所を対象にL・M・N発掘区を設定して実施した。各発掘区の位置は図149に示した。

1. 調査の方法

耕作土及び表土を重機で除去した後に、調査地全体を基準点測量して、旧国土座標軸に沿った2m方眼のグリッドを設定した。中世遺物包含層出土の遺物はグリッドごとに回収したが、縄文時代遺物包含層から出土した遺物は、トータルステーションで出土位置の3次元データを記録しながら取り上げた。

発掘区の平面略測図を1/100で作成し、遺構の位置関係などの情報をそれに整理しながら調査を進めた。そして、個別の遺構図は1/10あるいは1/20、土層図は1/20で基本的に作成し、平面図に旧国土座標を記入して相対的な位置関係を復元した。発掘区全体の平面図はヘリコプターによる航空写真から縮尺1/50で図化した。補足調査として、縄文時代遺物包含層の一部を掘削し、平板測量で1/100の平面図を作成した。

なお、N発掘区周辺には番上屋敷跡があり、水田の傍らに石地蔵1体が置かれていた。整備工事でこれらの原状が失われてしまったため、調査と併行して平板測量を行ない、その位置や形状を記録した。調査地内には、その他にも幾つかの石造物が放置されていたので、石地蔵と合わせて実測し、写真撮影を行なった。

2. 調査の概要 (図150)

(1) L発掘区

西から張り出す尾根⑥の稜線上を造成してつくられた一段高い水田に発掘区を設定した。遺構面は全体的に西から東へ下がる緩傾斜地となっているが、南・東端は水田造成時の地下げにより、大きく削られている。基本的な層序は、西側で耕土直下が地山となるのに

対して、東側では耕土の下に灰色土混じり黄褐色土上(水田造成土)、茶灰色土、灰褐色土、暗褐色土上(13世紀頃の遺物包含層)、砂混じり黄灰色粘質シルト(縄文時代遺物包含層)が続いて黄褐色砂礫の地山となる。西端では地山の標高459.05m、東端では標高457.3mで、東西の比高差は1.75mである。さらに、発掘区北側に小さな谷部が陥入していることが判明した。谷部の規模は、幅0.7～0.8m、深さ1.2m前後で底は平らとなっている。底に無遺物の淡褐色砂と暗茶褐色腐植土が互層に堆積した後、奈良時代の遺物を少量含む暗褐色腐食質シルト、12～13世紀の遺物を包含する灰色礫混じりシルト、灰褐色礫混じりシルト、黄灰褐色礫混じりシルトが堆積して埋没している。

遺構検出は砂混じり黄灰色粘質シルト及び地山の上面で行ない、古代(7～8世紀)の竪穴建物、中世(13世紀)の独立柱建物、柱列、土坑、溝などを確認した。その後、砂混じり黄灰色粘質シルトを掘削し、縄文時代の遺物分布と遺構の有無を調査した。以下に、それぞれの概要について述べる。

i. 古代の遺構

古代の遺構には、S B01・02がある。なお、奈良時代の遺物は中世の溝S D01や北側の谷部からも少量出土し、谷側の低い場所に散布する傾向がみられる。

S B01 (図151) 南北2.86m以上、東西2.95m、深さ0.1mの方形竪穴建物と考えられる。地形が高い北・西側では、崩れによって輪郭が約0.3～0.5mほど外側へ広がっている。水田造成時に全体が大きく削平され、S D01によって南東側が大きく削られていて、残存状態は非常に悪い。床面を精査したが、柱穴はなかった。東壁から0.2m内側で長さ約1m、幅0.1m、深さ0.02～0.04mの浅い溝を検出したが、周壁溝の一部となる可能性がある。明確なカマド跡はなかったが、北西隅に地山を一段掘り残したところがあり、その南側で焼土・炭が混じる灰褐色土上の堆積を認めたので、北西隅にカマドが存在した可能性を想定できなくもない。床面には地山に含まれる礫が少なからず露出し、使用時の床面は整地されていた可能性が考えられるが、粘土の痕跡は認められなかった。

床面からは、4箇所に分かれて土器が出土している。中央北側で土師器杯C 2点・須恵器杯G 1点が東西に並んでおり、その東側1.1mの箇所から須恵器盃1点



图 150 I. 発掘区平面図 (1/200)

が出土した。西壁沿いでは南北に大きく分かれて土器が出土しており、北側の箇所では須恵器杯Gと杯G蓋が西壁上から転落したような状態で出土し、南側の箇所では重なり合った須恵器杯H 2点と少し南へ離れて須恵器杯H蓋 1点が認められた。これらの土器からみて、SB01は7世紀後半頃に廃棄されたとみられる。

S B02 (図152) 南北6.55m、東西5.1m、深さ0.4mの長方形竪穴建物である。南北棟建物であったと考えられ、主軸方向はN3°Wとほぼ真北を示す。幅0.2m、深さ0.05mの周壁溝がカマド付設備箇所などで一部途切れながらも全周するが、南東隅では壁面に沿わず柱穴上を斜めに横切っている。柱穴は四隅に著しく寄った位置の一つずつ認められ、その深さは地形的に高い西側の柱穴が0.15mと浅く、東側の柱穴が0.3～0.35mと深い。柱の太さは、その痕跡から0.1～0.15mとみられる。柱抜き取り痕跡は、南東隅の柱穴にだけ認められた。カマドは北壁東側と東壁中央・南側の3箇所に設置されていたが、そのまま放置されて崩れ

た状態の北壁東側カマドに対して、東壁中央・南側カマドは人為的に壊された状態であった。したがって、3つのカマドは同時に機能したのではなく、当初につくられた東壁中央・南側カマドを壊した後に北壁東側カマドを構築したと考えられる。

東壁中央カマド (図153) は、東壁中央で確認した南北0.5m、東西0.37mの橙色焼土面と、焼土・炭を多く含む橙褐色土・暗灰褐色土で埋まった南北0.75m、東西0.55m、深さ0.15mの窪みだけが遺存していたに過ぎない。橙色焼土面は西側の窪みに向かって緩やかに傾斜している。また、東壁南側カマドから壁面沿いに接続する橙色粘土面が認められた。その残存具合からみて、当初に構築された東壁中央カマドを少し南側に移設し煙出しを整備したのが東壁南側カマドであると考えられる。

東壁南側カマド (図153) は東壁中央カマドのすぐ南側にあり、南北1.0m、東西1.05mの範囲に堆積する焼土・炭の広がりとして検出した。西側に炭を多く

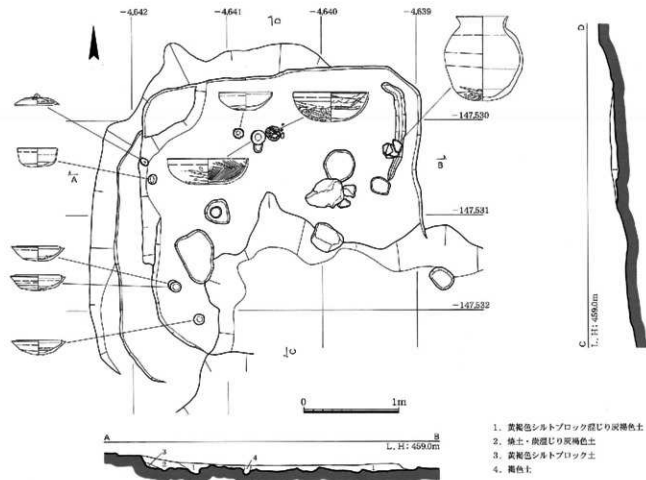


図151 SB01 平面図・断面図 (1/40)

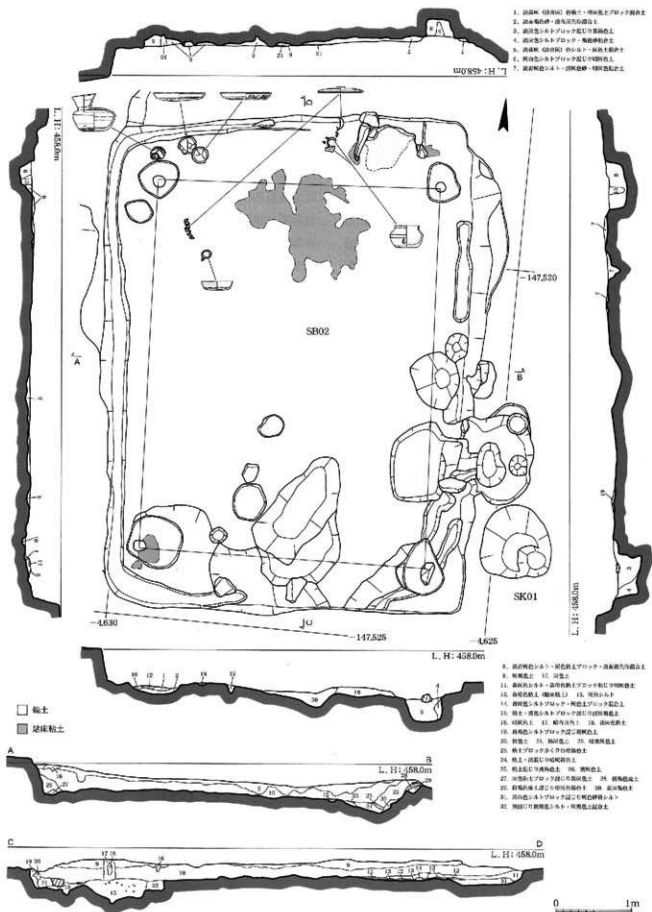


図 152 SB02 平面図・断面図・堆積土層図 (1/50)

含む黒褐色土が分布し、中央から東側にかけて焼土が分布するので、焚口を西に向けていたことが想定できる。カマド跡の底面は、中央で深さ0.1mほど窪んでから東へと傾斜して上がっていく。東壁との接点で一端くびれた後、東壁面外に突出する煙出しが取り付けく。煙出しは、南北1.35m、東西0.8m、深さ0.27mの楕円形で、カマド跡との接続部分を一段深く掘り込んである。カマド跡中央は橙色焼土や炭を多く含む橙褐色土・暗褐色シルトで埋め立てられており、明確な焼土面が遺存しない点から一度掘り返して壊されたものと考えられる。東壁との接点付近からは、表面が焼けた人頭大の石が2個南北に分かれて出土した。焼石の周辺は灰褐色土・橙褐色土が残り、その周辺に黄褐色粘土の貼り付けが認められた。南側焼石はカマド内

部に倒れ込むような状態で検出されたので、本来はカマド右袖に立てられていた石が廃棄時に倒れたものだろう。

北壁東側カマド(図154)は東西0.97m、南北0.6mの規模で、南側の焚口方向に向かって八字形に左右の袖が開く。カマド本体は基本的に黄褐色粘土で構築されているが、左袖のみ扁平な花崗岩を立ててつくる。右袖には、先端部のみ花崗岩礫が残る。カマド内壁面は橙褐色に焼けている。カマド上部は崩れて残っておらず、奥壁で高さ0.15mが遺存したに過ぎない。明確な煙出しは認められなかったが、左袖石の北端に接して一枚の扁平な花崗岩がカマドに向かって傾斜するように置かれてあり、これが煙出し底部の痕跡となる可能性も想定できる。カマド検出時に左袖石の西側で

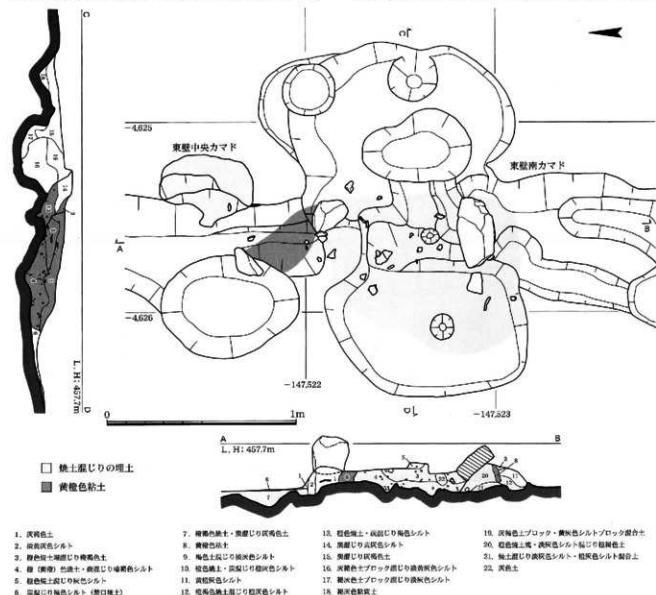


図153 S B 02 東壁南側カマド平面図・断面図 (1/20)

長さ0.36m、幅0.15mの焼けた花崗岩が崩落した黄橙色粘土と共に出土しているが、これも煙出しに関わる石材であったのかもしれない。その場合、煙出しは北西隅に取り付いていたことになる。また、カマド北東隅の下から0.08m×0.04mの円礫1個と須恵器甕体部片1点が南北に並べられた状態で出土した。カマド構築時の祭祀に関わる遺物と思われる。

北壁東側カマドの構築順序は、橙色焼上粒・黄橙色粘土粒が混在する淡灰色シルト（一部は熱で赤変して橙灰色シルト）でまず整地し、あらかじめ掘り窪めておいた箇所へ左袖石を設置してから、北東隅に円礫1個と須恵器甕体部片1点を置いて黄橙色粘土でカマドの周壁を構築する。カマド床面には黄橙色粘土を特に敷いておらず、整地土が直接硬く焼け締まっていた。右袖先端の花崗岩は最後に設置されており、袖の形状を保持する目的で置かれたものだろう。

床面は、凹凸のある地山面に土を入れて整地し、部分的に黄橙色粘土で貼床してあった。南側中央には南北1.8m、東西1.15m、深さ0.3mの不整形土坑があり、

焼土・炭を含む淡灰褐色土で埋め立てられていた。そして、その西から南側にかけて3つの石が平面三角形に置かれていた。平らな面を上にして床面に置かれてあり、入り口などの施設に伴う礎石ではないかと思われる。

床面からは、北西隅の近辺2箇所と北壁東側カマドの西側1箇所に分かれて土器が出土している。北西隅の近辺では、北壁西端に沿って西から須恵器平瓶1点、土師器皿A2点が置かれてあり、その南側1~1.2mの位置に須恵器杯A1点と細片化した杯B蓋1点が散在していた。ただし、この杯B蓋の破片は北壁東側カマドの周辺にも散布しており、原位置を保つものではないらしい。北壁東側カマドの西側からは、須恵器短頸壺1点が割れた状態で出土している。また、鉄器が3点見つかっており、西側壁溝内と東壁中央カマド跡埋土から刀子、床面北東側から紡錘車が出土した。

この他にも、奈良時代の須恵器・土師器が埋土から散漫に出土しているが、いずれも土砂の流入と共に埋没したものである。

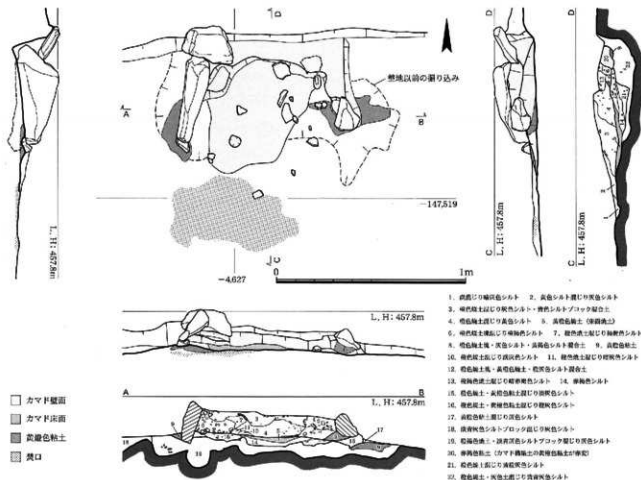


図154 SB 02 北壁東側カマド平面図・断面図 (1/20)

S B02ではカマドを2度も造り替えている痕跡が認められるので、比較的長期間にわたって人がここに居住していたと想定できる。そして、床面上土器からみると、8世紀前半頃にS B02が廃棄されたと考えられる。

S K01 S B02の南東隅に接して掘削された南北0.95m、東西0.93m、深さ0.4mの円形土坑である。直径0.4mの円形に南東隅が一段深く掘り込まれている。埋土には炭が多く含まれていた。出土遺物や埋土の土質から判断してS B02と同時代の遺構ではない

かと思われる。

ii. 中世の遺構

中世の遺構には、掘立柱建物S B03、掘立柱列S A01・02、土坑S K02、溝S D01・02・03・04、石組遺構S X01がある。これらの遺構は、等高線に沿って緩く弧を描く南北方向の素掘溝よりも古い。

S B03 (図155) 南北2間、東西2間以上の東西棟掘立柱建物である。主軸の振れはN69°Eで、東側は水田造成時の切上によって壊されている。柱間は南北1.86m等間、東西2.02m等間、柱痕跡から推定できる

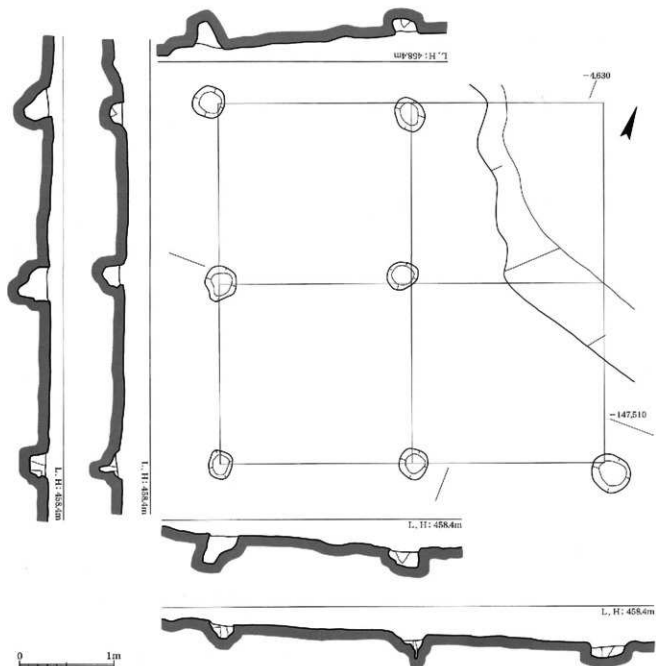


図155 S B03 平面図・断面図 (1/40)

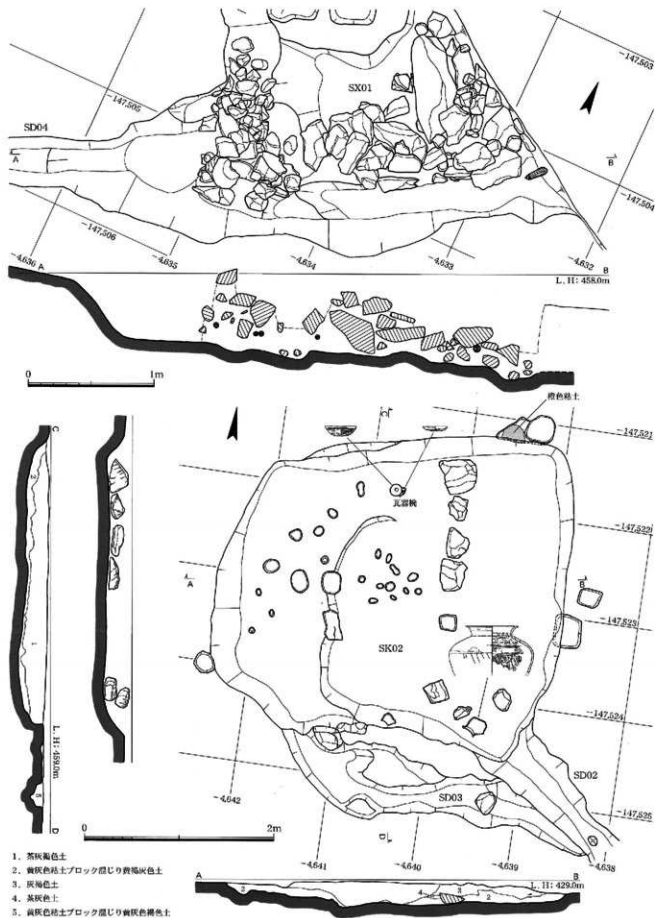


図 156 SX 01 (1/30)、SK 02・SD 02・03 (1/40) 平面図・断面図

柱の太さは約0.1mである。柱穴の大きさは0.3～0.4m、深さは0.2～0.3m。柱穴埋土から13世紀中葉頃の上器が出土した。

SA01 南北4間の掘立柱列で、主軸の振れはN33°30′Eである。柱間は、南から2.05m、2.05m、2.1m、2.5m。柱穴の大きさは0.2～0.25m、深さは0.05～0.15m。

SA02 南北5間の掘立柱列で、主軸の振れはN20°Wで、SB03の主軸とほぼ直交している。重複関係からSK02よりも古い。柱間は、北から2.2m、2.25m、2.25m、2.05m、2.15m。柱穴の大きさは0.3～0.4m、深さは0.1～0.35m。

SK02 (図156) 南北3.4m、東西3.65m、深さ0.3mの東西にやや長い隅丸台形を呈する土坑である。南東隅にSD02が接続する。また、南辺の外側にはSD03が取り付く。埋土は上下2層に大きく分かれ、上層は茶灰褐色土・灰褐色土・茶灰色土でしまりが無い。それに対して、下層は黄灰色粘土の地山ブロックが存在する黄褐色土で硬くしまっている。北半中央の東寄りに4つの石を南北に連ねた石列がある。石列は底に接して並べられており、面を西側に揃えている。この石列から南へ約1m離れた延長上にも1つの石が置かれている。石材は花崗岩4石とチャート1石である。底の北西側には小さな穴が集まっている。中央北端の下層上面から瓦器柄1点が伏せられた状態で出土した。この他に、南東隅から常滑産糞1点が出土している。これらの出土土器からみて、13世紀中葉頃に埋没した土坑と考えられる。

SD01 発掘区南辺に沿って南西から北東方向へ流れる溝で、溝の南肩と北東端は水田造成時の切土によって失われている。したがって、本来の規模は不明であり、現状で幅2m以上、長さ22m以上、深さ0.4mである。埋土の検討から、一度埋没した後北側へ寄せて再び溝を掘削していることが判明した。そこで、初めに掘削された溝をSD01(古)、再度掘削された溝をSD01(新)とする。SD01(古)の埋土は、下層に淡灰色礫混じり砂、灰色粘土・淡灰色砂、上層に淡黄灰色シルトと淡灰色砂の互層が堆積している。水流の繰り返しによって埋没していることがわかる。SD01(新)は幅約1m、深さ0.3mで、炭混じりの暗褐色土で埋まっている。SD01(古)の堆積層から

13世紀前半頃の土器、SD01(新)の堆積層から13世紀前半～中葉頃の土器が出土した。

SD02 長さ6.3m、幅0.4m、深さ0.2mの溝で、SK02の南東隅から始まり、SD01に接続して終わる。底での高低差は南北で約0.4mである。埋土はSK02側で黄灰褐色土、SD01側で明灰色粘土となる。SD01(新)によってSD02の埋土が切断されており、SD01(古)の時期に機能していたと想定される。

SD03 (図156) 長さ3.45m、幅0.5～0.6m、深さ0.15mの溝で、埋土は黄灰色粘土・ブロック混じりの黄灰褐色土である。SK02の南西隅とSD02に接続する。深さがSK02・SD02よりも浅く、SK02から南へあふれた水を受けてSD02へ流すための副次的な溝であろうか。

SD04 北側谷部の南肩に沿って掘削された東西方向の溝である。長さ9m、幅0.4～0.6m、深さ0.2mで、東端がSX01と接続する。埋土は灰色粗砂で、13世紀中葉頃の土器が出土した。

SX01 (図156) SD04の東端から約0.5m急激に下がる落ち込みがあり、そこへ乱雑に積み上げられた東西方向の石組が検出された。石組の長さは2.6m以上で、発掘区外東へと続いており、おそらく谷部と接続しているのだろう。石組は、SD04との接続部分とそこから谷部へ続く部分の2箇所に分けられる。SD04との接続部分では、西からの水流を堰き止めるかのようにSD04と直交方向に上砂を交えながら小ぶりの石を積んでいる。一方、谷部へ続く部分は大きめの石を重ねるように配置して暗渠のように組んである。このような石組状態からみて、谷部からSD04に分け入れた水流を調節する機能が推測できる。

iii. 縄文時代の遺物包含層と遺物分布

縄文時代遺物包含層は、主として砂混じり黄灰色粘質シルトとその直上層である橙黄色砂質シルトの2層で構成される。この内、砂混じり黄灰色粘質シルトは、発掘区の中央から南東部分にかけて広がり、橙黄色砂質シルトは発掘区東端付近のみ遺存する。層厚は、両層ともに0.05～0.15m程度しかない。

これらの範囲内で、遺物が多数検出される箇所において補足調査区を設け、遺物包含層の掘削を行った。この結果、補足調査区内の旧地形は、西から東へ下る緩やかな斜面地であり、補足調査区の北西部分では、

北西から南東へ向かって下る小規模な流路跡があることが分かった。流路跡は、灰白色粗砂や淡黄灰色砂質シルトといった地積層で埋まっており、遺物量は少ないものの縄文時代遺物を包含している。これらは、重複関係から砂混じり黄灰色粘質シルトより新しい。

なお、流路跡の上面にて検出した風倒木痕と思われる凹みから、早期末前期初頭の塩屋式土器2点と多数の石器が見つかったことから、縄文時代遺物包含層は少なくとも前期初頭以前のものであると考えられる。

これらの調査で出土した遺物には、縄文土器15点、石器627点がある。この分布を地山上面の旧地形図に投影し、検討を行った(図157)。これを見ると、土器では先述した塩屋式2点と、補足調査区南東部から出

した条痕文土器1点を見ることができる。ともに早期末前期初頭のものであることから、遺物包含層をこの時期に比定することができるだろう。

石器分布では、塩屋式が出土した付近や、補足調査区東端のX=-147,522.4m; Y=-4,637.0m付近に小規模な集中が見られる。これらは共に風倒木痕と思われる不定型な凹みに近接することから、そこへ2次堆積したものの可能性が高い。その他、補足調査区の東端や南端にやや多く分布する傾向が見て取れる。

次にY=-4,624mライン土層図に投影した垂直分布(図159)を見ると、遺物は縄文時代遺物包含層内に散漫に分布する様子が窺え、層境に分布のピークが見られない。Y=-4,633mライン土層図への投影(図



図157 縄文時代遺物包含層補足調査区縄文土器・石器平面分布図(1/200)

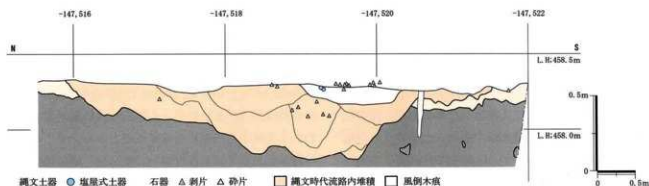


図 158 Y = -4,633 ~ -4,635 m間縄文土器・石器垂直分布図 (Y = -4,633 mライン土層図に投影)

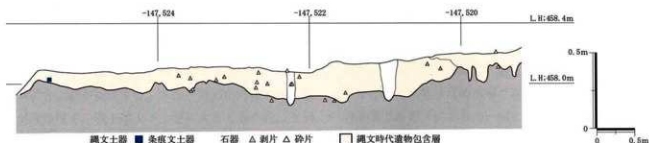


図 159 Y = -4,623 ~ -4,625 m間縄文土器・石器垂直分布図 (Y = -4,624 mライン土層図に投影)

158) では、風倒木痕と思われる凹み埋土と流路堆積に重なる遺物分布を見ることができるが、こちらも散漫な分布を呈するのみである。塩屋式土器と石器が風倒木痕や流路埋土の上面に集まる傾向はあるが、この面は古代～中世の遺構面であるため、原位置を保っているとは言い難い。

以上のように遺物は全て2次堆積したものの可能性が高く、地形に沿って上方から流入してきたものと考えられる。後世の削平によって発掘区西側の高い部分には全く遺物が分布しないが、地形的に考えればL発掘区の西側に早期末前期初頭の中心的な活動場所があったとするのが妥当だろう。

(2) M発掘区 (図160)

試掘調査第70発掘区で16世紀の溝の一部を検出したため、その広がりを確認するためにM発掘区を設けた。L発掘区の調査成果と合わせて考えると、尾根⑥と尾根⑦の間に西から張り出す小さな微高地があり、M発掘区はその先端部北側に位置することが分かる。

基本的な層序は、耕土の下に暗青灰色土 (若しくは橙灰色土)、明灰色粘土、砂混じり暗青灰色粘土が続いて花崗岩質岩盤 (表面風化して軟質) の地山となる。地山の標高は、発掘区北西側が最も高く460.5 m、南東側で458.6 mである。また、発掘区の北側で

幅4 m以上の谷部を検出した。谷部の層序は、砂混じり暗青灰色粘土の下に砂混じり灰色粘土、暗灰色粘質シルト、褐色腐植土と流路堆積が続き、花崗岩質岩盤の地山となる。谷部の標高は、北西底で459.3 m、南東底で458.3 mである。

検出した遺構には、中世の溝、土坑がある。以下、主要なものについて述べる。

S D05 試掘調査第70発掘区で検出した溝である。幅1.3 ~ 2.3 m、深さ0.3 ~ 0.6 mで、発掘区中央部を北西から南東へ流れる。溝には2時期あり、S D06と接続するS D05 (古) と溝を改修してS D07と接続するS D05 (新) がある。S D05の底面には木材を横に並べ、杭留めした護岸施設があるが、これはS D05 (新) に伴うもので、南西側を掘りなおし、北東側の土砂を土留めしている。これによってS D05の幅は当初の半分ほどになり、接続するS D07もS D06の半分以下の幅になったと考えられる。S D05 (古) の下層埋土は橙灰色粗粒砂および中粒砂、S D05 (新) の上層埋土は灰色砂質シルトおよび細粒砂であり、下層から16世紀前半の土器、上層から16世紀後半の土器と永楽通寶1枚が出土した。

S D06 幅1.0 ~ 1.8 m、深さ0.1 ~ 0.4 mで、西南西から東北東へ向かって流れる溝。埋土は、下層が橙

灰色中粒砂で、上層が灰色粘質シルトである。SD05（古）と接続していたと考えられ、埋土から16世紀前半の土器が出土した。

SD07 幅0.3～0.5m、深さ約0.1mで、南西から北東へ向かって流れる溝。埋土は、灰白色細粒砂および粗粒砂である。SD05（新）に接続しており、埋土から16世紀後半の土器が出土した。

SD08 幅0.3～0.4m、深さ約0.1mで、南西から北東へ向かって流れる溝。重複関係からSD07より新しい。埋土は灰白色粗粒砂で、16世紀前半から後半の土器が出土した。

P1 直径約0.3m、深さ約0.2mの小土坑。埋土は灰色砂質シルトである。16世紀後半の鉄軸天目茶碗が出土した。



図160 M発掘区平面図 (1/100)

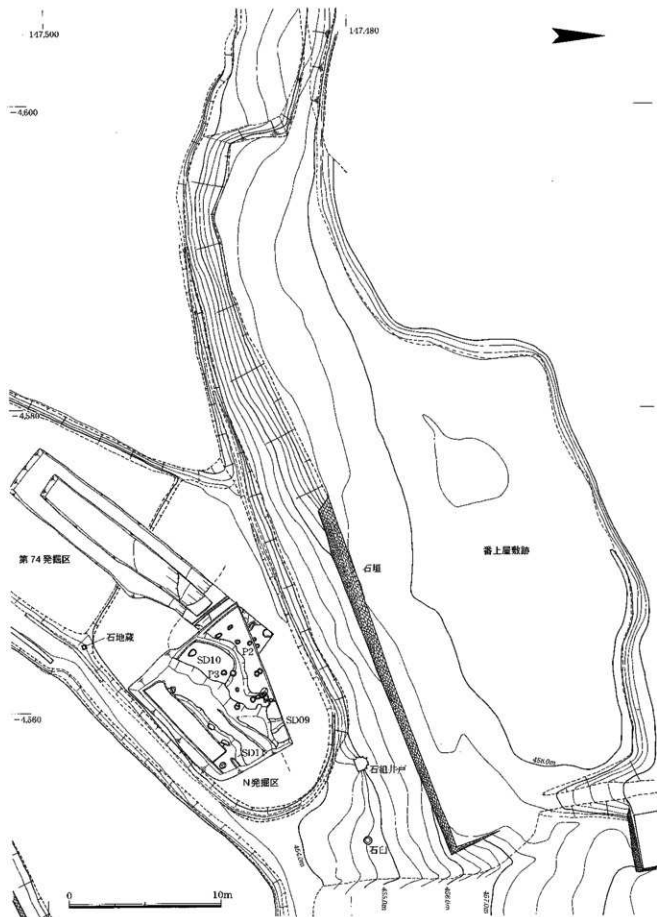


図161 番1:屋敷及びN発掘区平面図 (1/250)

(3) N発掘区 (図161)

調査地北東側には、尾根の南向き斜面を造成してつくられた大きな平坦面があり、「番土層敷跡」と伝えられている。その面積は約590㎡で、北側の斜面を削ってできた土砂を南東側に石垣を組んで充填し造成したと考えられる。石垣から南へ3mほど下がった位置には石組井戸があり、その東側5mのところ石臼1個が残っている。この番土層敷跡の南側に設けた試掘調査第74発掘区で中世遺構の一部を検出したため、その広がりを確認する目的でN発掘区を設定した。

発掘区内の堆積上層は、耕土・旧耕土の下に明灰色粘土、灰色礫混じり土が続いて褐色砂礫あるいは淡青灰色礫混じりシルトの地山となる。地山は南へ向かって下がっているが、さらに発掘区南端で急激に谷底へ落ちていく状態を確認したため、その部分については掘削を取り止めた。掘削範囲内での地山の比高差は約1mで、最も高い北西端の標高は453.75mである。試掘調査の成果と合わせて考えると、調査地点は尾根裾が小さく南側へ張り出す地形となっており、その上面から一部の斜面にかけて中世遺構が認められることが分かる。

検出遺構には、大きさ0.2～0.4mの小土坑と溝がある。以下に、主な遺構の概要について述べる。

P2 直径0.3m、深さ0.1mの小土坑である。埋土から12世紀中頃の瓦器碗底部片1点が出土した。

P3 直径0.25m、深さ0.1mの小土坑である。底か

ら土師器皿1点が割れた状態で出土した。

S D09 長さ1m以上、幅0.6～1.0m、深さ0.2mの南北溝である。埋土から13～14世紀の土器が出土した。

S D10 長さ5.8m以上、幅0.5m、深さ0.3mの弧状を呈する溝である。埋土から12世紀頃の土器が出土した。

S D11 長さ4.6m以上、幅0.7～0.8m、深さ0.3mの溝で、地山の傾斜に沿って掘削されている。埋土は明灰色粘土を間に挟む灰色砂土で、16世紀前半頃の土器が出土した。

3. 出土遺物

(1) 縄文時代の出土遺物

i. 縄文土器 (図162、表24)

水間遺跡9次調査において出土した縄文土器は総数僅か15点、約150gである。早期中葉の高山寺式が2点、約55g、早期末～前期初頭の塩屋式が2点、約20g、条痕文土器が3点、約24g、中期～後期の土器が4点、約40g、時期不明の土器が4点、約12gである。いずれも原位置を遊離した状態で出土したが、概ね早期中葉、早期末前期初頭、中～後期の三時期に分けられる。以下出土土器の報告を行う。

1・2は外面に粗大な楕円文を施すものである。1は底部付近の破片で、尖底になると考えられる。内面はナデにより平滑に調整されている。2は器壁が厚く、繊維を多く含んでいる。内外ともに摩滅が著しい。

表 24 水間遺跡出土縄文土器観察表

発掘番号	X (m)	Y (m)	H (m)	層位	時期	形式	器種	特徴	調査	器高(cm)		出土		位置		備考			
										最大	最小	砂層	基土	内面	外面		前面	後面	
1				層黄灰色砂土	早期中葉	高山寺式	深鉢形	押型文	外縁円文	1.1	0.9	○	○	○	○	1097/4 1097/4	1097/4 1097/4		
2	L発掘区 X30-Y40区			黄褐色砂質土	早期中葉	高山寺式	深鉢形	押型文	外縁円文 内ナデ	1.5	1.2	○	○	○	○	1098/3 にない	1098/3 にない	25/4/1 黄灰	
3	-147319.286	-4634.943	458.266	黄灰色シルト	早期末 前期初頭	条痕文	深鉢形	口縁 隆起部付	外ナデ・条痕 内ナデ・ユビオサシ	0.5	0.4	○	○	○	○	25/4/1 黄灰	1098/4 にない	25/4/1 黄灰	種物シ
4	-147319.294	-4633.793	458.276	黄灰色シルト	早期末 前期初頭	条痕文	深鉢形	口縁 隆起部付	外ナデ・条痕 内ナデ・ユビオサシ	0.5	0.3	○	○	○	○	25/4/1 黄灰	1098/4 にない	25/4/1 黄灰	内外 焼付層
5	L発掘区 X38-Y42区 S001			層黄灰色砂土	早期末 前期初頭	条痕文土器	深鉢形	条痕文	外縁直 内ナデ・条痕	0.8	0.80	○	○	○	△	3/5/6 にない	1098/4 にない	25/4/1 黄灰	
6	L発掘区 X34-Y42区 中世遺構等			層黄灰色シルト	早期末 前期初頭	条痕文土器	深鉢形	条痕文	外縁直 内ナデ・条痕	0.8	0.45	○	○	○	○	3/5/4/4 にない	7/5/5/6 にない	3/5/4/4 にない	3/5/4/4 にない
7	-147323.433	-4634.782	467.812	層黄灰色シルト	早期末 前期初頭	条痕文土器	深鉢形	条痕文	外縁直 内ナデ・条痕	0.45	0.4	○	○	○	○	3/5/4/4 にない	7/5/4/4 にない	1098/4 にない	
8	L発掘区 X24-Y29区 S002上層			層黄灰色シルト	中期～ 後期	深鉢形	深鉢形	深鉢形	外縁文? 内ナデ	0.8	0.65	○	○	○	○	25/4/1 黄灰	1097/4 にない	1098/4 にない	
9	L発掘区 X28-Y29区 S002上層			層黄灰色シルト	中期～ 後期	深鉢形	深鉢形	深鉢形	外縁文? 内ナデ	0.75	0.6	○	○	○	○	25/7/2 黄灰	25/7/2 にない	5/4/1 黄灰	
10	L発掘区 X20-Y29区 中世遺構等			層黄灰色シルト	中期～ 後期	深鉢形	深鉢形	深鉢形	外ナデ 内ナデ	0.8	0.8	○	○	○	○	1098/4 にない	1098/3 にない	25/4/1 黄灰	
11	L発掘区 X28-Y29区 S002上層			層黄灰色シルト	中期～ 後期	深鉢形	深鉢形	深鉢形	外ナデ 内ナデ	0.5	0.75	○	○	○	○	1098/2 にない	25/7/2 にない	25/5/1 黄灰	
12	L発掘区 X24-Y29区 S002上層			層黄灰色シルト	中期～ 後期	深鉢形	深鉢形	深鉢形	外縁直ナデ 内ナデ	0.6	0.45	○	○	○	○	1092/1 黄灰	25/7/2 にない	25/2/1 黄灰	12上層一 層
13	L発掘区 X24-Y29区 S002			層黄灰色シルト	中期～ 後期	深鉢形	深鉢形	深鉢形	外縁直ナデ 内ナデ	0.8	0.5	○	○	○	○	25/9/4 にない	25/7/2 にない	25/2/1 黄灰	12上層一 層